明治四十一年九月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

九月

女子文壇



第四年第十三號

東京女子文壇社發行

女子文壇第四年　九月一日發行





第十三號目次

第五回内國勸業博覧會賞牌及褒狀受領

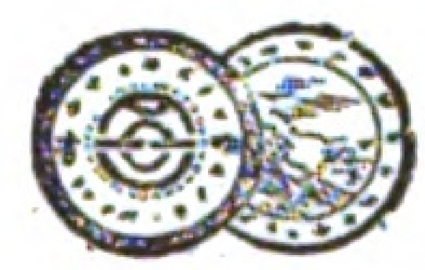
壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雑踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當なり東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

れり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及び弊店が多年研究の上製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

緑、藍、紅彩蝶番ひ鑵詰 八錢

別製鑵詰 五拾錢

大袋 二錢　小袋 一錢

登録商標

西洋色白くなるあらひ

SUMIRE
WASHLNG IOWDER

壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製 [電話浪花二一七六五番]

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

(甲の四)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

自然の鏡



大江原色版部製版

此繪に現れて居る場所は英國北ウエールス地方、コンウエイ河の流域に走つゐる大山脈の一部分です、繪には山腹の美くしい丘陵から、瀬湖の便利な沃野、こんもりした森の繁み、暗い山陵起伏のさま、或はそれらの景色の澄み切つた水に映つてゐるさまなど、平和な、閑寂な趣味が感じられます、筆者はピーター、ゲントと云ふ人で、此原作はパリープレのチールカー美術院に在ります

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製弐劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の白色藥を用ひて發効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓弐拾錢特別製分壹圓八拾錢

飲んで色白くなる輸入新藥

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつつある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾弐圓拾錢

(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上弐圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚を潤澤軟密**にし**色を白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む)

以上參種 **專賣元** 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ふれば二三ケ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢弐劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分弐圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を嫉み近時續々怪しき無効な**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脱せよ (注意)近時續々無効の**類似偽藥**顯る深く注意ありて玉石混同視する勿れ

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分弐圓廿錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上弐藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

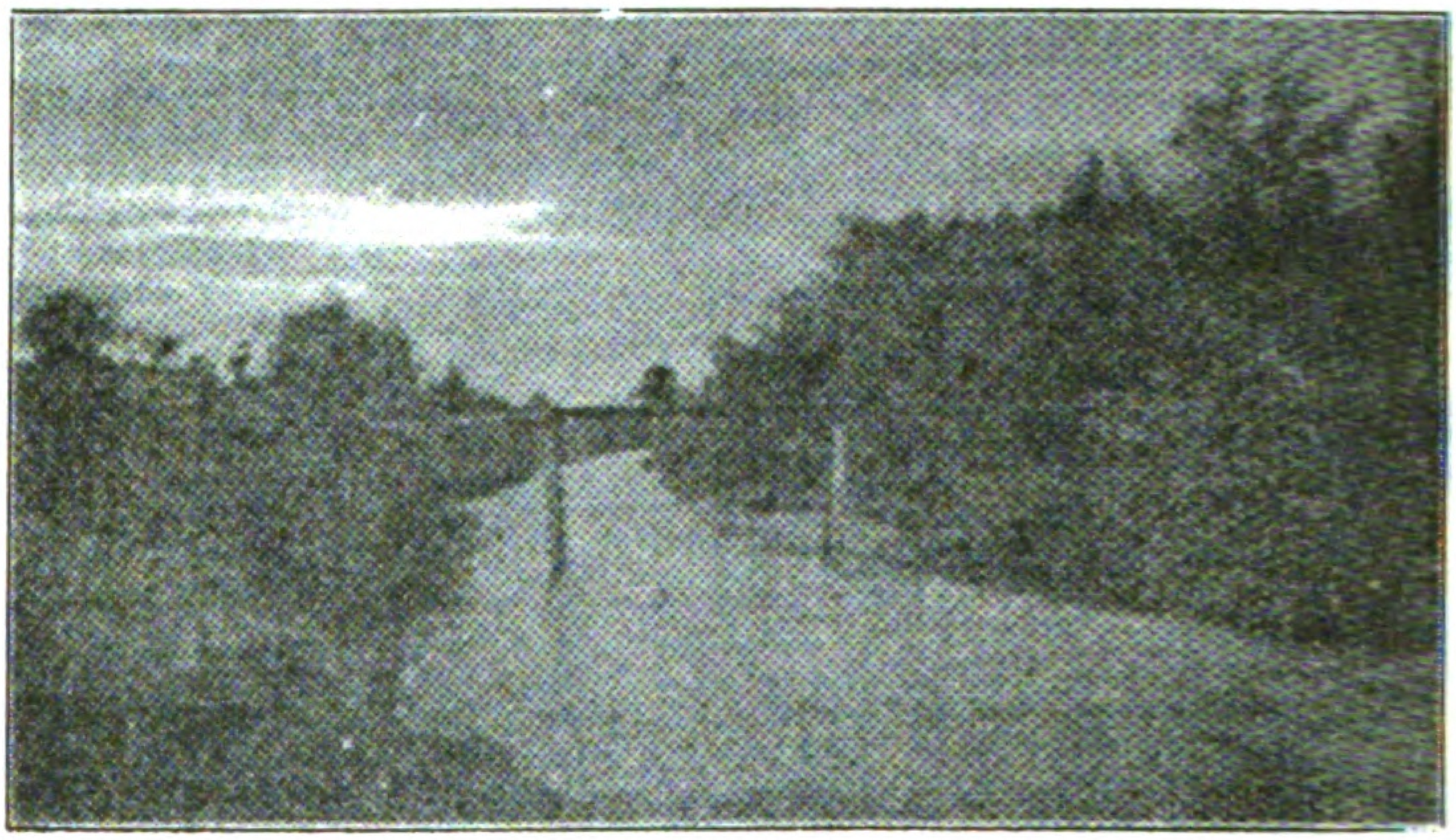


美術造花材料
發賣御案内
ATLAS. SHEARS
北米合衆國、アトラス會社製
總ニッケル鋏數種新着
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
特電話浪花一六四三番
電信略號(アマウ)
振替口座四九七〇番
美術造花材料商
營業案内御入用の御方は郵券四錢封入本欄切り取り御申込みを乞ふ

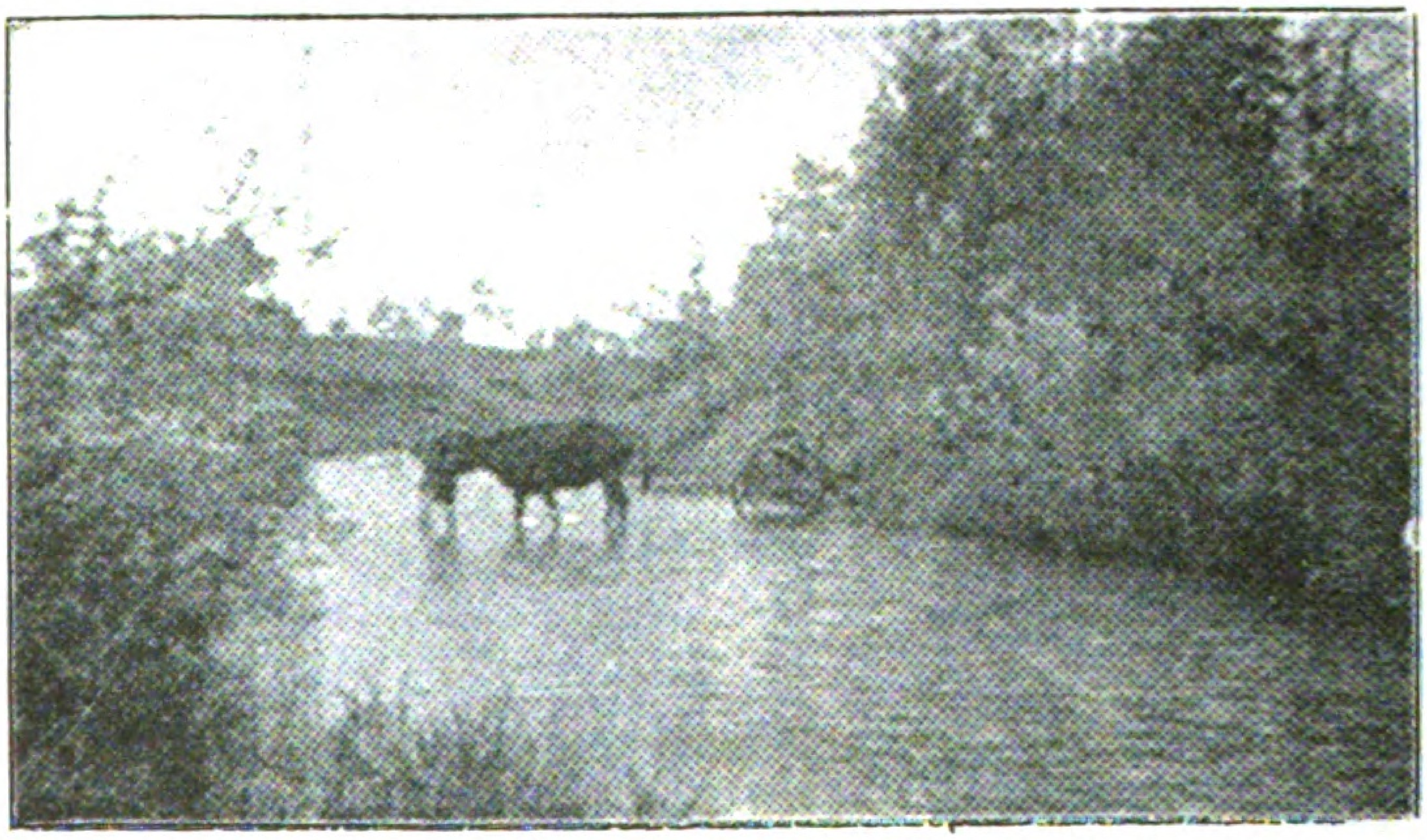

透明
無毒
水晶おしろい
東京通塩町
大和屋



攝津高槻附近の景（其一）



同（其二）



同（其三）

「赤松久子寄」

誌友面影（十六）



（大阪）金子のぶ子





（川越）木下澤子

（福岡）手尾愛子

（越後）山田かた子

（臺灣）佐藤愛子





續々お寫眞の寄送を願たい
用濟の上お返し申します

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

滋賢回春 記臆增進充

本劑は獨逸大醫スクリーボツト氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大に增進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至るべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力欠乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すると誓て確證する所なり(効驗)腦力を明快にし腦病神經病頭痛を全治し逆上を引下げ記臆力を增進するは勿論●健忘症●記臆欠損症●腦充血●便秘●不眠症●神經衰弱症●婦人ヒステリー●心悸亢進●腦力乏弱症●神經系諸病●精神疲勞●身體衰弱●貧血諸病●情慾減退●遺精病等の諸症に用ゆれば其病根を斷ち筋肉を太め體量を增し強壯の身體となり人世天賦の快樂を受くるに至る現世紀唯一の特効新劑なり:::常に腦神經を過勞する人逆上腦充血を未發に豫防せんとする人、腦神經を健全にし精神快活に記臆强健を望む人は論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

(藥價)七週分參圓五拾錢 五週分貳圓六拾錢 參週分壹圓六拾錢 壹週分六拾錢(送料)各拾錢充

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一**ばい毒**根治特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓って根治**すること確證す從來醫療賣藥等百方手を盡するも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割增しの事

●以上二藥專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館藥房**

▲世界唯一

麻病消渇の根治新藥

麻滅(りんめつ)

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付軽症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ 藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

有効無害 奏効確證 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓拾錢 着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

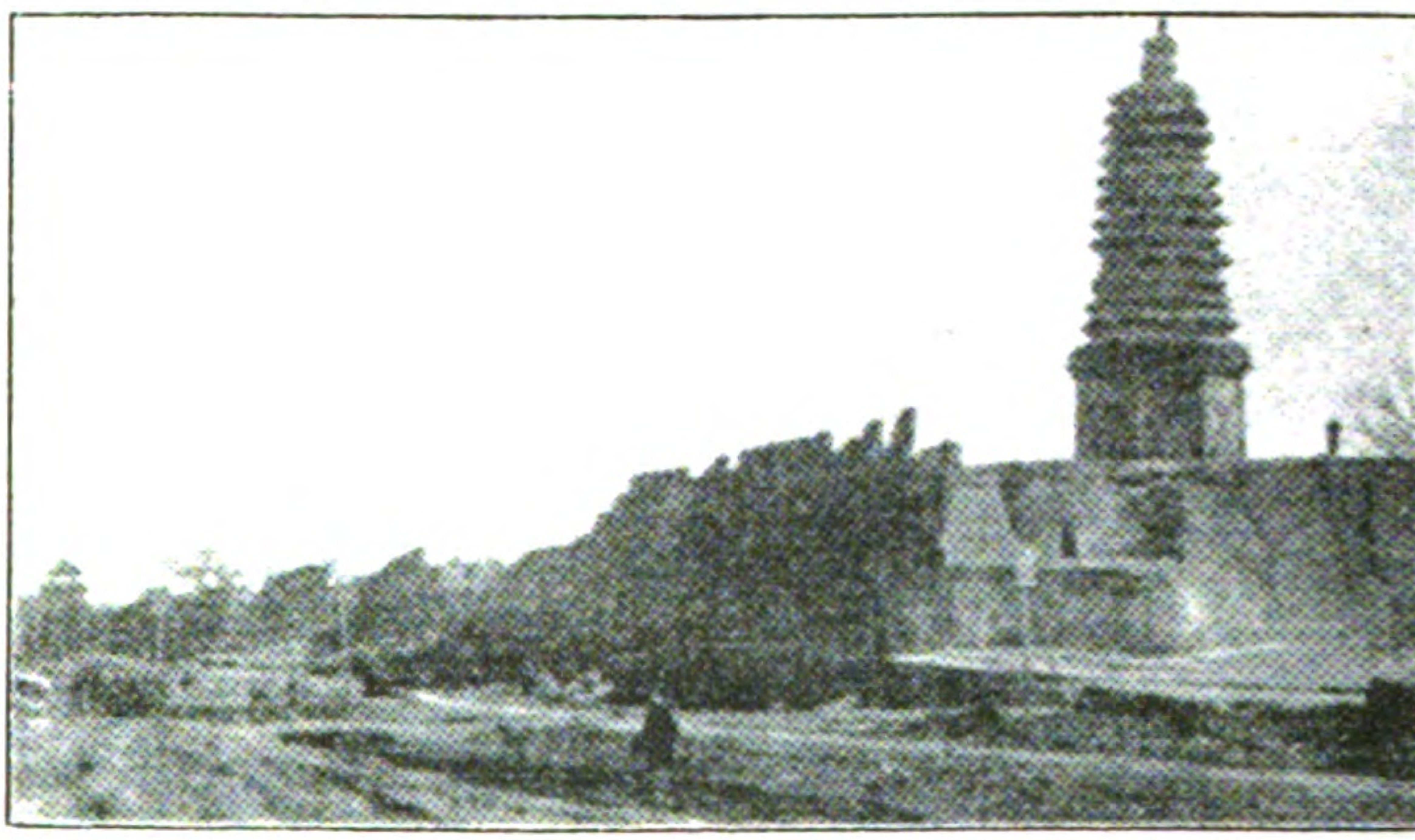
本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共陋物の疵、はつぽうはげの疵、やけどの疵、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑大瓶一個を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價送料共特別製大瓶貳圓卌錢▲中瓶同上壹圓廿錢

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**(電話下谷五四六番)

(丙の三)


鐵嶺東門外在明橋


鐵嶺城北面及白塔


鐵嶺西門外本通（平尾氏寄）



長崎産婆學校本年卒業生

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

●有効保險 前代未發

秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢△郵劵代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰門の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を滴良にする法●齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●毛髮の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ピットル酒製法●夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚さるインキ斑痕を除く法●●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●抜毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の[illegible]婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法●女を部屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●恪氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特效藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●記臆力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身鐵取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●眼瞼を治する法●黄疸を治する法●皺肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●痴氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを抜く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艷美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏朝子[illegible]溜新法●疊の汚染を落すす●落新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易[illegible]顏[illegible]新法●衣服に油の付たるを落す良法△以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館商店

生殖機病特効新劑……(獨逸新輸入藥)

●內服ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九十錢 郵劵貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授スヒーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能即ち陰萎病陽物無力腎虛神經衰弱遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虛弱手淫に起因する諸病早老者精液精蟲、缺乏不姙娠、冷症快美減少及び短小者等に用ひ輕症は四五劑重症は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を遂せしむるに天下無比可驚奇効ある最新發見藥也精力を增進し生殖器を強健に勃興して淫慾を著しく發動せしめ人生の最大快樂を得んと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効眞に如電光世にありふれたる誇大奇言を臚列する內地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

輸入一手專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日 目に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

●健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは萬古不動の明言なり

近世絶好の

腦神經病良藥

自然療法

レーベン

陸軍々醫正從五位醫學士 森友道先生證明

海軍々醫少監從五位 日向次作先生證明

腦神經系統專門醫學士 森繁吉先生證明

自然療法創始者醫學士 常持爲治先生發見

藥價

三十錠三十錢

百錠八十五錢

二百錠一圓六十錢

四百錠參圓

藥効

腦病、神經衰弱、ヒステリー、ヒポコンデリー、腦充血、陰萎、遺精、逆上、頭痛等の根本的療法として近世絶好の最良の藥物にして而かも熟練せる技術に依りて成功せる新式の錠劑なり夫の丸藥の類に非らす

發行所

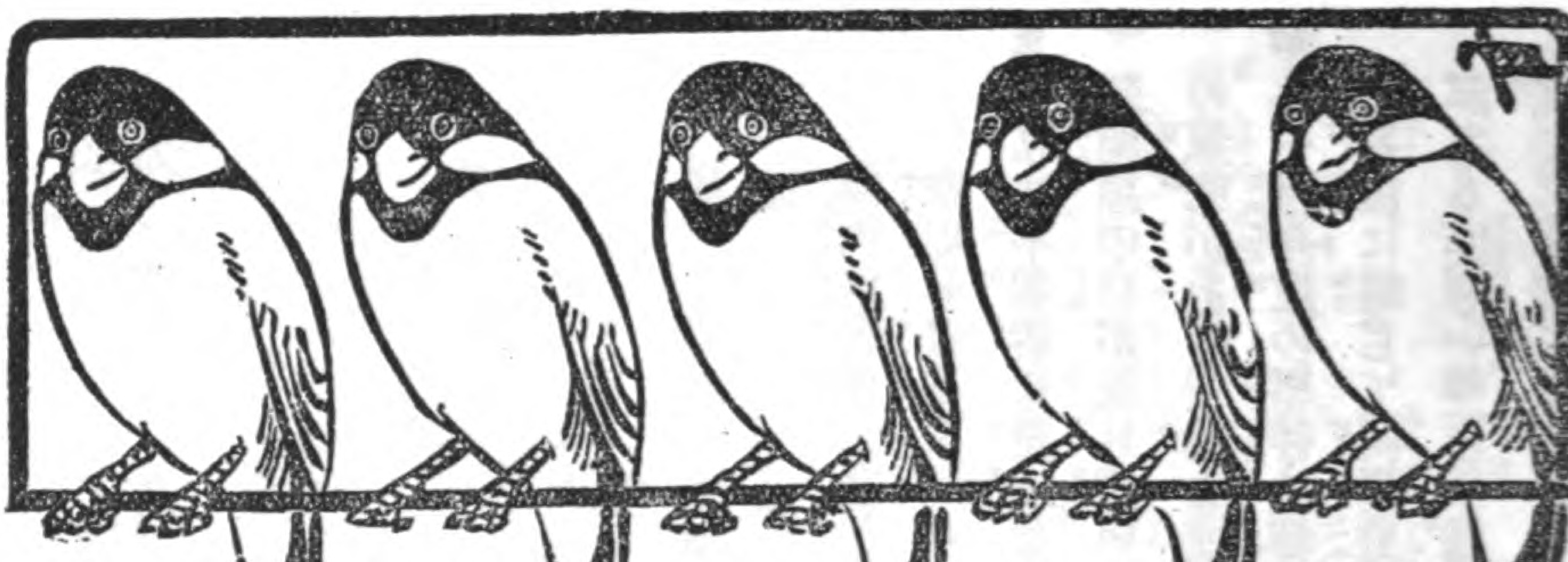
弘濟藥院

中南定太郎

東京市京橋區銀座弓町二十二番地

特長電話新橋四九五三番

振替貯金口座七七七七番



女子文壇 第四年第十三號

紀元二五六八年 （明治四十一年九月一日發行） 西暦1908

人を描け

今までの文人とか謂はれた人達は、花鳥風月だとか、雪月花だとか、兎角天然を主題としたものを風流と云ひ、韻事と稱して、文學上の價値のあるものとしたやうですが、それから見ると我が文學は非常に進歩したのは言ふまでもなく、天然の描寫も不可はないが、活きた人間の描寫が最も大事だらうと思はれます。人生の内部を貫いて居る生命の働き、それを表白すのが文學なら人間を描くと云ふことが一番大切なことになります、小説などは殊に然うです、諸嬢のお作りになる美文のやうなものでも然うです、詩歌でも然うです、活きた人間を歌ふ、之が文學の本領です、天然ばかり描かうとすると淋しくなる、野に立つても、山に上つても、我等は人間界に歸りたくなる如く、人生の眞相は人間を除いて、外に見ることが出來ないのです、文學者は天然にばかり憧憬て居れば好いと思つたのは誤解です、人間の背景として天然があるので、人を描く爲に、人を表はす爲に、遠くの山も言はねばならぬ、近くの林も描かねばならぬ、畢竟人間の動作、人間の感情に伴ふ天然の活動なら、文學として取扱ふ價値はあるが、平凡な天然觀にのみ安住して居るのは、文學に與することの疎い人と云はねばなりません。

九月（小）

日曜 六日 十三日 二十日 廿七日

二百十日 一日

社日 廿日

秋季皇靈祭 廿三日

脚本　確信（一幕）

佐野天聲

登場人物

榊　内務大臣
仝　夫人　晴子
荒川　警視總監
宮脇　警保局長
女彫塑家　那須時子
侍女　兩三人

場所　內務大臣別邸の一部

時　現今

榊內務大臣(私服)土耳古革の長椅子に凭り朝の珈琲を啜りながら荒川警視總監(公服)と對話、

荒川「私は不起訴に贊成しますが、唯うまくやらないと新聞屋の口が五月蠅いので、其れて岡君も多少躊躇の氣味があると見えます。

榊「一體今度の事件は藤野や安藤が馬鹿なのさ、毛利の妥協に應じて萬事宜敷くと出さへすれば對手も慾があるからいやとは言ふまい、其虛を衝いて一計畫立てさへすれば愬ら六ヶ敷、はならずとものの事だった、何うも目先の見えん奴には困るよ。

荒川「お說の通り、藤野も安藤も餘り千里眼の方ぢやありません、去年の日比谷事件などて見ても解ります。

榊「其れて君はなにかね岡の尻込みを道理だと思つとるかね。

荒川「さア、道理とも思つてはゐませんが、同情すべき事だとは思つてます。

榊「併し、新聞屋や世評に恐れて躊躇逡巡する樣な檢事正はお芽出度い骨頂だと吾輩は思ふ、第一左樣いふくだらん事件を麗々と審檢するといふのが間違つてる、宜敷く職權を利用して握潰すべきものだ、撰擧法違犯といふ範圍も解釋次第て狹くも廣くもなる、其手心を忘れられては爲政者の能力は零だ、今度逢つたら能く左樣言つて下さい、鯛以下の魚は逃げるに任かせて網を曳く、是が政治家の頭て又法律家の手腕だと、陳腐な言葉だが眞理は此うちにある餘り苛察に亙ると平地に波瀾を生じやすい、杓子定規程厄介なものは無い、法律を楯に取つて開き直る

奴は馬鹿者てす、何うか今少し神經を鈍くして貰はないと大國の料理番は勤まらん、解任といふ事に落が來る、ねえ、荒川君左樣ぢやないか。

荒川「御道理てす、能く岡君に說きませう、實際毛利の自首事件などは、一顧の價値も無いてすからなア。

榊「吾輩が政友會の一員だから藤野や安藤を庇護する——世評は恁うだ、岡君も恐らくこれに頭を惱ましてゐるのだらう、併しかまはんぢやないか、起訴すべき理由が無いから不起訴にする、其れだけだ、政友會も何もあつたものぢやない、道理を道理と認めて裁斷するだけの勞力で埒があく、實に一擧手一投足の勞に過ぎん、人間は同時に兩個の事を考へぬのが通則だ、私は二兎を追ふ者の一兎をも獲ぬといふ格言に重きを措く。

荒川「兎に角岡君も不起訴にする腹はあるてすから、格別面倒なしに局を結びませう、何れ後刻又お目にかかります。早朝からお邪魔致して恐縮てした（椅子をはなれる）

榊「お歸りてすか、何うか毛利事件は今申す通りぢやて、岡君によう云ふて下さい。

荒川「畏りました。

榊（戶口まて送り出て）失禮します。

荒川總監恭しく一禮して去る。

榊內務大臣以前の椅子に凭り、

榊「尻の穴の狹い奴ばかりて仕方が無い、幾ら針程の事を棒程にしたがるが人情でも、此頃の樣ぢや實に堪らん、殆ど裏店の嬶が、井戶傍で他人の貨を數へると一般ぢや、せゝこましいと云はうか五月蠅いと云はうか、些辟易せざるを得んて。

榊夫人晴子華美なる洋裝、急遽く扉を排して出て、榊を見て、

晴子「私はこれから愛國婦人會の用て一寸其處まて出ますが、留守にお時さんが見えたら今日は所天のだけにしておいて戴きたいッて左樣被仰つて下さいまし。

榊「よし〳〵。

晴子「私の分は今日で大抵すむ筈ですから、實は休みたく無んですけれど、昨日會頭さんからのお手紙で是非廢兵院まで行つて貰ひたいつて、たつてのお頼みですから、何うも已むを得ません、ぢや行つて參ります。

榊「お待ち、俺とお時さんと差向ひになつて、其處にお前といふ者がゐなかつたら、あとで何のかのと痛く無い腹を探られるだらうから、少々考へ物だが何うだらう。

晴子「其れア大丈夫で御ざいます、お時さんなら光源氏の前へ置いても心配のない尼さんですもの、痛くない腹なんか探りやアしません、御安心なさいまし。

榊「ほう左樣か、ぢや其事にして行くがよい、十分運動して來るさ。

晴子「お午餐前には戻りますから――。

榊「うん。

　晴子丁寧に辭儀して去る。引違へて侍女甲出づ。

侍女甲「御前さま、宮脇さまがゐらつしやいました。お通し申しませうか。

榊「おゝ、直ぐに。

　侍女甲去りて宮脇警保局長(公服)出づ。

宮脇(一通りの挨拶ありて座に就き)昨夜はあれから直ぐお歸りで御ざいましたか。

榊「總理大臣の處へ寄つて十二時頃歸りました、君は。

宮脇「私は十一時前に歸宅しました、時に例のは、矢張り百八十五が事實らしいです、各地の電報を綜合して確定した色分けがこれですからな。

　警保局長ノートをポケツトより出して榊の前に置く、榊其れを手に取つて目を通し。

榊「衆議院事務局の調査にくらべると一般に內輪のやうぢやね。

宮脇「政友會の百九十が私の調査べは百八十五になつてますが、何うも此方が確からしいです、現に東北の某代議士なぞは政友會員で無いと公言して當選した事實もあり、旁々大積りより內輪積りの方に、將來の

餘贏は懸らうかと思ひますが如何てせう。
榊「左様いへば左様だね、併し、吾輩の身になると、一人ても子供の多い方が嬉しい、たとひ、懸價があつても絶對的過半數と聲言したい、之が人情さ。
宮脇「併し虚よりも實を取つたら、別に聲言の必要もあるまいと存じますが。
榊「理窟は左様さ、けれども虚勢の下に勝身を發見するのが爲政者の手腕ぢやから、此際何うしても吾輩は、政友會が絶對的過半數を得たと聲言したい、君の主張と相容るゝ事は六ケ敷からうが、何うか衆議院事務局の調査位を標準にして今日中に都下の新聞記者に吹聽しておいて下さい、左様なると、吾輩の都合は勿論黨員の感情も柔らぐてす、お忌かな。
宮脇「忌と申す事は御座いません、上官の御命令には何事も從ふが下級官吏の常態てす、併し私は事實を曲げて無いものを有るといふとの出來ない性質てすから、豫めお含みおきを願ひます。
榊「すると君は吾輩の命令に背からうといふのだね。
宮脇「いや背くとは致しません、誓つて致しません。
榊「ぢや何うしやうといふのか。
宮脇（ポケツトを探りて手紙様のものを取出し）「これを差上げて御命令に從ひます。
榊（手紙やうのものを手に受けつゝ）「これは。
宮脇「辭表てす。
榊「むゝ、地位を賭して爭ふといふのだね、面白い、が、百八十五の政友會員を百九十に書直した處て出入五人の差に過ぎん、君が十年の官歴を擲つには餘り高價な賠償だ、吾輩は賛成しない。
宮脇「けれども私の官歴は正直の記號てす、事實を虚僞にすりかへる事は出來ません。
榊「隨分君の頭は固いね、殆ど金剛石に類して居る。
宮脇「私の頭の固いのは今に初まつた話ぢや無いてす、十年一日の如し、習慣は第二の天性、其れなんてせう。
榊「もう宜しい、君のお望み通り明日の官報に依 願 免 本 官と出して置かう。

宮脇「其れて漸と安心しました、何れ明日改めてお目通り致します——（座を離れる）

榊「まアもう少し話したまへ、今に例の閨秀美術家が來るから引きあはせやう。

宮脇「は、有がたう御ざいますが、今日はこれて——（と立ちあがる）

侍女甲出づ。

侍女甲「那須さんがゐらつしやいまして御ざいます。

榊「こちらへ。

侍女甲去る。

榊（宮脇を見て）まづ掛けたまへ、左樣急に他人行儀にならずといゝぢやないか。

宮脇「いえ、他人行儀なんて、左樣なわけては御ざいませんが、實際今日は非常に多忙を極めて居りまするて、何れ又——。

榊「左樣ですか。

宮脇「御免蒙ります。

宮脇去る。

女彫刻家那須時子出づ。

（宮脇と時子とは舞臺にて行きあふもよし、行きあはざるもよし、優人の勝手）

時子（恭しく一禮して）「奥樣はお留守ださうて御ざいますね。

榊「愛國婦人會の用て廢兵院まで行きました、今日仕上る筈だのにと云つて甚く殘念がつて居ましたよ。

時子「左樣て御ざいましたか、何時頃お歸りて御ざいませう。

榊「晝餐前には戻ると云つてゐました、まアお掛け。

時子「は有難う御ざいます（椅子を引寄せ）あの唯今廊架て（舞臺て顏をあはすとすれば、あの唯今の方は誰方云々）お目にかゝつた方は誰樣てゐらつしやいますか（椅子に凭る）

榊「あれが有名な宮脇警保局長さ。四十面さげてまだ下宿屋の二階に蟠つてるといふ變物、四十未成家とはあの事だらう。

時子「奥さんも無いんてすか。

榊「無論女房なんてありはしない、だから四十未だ家を成さずさ。

時子「へい何うい ふ譯て御ざいませう。

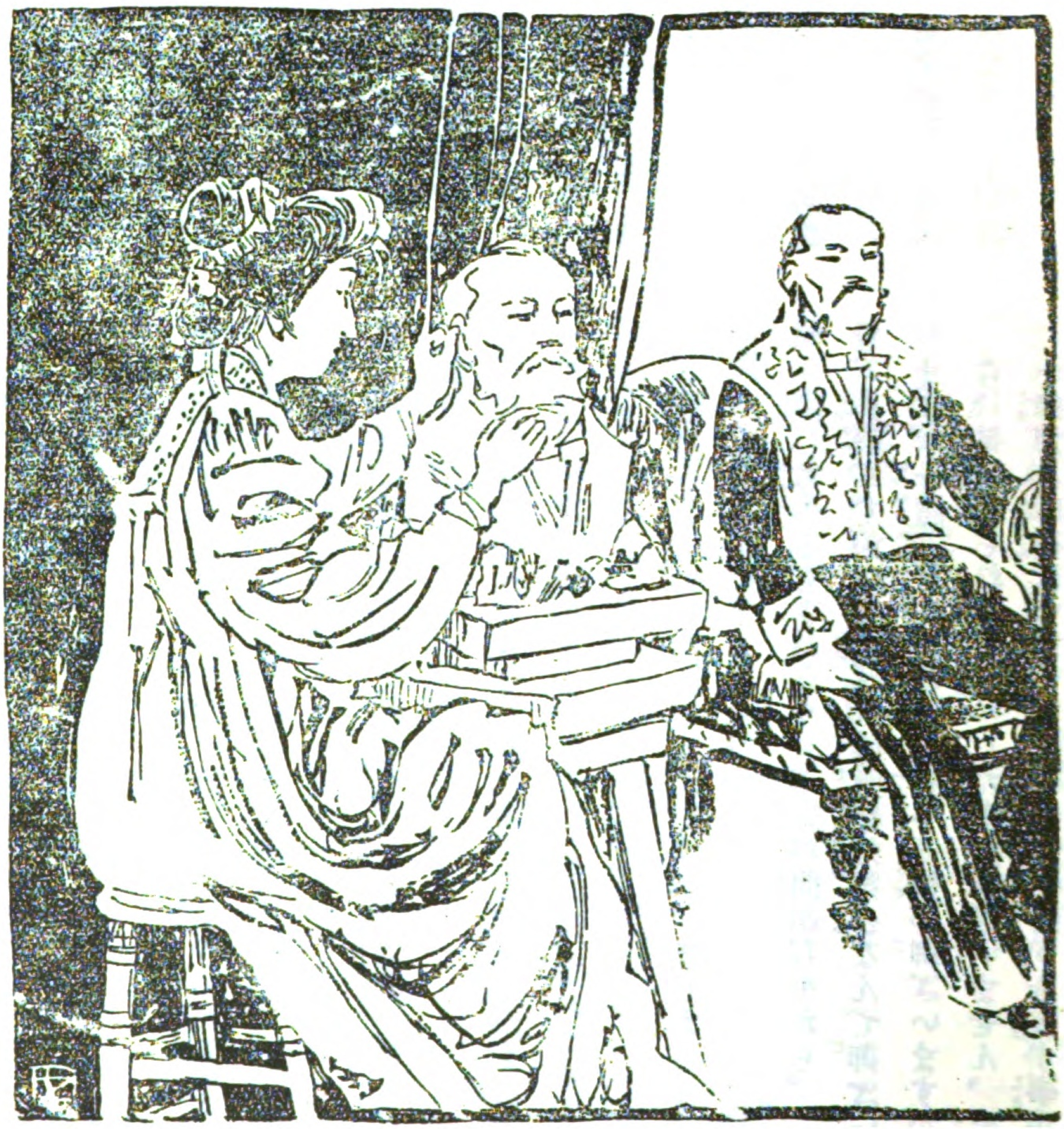
榊「多分氣に入つた婦人が無いからだらう、あれてなか〱理想の高い男だから。

時子「珍しい方て御ざいますね。

榊「丁度あなたの樣に珍しい。

時子「ほゝゝゝ御冗談ばかり。

榊「冗談ぢや無い實際貴女と宮脇は好一對の奇人です、此間も妻が宮脇さんと那須さんを一緒にしたら面白い家庭が出來やう、是非御周旋したい、年が少し違つてるけれど、其樣野暮をいふ那須さんぢやないからッて左樣言つてゐた位です、あなたの技術と宮脇の硬骨と



は眞に得易からざる至寶だて。

時子「お旨いお口てゐらッしやること、私の樣なお轉婆は、到底家庭なんて小面倒臭いものは作れやアしませんわ、矢張り老孃で藝術を友としてゐる方が柄相應てす、分外の野心は御ざいません。

榊「分外な野心は持たれずとも、一年々々心細く心淋しく妙に短氣くなるのが老孃の癖ぢやさうな、あなたは未だ若いから左樣いふ經驗はあるまいが、何うも左樣あるべきだと吾輩は思ふ。

時子「よく其樣事を獨身の方は仰しやいますね。

榊「だから先達も言つた通り、早く然るべき良人を迎へて身を固められた方が得策だと言ふんてす、宮脇の樣な男とならば屹度うまが合はうと思ふ、貴女に其お考があれば、妻に肝煎りをさせてもいゝ、何うてす。

時子「左樣て御ざいますね、一つ考へて見ませう、兎に角大問題てすから、御即答も出來かねます――、其れに――。

榊「其れに何うしたんてす。

時子「其れに此方の奧樣の御意見も伺はなくちやなりませんから。

榊「妻の意見なら聞く必要は無い、貴女の結婚問題は吾輩よりも妻の方が熱心なんだから。

時子「左樣てせうか。

榊「左樣てせうかは甚いね、全て吾輩の言葉を信じないやうだ。

時子「左樣ぢや御ざいませんが、あなたはお口がお旨いから、何だか擔がれるやうな氣がして、其れてあの、ほゝゝゝ。

榊「嘘だらうと思つたといふんてすか、怪しからん。

時子「御免あそばせ。

榊「併し考へるもよからう、不急の問題ぢやから。

時子「失禮てすが左う願へれば大變好都合なんて御ざいます、一體私は何事にも考へる癖が御ざいますから、毎時應それとお答へした事が御ざいません、惡い癖だとは存じましても永い習慣て何うも直す事が

出來ません。

榊「吾輩はまた考へるといふ事が嫌いて、右から左へ形を付けて行くのが好きさ、先づ鯉の生きづくりといふ格だね、ぴち〳〵俎てはねる奴を無遠慮に料る、實に痛快ぢやないか、吾輩は何によらず悉く此流儀て解決したいと思ふ。

時子「左樣て御ざいますね。

榊「此處に一婦人があるとして、其れに吾輩が戀着する、何うかして手に入れたいと思ふ、恁ういふ塲合に、吾輩は直接法を用ゐます、無粋かは知らんが、已むを得ん時は非常手段に訴へても早く埒を明けなけりや氣が濟まん、弊害といへば弊害ぢやが、結局は男の意地、深草の少將が長袖者流たるとを思ふと尚更其考が深くなる。

時子「左樣て御ざいますか。

榊「處て吾輩は昨今非常に煩悶してゐる問題があるので、其解釋に――。

時子「お話中失禮て御ざいますが、あの仕事の方を形付けて其れから、ゆつくり御話しを伺ひたいと存じますが――。

榊「仕事――何の仕事。

時子「御肖像の仕上て御ざいます。

榊「はア、まだ仕上をするのてすか。

時子「も一度仕上げまして其れから石膏に取りたいと存じます。

榊「むゝ、ぢや左樣願はう、併しもう吾輩をモデルにせんてもいゝだらう。

時子「いゝえ左樣は參りません、矢張り大禮服を召して椅子へ御座り下さらなければいけません。

榊「隨分長く手のかゝることてすな（椅子を離れて）ぢや着換へて來ませう（行かうとする）

時子「あの失禮て御ざいますが、お召使ひの方をお一人拜借致したう御ざいます。

榊「よろしい。

　榊去りて侍女乙出づ。

侍女乙「お召して御ざいますか。

時子「あのお氣の毒ですが毎時の通り手を貸して下さいまし。

　時子、侍女乙と共に白木の箱を部屋の一隅より持出して卓上に据ゑ、中より油土にて作りたる榊内務の肖像を取出す。

時子「御苦勞さま、もうよう御ざんす、あとは私一人でしませうから。

侍女乙「は（といひかけて懐中より縮緬の袱紗を出し時子に渡しながら）あの奥様からこれを貴女さまへ差上げてと、態う仰しやいまして御ざいます。

時子「袱紗を不審さうに視つめながら）は左樣ですか（袱紗を開ける）

侍女乙「御用がありましたら御呼び下さいまし。

時子「は、有難う。

　侍女乙去る。

　時子袱紗を開け中より晴子の手紙を出して讀む。

榊（大禮服）出づ。

榊「時子さん何をしてゐらつしやる。

時子（さあらぬ體にて）「奥樣の御注意を服膺して居るので御ざいます。

榊「妻の注意、何の注意です。

時子「あなたの思召しに從はない樣にとの御注意で御ざいます。

榊「はゝ馬鹿な（椅子に腰掛け）其樣とは何うでもよい、仕上げの方にかゝつて下さい。

　時子、榊の姿勢を正し、華奢な指先に篦を持ち、油土に向ひて仕上げにかゝる。

榊（モデルになりながら）「妻も實に神經家だね、何樣事を御注意したか知らんが、吾輩も一國の政治を切盛りする人間だ、馬鹿な眞似はせん、杞憂に過ぎん。

　時子默して篦を動かす。

榊「貴女だつて、其樣危險な者の處へ、幾ら藝術の爲めでも來はしまい、何うかね。

時子「いゝえ藝術の爲めなら、獅子の檻へでも入るのが美術家の常、排々の處位平氣で御ざいます。

[illegible]「猥々、吾輩を猥々といふ――。」

時子「世の人は皆左樣申す樣で御ざいます。」

[illegible]「怪しからん（立たうとする）

時子「何うぞ其まゝ（熱心に箆を動かす）

[illegible]（腰を落ちつけ）「吾輩が萬一妻のいふ樣だつたら貴女は何うする。

時子「抵抗ひます。

[illegible]「暴力に訴へたら。

時子「飽くまでも戰ひます。

[illegible]「吾輩が勝つたら。

時子「私の負けるといふ事を考へません、唯勝つ、其ればかりで御ざいます。

[illegible]「むゝ。

時子、肖像を仕上げ終り、肅然と姿を改め、

時子「私は確信によつて貴下の御肖像と汚れなき處女とを作りました、東郷大將の確信が敵艦隊を鏖殺したと同じものです、私はこれを光榮と致します。（畢）

夕焼雲

吉江孤雁

自分の逢つた人々の中で忘られない面影があるとするならば、自然の景色のなかにも亦忘れ得ないものがあると思ふ。

諸君は氣がつかれないかも知れないが、晩秋の夕方など野末に立つて見たまへ、葉の枯れた雜木林の上に遠く、かすかに山影の續つてゐる西の方に、日が沈んで了つた後までも、長く消え殘つてゐる紅の雲がある。其紅の色は、夏の夕などに見る華かなものとは違ふ。沈んだ中に何處か黒みを帶びて、物々しい氣色がこもつてゐる。そして夜遲くまで四邊が眞黒になつてからでも、山火事かともまがふばかりになつて、空の一角に殘つてゐる。

私が忘られないと云ふのは此雲の色だ。

私の村は嶺に近い松原の麓で、其松林を出抜けると櫟林があり、其林は小さな丘の上に立つてゐる。此

丘へ來て見渡すと、下に桑畑が遠く續いてゐる、里川の流が榛樹の飛び／＼に立つてゐる間から見えてゐる。松原の中からは刄金色に輝く湖水も見える、曇日の風の冷たい夕方であつた。家から出て此丘の上まで廿丁程はあらう、私達の一行は妹の嫁いて行くのを送つて美しく飾つた駕籠の後から人力車でついて行つた。私は兄だと云ふので一行の中では最も重い役だ、父の代理となつて花嫁を保護して行く任に當つてゐる。其外に叔母がゐた、從兄がゐた、親戚の誰れ彼れ二三人で、駕籠の先きへは仲人がついて、介添の婦人も直ぐ傍に添つて行つた。家を出る時涙を流した妹を想像して駕籠の中で泣いて居はしまいか、心細い思をしてゐはしまいか、と私は惘然てたまらずにゐた。

隨分色々な思が私の胸の中を往來する。過去の事が眼前に見えて來る、母が居なくなつて寂しい家の中で、兄妹で喧嘩をしてゐた時の事が思はれる、祖母が學校へ連れて行けと言はれると、女なんか連れて行くのは厭だと云つて叱りつける、妹は前髮を垂げて、紫の小さな包みを持つて、叱られても田畝途を後から付いて來る、うるさいな、一人で來いと言つても慥づ／＼しながらついて來る。むしやくしやして耐らない。叩りつける。泣き出す、泣きながらに付いて來る。私は泣いてゐる妹を捨てゝ馳け出して了つた。

學校から風邪をひいて歸つて來た妹は、寒い家の中で寐てゐる中に腸チブスになつた。それが神經質の叔母に傳染して、妹が一ヶ月、叔母は二ヶ月臥てゐた。叔母の怒る事、「お前の爲めに死ぬやうな目にあつた、お前は叔母がそんなに憎いのかね、」妹は病氣よりは叔母の皮肉の方が餘程つらかつたと見えてしよう泣いてゐた。

痩せて／＼、蒼白い顏で、常はパッチリした大きな目が、力なげだ、頭髮が垂れ下がつて、夏の初めに床から出たが、紺絣の單衣がふは／＼して身につかない、てゝ襷をかけて、家の中を働いてゐた。

家に居た間、妹には樂しかつた時が少しでもあつたらうか。私はそんな事を思つて見た、少女の夢のやう

な甘い樂しみなぞは妹の胸には少しも入る暇が無かつたのだ。

寫眞を見せられて、「お前は此人の處へお嫁に行くのだぞ」と父から言はれた時、妹の胸は如何樣に踊つたらう。此寂しい家を脱がれられるかと思ふと、只それだけでも、首肯いたに違ひない。妹は今寂しい闇い冷たい中から出て、明るい溫い人の許へ行くのだ、と思ふと私の胸も易らかになつた。さすがに妹は泣いた、家を出る時は泣いて祖母の手に縋りついた。駕籠の中では今何を思つてゐるだらう。

不圖氣が付くと、櫟林のまばらになつてゐる間から遠く西の方が見渡される。晩秋十一月、桑の葉は枯果てゝかさこそ風に鳴つてゐる。私等の車のひゞきも胸に泌る、妹の駕籠をかいて行く四人の男は思ひ出したやうに、「目出度〳〵の若松樣かな――」と囃し出す。が、ぢきやめて、すた〳〵すた〳〵歩んで行く。――桑畑の上遠くの方だ、曇つてゐる空に日は落ちて、雲が灰色に暮れて行く、山の頂も大方雲に包まれてゐるが、山と山との間、少の隙を空は晴れて、微明るく見える、其底に濃い色をした紅の雲が一帶に沈んでゐる。眺めやる心も沈んでしまう。今にも其色は消えるかと思つてゐるが、なか〳〵消えない。色は凝つて、四周の暗雲と反射して一層美しくなる。櫟林を出て、私等の一行は一里行つた、雲はまだ消えない。二里行つた雲の色はまだ暗紅色に殘つてゐる、三里四里、途は里川の橋を渡つて、松本の市に入らうとする時、夜は更けた、暗い〳〵松本平の果て天と山と接する邊に猶かすかに一線を劃して其暗紅の色は殘つてゐた。

妹は嫁いで六年、幸福な平和な日を送つてゐる、二人の子供の母親ともなつた。

折ふし移り變り行く天象に注意して見たまへ、諸君はおそらく、胸の中に忘られない景色を抱いて居られるに違ない。

Was every child at home?

K: No, only seven of them. The rest are away all the time.

A: What did you do every day?

K: Played, laughed, ate, and slept. I had a beautiful time. When I got to their station, I did not expect anybody to meet me, because I did not let them know what train I should take.

A: But you found some body awaiting you.

K: Yes, the youngest boy and his ten-year-old brother with a young man of the office were there.

A: Did you recognize them?

K: It was dusk, and I did not see them, but they found me. I was told that they came to every train that day to meet me.

A: How dear they are!

K: You can not imagine how heartily the family welcomed me when I reached them. They feasted me morning, noon, and night. Don't you think I got fat?

A: Yes, you have a nice color in your cheeks.

事は知て居る。御子供様方は皆御うちであつたかね？

清：七人丈でした.餘のは，他に何日も居られます。

叔：毎日何をおしでした？

清：遊んで，笑ひ，食べて，寝ました。私は實に面白う御座いました。先方の停車場に着きました時は，私の來る汽車の時間等は，知らせて無いから，誰も出迎ひなどはしないと思ひ込んでゐましたら，

叔：御迎の人に逢つたと云ふのだらう。

清：ハイ，末の坊ちやんと，十歳になる兄さんとが，局の青年の御方と一所に待て居りました。

叔：直ぐ判然（ワカリ）ましたか？

清：日暮方の事で，私は氣が付きませんでしたが，向ては私を見付けました.聞けば，其日は朝から，私を迎へる爲，汽車毎に停車場に來たとかです。

叔：可愛らしいね。

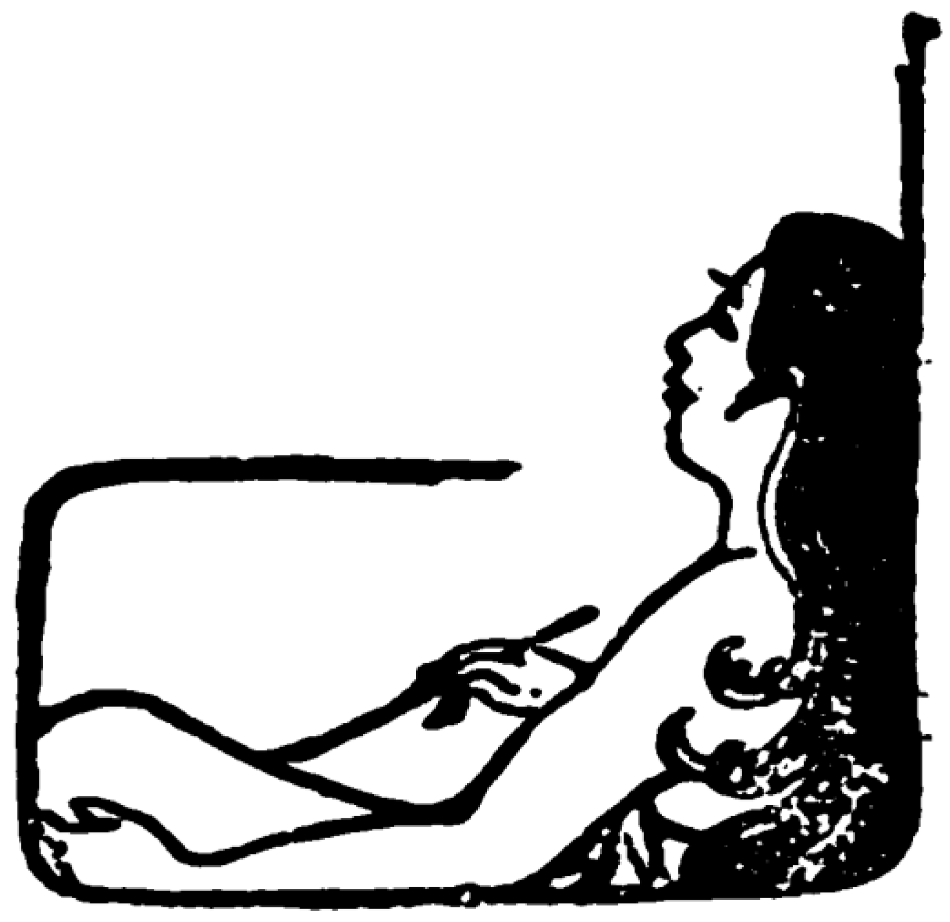
清：眞個に厚情なる歡迎を家族一同が私にして下さいました事は，叔母さんの想像意外です。朝，晝，晩と御馳走で，私は餘程肥りましたらう？

叔：顏色が良くなつたよ。

英　文

（第四年第九回）

女子英學塾講師 河 井 道 子



A Happy Family (No. I.)

Aunt: Is it you, Kiyo?

Kiyo: Yes, Aunt, I am back now.

A: We were not expecting you to-day as the storm does not stop yet. You must be tired. Take, is the bath ready?

K: It was rather cool in the train and so I am not tired. I was afraid there might be a wash-out so that I may have to stay there a long time.

A: How are the Oseko's?

K: They are very well and they sent you their love. Really, aunt, I have never met such a warm welcome. They treated me royally. Do you know they are such a happy, united family?

A: I know they are even I have not met every member of it.

樂しき家庭（其一）

叔母：淸かい？

淸：唯，叔母さん，只今歸りました。

叔：嵐がまだ止まないから，今日は，御歸りとは思はなかつたよ．疲れたらう，竹や，御湯がいゝかい？

淸：汽車中は，佳なり涼しう御座いましたから草臥ません．私は洪水でも出て，汽車不通になれば，先方に永く滯在しなくてはならなくなるかと心配して歸りました。

叔：大世古では皆さん如何だい？

淸：皆御機嫌で，貴女に宜しくとの事で御座います。眞個に，彼樣な歡迎に會ひましたのは初めて，其は其は大事にして貰ひました。實に仲の良い，一致した家族で御座いますね？

叔：御家族の皆樣に逢つた事はないが，結構な家庭だと云ふ

私の小說談

▲本號の文壇餘興て諸孃の小說談を拜見しました、私もお仲間入をして少し小說談、寧ろ昔話をいたさうと思ひます▲私が小說を讀み初めた頃は諸孃は未だお生れにならなかつた方もあらうし、嬰兒てあつた方もあらうし、今より二昔も以前てすから樣子が餘程違ひます▲私は十三歲の時に母に連られて京都嵐山の上の虛空藏菩薩へ參詣しました、私の地方ては男子十三歲になると十三參りと言ひまして智慧を授かる爲め虛空藏樣へ參る習慣があつたのてす▲其時母は土產に本を買てやるから何なり好きなものを選て見よとの事てしたから、私は德川十五代記、岩見武勇傳、天一坊實記など二三冊を選みました▲是が私の小說の讀み初めてすお家騷動、復讐譚、傳記物など所謂赤本類は大抵涉獵りました、其頃の赤本類は今と異つて木版の草双紙が初めて活字になつたのてすから本文も原作通り親切に飜刻してありました▲活版の小說に興味を持つたと同時に、是も其頃家へ能く參りました琉球人の貸本屋がありまして、其から古い木版の小說を借りました、二百冊からある太閤記や、神稻水滸傳や、白縫譚や古いものを根氣能く讀んだものてす▲お正月が來ても、お祭が來ても小說を買て來て讀むと云ふことが唯一の娛樂てした▲雜誌と云ふものゝある事は未だ知らなかつたてす、又世間にも殆んど文學雜誌は無かつたのてす▲讀みかけると御飯食るまも惜しく、日に何百頁と讀破しましたから私の十五六歲の時には隨分小說の數は讀みました▲それて德川時代の小說て頭腦が養はれて空想的の一靑年が出來上つた頃、明治の文學は盛んになつて來たのてす▲雜誌ては國民之友、都の花、少年園を初め博文館の出版物は殆んど淺らさず、作家ては春のやおぼろ、紅葉山人、美妙齋などの新代の人の作に接すると只もう文學より外に生命はないやうな氣がして、全然心醉して了ました▲新しいものに憧憬れても舊い小說も棄てませんてした、其頃の私の手記を見ると能く分ります其れは小說を讀んて行く中、心に止つた名文章があると短きは二三行乃至五六行、長きは一頁以上に涉つて拔き寫しにしたものてす、此自家の小說文粹は細い〳〵字て書いたものてすが、それを五六十枚たまると一冊に製本したものてすが後に十冊以上もたまつたてせう、八犬傳の濱路の言葉も出るかと思へば、美妙の機械澤山の言文一致もあると云ふやうに妙な冊子てした。

（私とは誰）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

下田歌子女史題歌 東京造花教習所主幹 塚本鐐吉氏著

最新造花術

▲洋装頗優美▲菊判上下巻二册
▲定價各金五拾錢▲郵税金八錢

本書は著者が多年の實驗により案出せしものにして、誰にも分り易く、且面白く學び得る樣に述べたもので、啻に獨習用ばかりでなく、敎師及學生には無類の良參考書です。

本書の特色

一 趣味と実益 花に關する詩歌、表情及内外の興味ある話等を述べて無量の趣味を喚起せしめ、自ら花の形態及特性等を知得せしむるなど實益鴻大。

二 最新の技術 新案の方法で和洋の花卉につき嶄新且完全なる切形、染め方、器具使ひ方及巧妙なる仕組み方等を頗る手順よく圖解を示して親切周到

三 実地に應用 嶄新なる花簪、婦人帽飾花、歐米新式を斟酌せる花束、花輪、香水入り花、電燈花の造り方、花籠の盛り方室内装飾其他の應用法。

口繪 美術着色版一葉 光澤寫眞版三葉

挿繪 切形 五十枚 圖案 廿五枚

紙質 優等印刷鮮明

斯樣に内容が豊富で、取材が多方面ですから、一般家庭に備へて頗る重寶です。殊に同好の人は、時勢に後れない樣に必ず本書を繙かれよ。

發行所 東京市京橋區南傳馬町 振替貯金二八〇九番 目黒書店



クイーン白粉
クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧品なり

本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂

（戊の四）

美文

編輯局選



▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

天 ○雨の道

大阪蜆橋郵便局　鈴木ふさ子

梅雨空の、止んでは降り、降つては止みする、夕である、お白粉や石鹼の嬌かしい香に送られて湯屋を出た。濁つた空は、生活に疲れた人の眼の色のやう、斷々の重くかぶさつた灰色の雲、それは我が涙の凝つてなつたのであらう、生溫い風が顔に觸れて、ポツリ〳〵と雨は四邊の淋しさを破る、誰も通らないぬかるみの道を、一人とぼ〳〵と行く、明日も、明後日も、自分の一生もかうではあるまいか、――靜かなオルガンの音がする、……と自分は堂島學校の柵の側に來て居たので、冷たい硝子窓から優しい聲に伴ふ調べ、雨に解けて淋しい胸に囁くやう、懐かしい感がする。十六、華かな何を見ても面白い年であるのに、病む身でさへ熱情の燃える年だのに、自分は絕えず淋しい、遠い〳〵太古のはてもない森を行くやうに、……

雲のあなたに故鄕を、おきて年ふる旅の宿。歌は故鄕の小川である、あゝ年ふる旅、父も母も自分も、別れ別れの漂流の身である、父は遼東の地、行くは大の汽船の上をも波が越す、玄海灘を通ると云ふ、大坂にもまして、繁華の町と聞くけれど、つきぬ涙を飲み乍ら、面に笑み浮べた人てなつた町のやうな氣がする。……磯風に藻の香を送る、高石の濱に母は居る、夢に見る面影とは變つて居やう。

しめ〳〵と柔かい雨に、柵の柘榴の花が散る。

夜ごとの夢に流れ行く。……オルガンの前に白襟ぬらす人の面影がうかぶ、親子語りあふ日は何日だらう。何日だらうと、繰返したが永久にあへない、神樣はその間に、高い鐵の壁をお築きなさつたんだもの、暗い暗い冥府の路を行く時も、三人手を引かれないで、寂しい、今日のやうであらう。……………と何時しか白粉知らぬ我頰も濡れて居た。

仕立物と書いた家から薄い灯が洩れる。

これが今の若い女子の手になる文章かと思へば驚かざるを得ない、一句、一句と深く胸を刺してゆく、あゝ凡て靑春の人は感じが銳くなつたのであらう、文藝の勢力なる哉（評）

地 ○吾が叫び

信濃東筑摩郡廣丘村　太田喜志女

妾の思はまだ幼なく狹まい故、この寂しみの感に打た

れる一種の勁い力を云ひ現はす事が出來ませんけれども、この桔梗が原の高巾に立つて、廣い奈良井川の流れの音、その呼きを耳に、赤々と燃える西の空、紫あゐ色の山影に徐々と、夜の幕の引き下ろされる時の、天地と吾が胸の感じは、何と云へばいゝのやら、誰れか自由自在に詩の作れる方に見せて、共に此處に立つて、聲の限り涙の限り、泣いて泣いて泣きぬいて、見たいと思ふのであります。

平生海を戀ふて止まぬ妾も、この夕方の天地を見ますと、たゞ嬉しい思に返るのであります。山！山！あの高山それてもどう云ふ意味を持つて居るのでせう、朝晩いゝえ、この天地の有る限りは同じ姿て同じ色て笑ひ顔の樣に思ひ見る事はどこにもない、いつでも〳〵嚴格な神樣のお前にゆくやうに只尊とく畏れを覺える山、何の意味を傳へて誰れに語るのでせう。

日沒後の光景、妾の瞳の光る時―自分と云ふ者を全く忘れる時―其の時は乾度北西の山の頂きに魂が飛んで居るのであります。

外はもう暗の影が充分に迫つて來て居ますのに、西北一帶の連峯には仄りとまだ餘光が紅を染めて居る、ああ太陽は今頃はどんな國をてらしてどんな人々が住まつて居るてあらうかと思ふと、また夕日の海が見たいしきりと見たい、つまらぬ空想てあると思ふけれども……それはとても及ばぬ事女の身、とてもあの山越へて他國の海などは見る事が出來ずに果てるのてあらう、この草木と共に春に生れて冬に枯れる運命てあらう。

仕方ない何事も運に任かせやう、けれども只棄てたくないのはこの光景を自由に謳ひ出せるまでに成るその靈力を授かる道てあります、もしもこの生命が拙なくて早く枯れてゆく事になるかも知れませんが、せめてその後とても忘られぬやうに、今の中に胸に燒印でもして止め置かうと思ふのであります。あれ〳〵波の音と松風の音とが一所になつて―思は何を辿ればいゝのやら。

胸の奥には或るやさしい光りがかゞやき出しました。

言ひ現はす事が出來ないと云つて其苦悶を訴へてゐることが、既に或る強い力を現はさうとしてゐる證據てある（評）

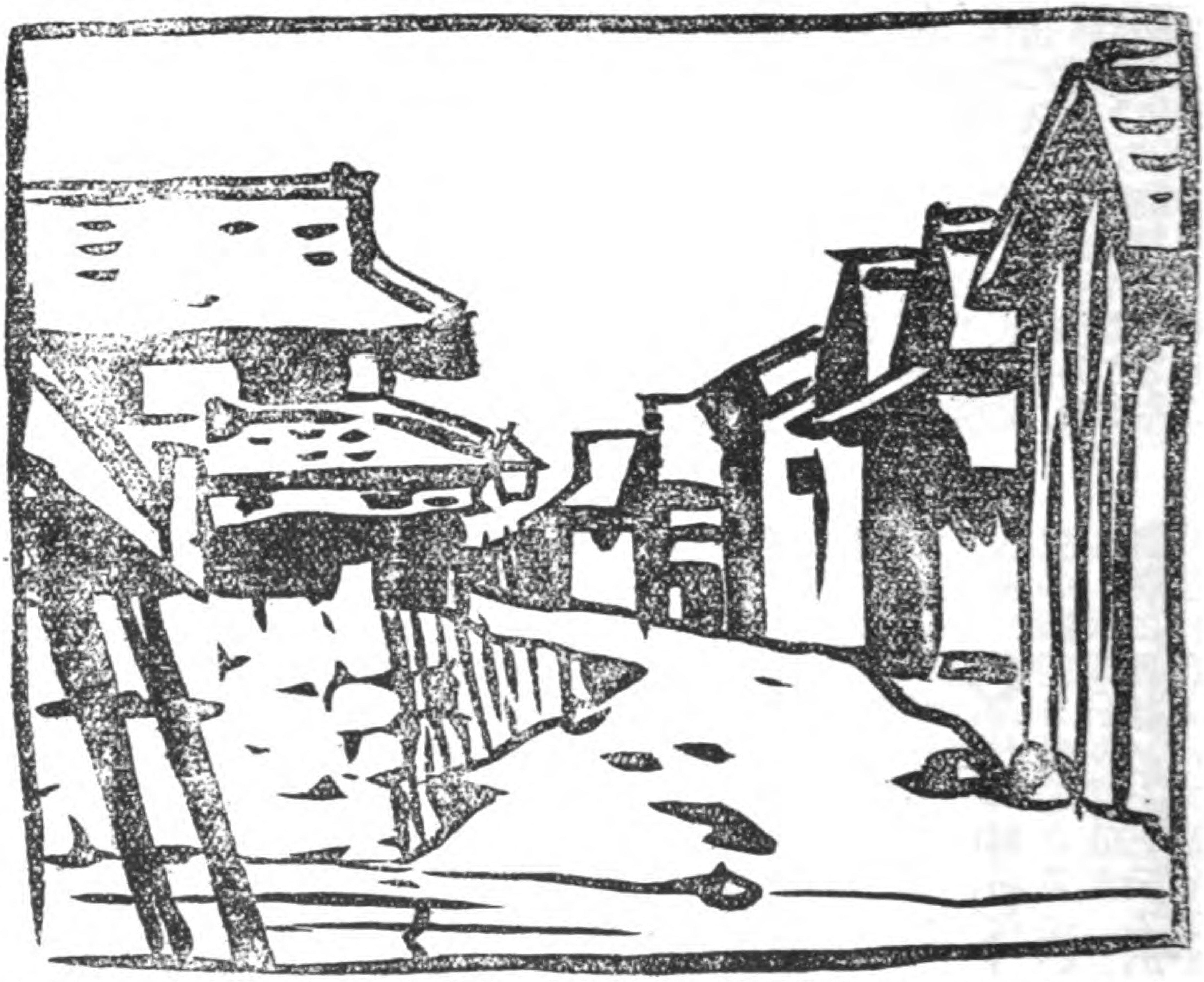
人　○愛の光

長崎縣東彼杵郡大村町　中尾結子

嫁ぎし家の樂き有樣を細々に認められた友の玉章を讀み終つた私は云ひ知れぬ苦痛と過去の念にかられて若き血汐の狂ふ胸をじつと抑えて椽端に彳だ見渡す大空ははてしなく灰色ばんだ雲は紫の青空を覆ひ盡さんとして走り回る樣の恰も我が現在を記すかの樣て名さへ

悲恨なる失敗を擔ふて山と海とに取圍まれた故山の地に歸つて果敢ない日を送る身には染々と悲さを覺ゆるあゝ人生の十八年、然り人生の十八年は花の盛時といふて世の人は皆此期を逸せず咲き誇らむとしては着物よ指輪よ髪飾よとよそふて居るのに我のみ一人悲境の淵に沈んで美い清き花盛に過ふても心には悲歎の情を抱き何ひとつ飾る心さへない身は向ふの岸邊を浮きつ沈みつ流れ去つた花瓣の樣にあへなく散り失せてやがて青春の血の枯れはつるを悲む仲間であらうかと靜に眼を閉れば樂き新家庭に入つて希望に充ちた友の姿ー燦爛たる指輪の光ーはうふつとして現るゝと過去の念は益々高くなつて我魂はあれよこれよと呼び起して意志の緒は亂れてしまふ

橋畔（天賞）　攝津國尼ヶ崎西町四尼崎內　とよ子



「あゝ私は何故あの時に嫁かなかつたらう」と叫んで見たが今更取返しはつかない財産家てふ名を厭ふた私は父母の年若きとの言葉を幸に幸福なる緣の糸をたち切つて心強く生親よりも恩深き父母君に弱き此身を捧げんと共に歸つた現在の苦みあゝ今日のみは泣かずに居られないものと黒く太つた我手を洗ひ晒の我布に抱きしめる折しも降り出す夏の雨は若や懷かしき父母の落ちくぼんだ眼より落る白露てはあるまいかと思ふと虚榮の雲に呪れ去らんとした私はつきせぬ愛の光を宿して居るのによしや友の上に黃金の光輝くとてどうして其が父母の愛の光に打勝つ事が出來やうと我に返つて再び天を仰いだ時雨は地もさけんばかりに降り出した。

心血を絞り出した文字、思はず魅せられる處がある(評)
又曰く。此文、句頭を切らず、故に甚だ讀み下し難い、次には注意あれ。

秀逸

○忘られぬ一日　東京　かへて女

四年の間馴れ住んだ寮舍を出て行く悲しさに、卒業の嬉さも忘れて門迄見送り給はりし舍監先生にも、只袖を顔に當た儘御別れ申たのは、昨日の樣に思ふのに、もう一年餘、夢に拜する御顔は、昔の儘にて坐せど、寂しき孤獨の先生は此度御見違へ遊ばしたでしよう、と汽車の中でも夫れのみ思ひ續けて居たが、扨て今門迄來て見ると、一年前に變つた吾姿、そと重い髷に手をやると、獨り顔が紅く成て、あゝ束髮にして來ればよかつたと、極り惡るさに佇て居ると今日は日曜の、食堂の方から響くオルガンの音、譜も懐しき富士筑波、若しや鈴樣ではないかと思はず足早に玄關迄行くともち里へても歸つた樣な氣がして案內も乞はで其の儘長い廊下を舍監室へ、障子の外から先生と言ふと、誰方と仰有つて御慕しい御聲と共に出て入らしつた先生、まあと只御一言早や涙ぐまれた御顔を拜するともう胸が一杯に成て、恰度始めての里歸りに、納戸へ入るや母樣の御手に縋つた時の樣に、禮も忘れて、御挨拶も出ない。一杯に開け放つた前のお庭は新緑滴る計り先生の御顔迄青く映つて見える、嘗て私共の爲に催された送別の園遊會の折には、花がちら〳〵散りかゝつてゐたのにと、茫然と眺めて居ると、青葉の下の鷄舍の蔭に蹲つて居る人の紅い帶は、おゝ鈴樣の、と、其儘走り下りて鈴樣と、そと肩をたゝくと振り向いて、アラ姉樣と抱き付く愛らしさ、二年生に成た丈け有て眞實に大きく御成りなされた。何してゐらしつたの?と言ふと、雛が死んだからお墓を立てましたの、と相變らず優しい御子だ。森先生も御墓になりましてね、とのみ聲に振り返ると、いつの間にか後に立つて青葉を仰ぎ居給ふ先生の御姿、森先生とは、先生の御親友私には舊師の、今は亡き人の、坐ろ懸しくて俯いて居たが突然に、コケコーと鳴いた鷄の聲に驚かされた。先生青葉に成りましたね、と、申上ると、花に成た方も入らつしやいますね、と御笑ひ遊ばした先生の御顔は實に〳〵寂しかつた。

人を中心として書いてある文章は、何處となく引きつけられる(評)

○電車中の十五分間　四谷　網野田都子

御順に御詰めをと云ふのを聞きながら、漸やく一番隅の五寸ばかりの場所に腰をおろす。となりに居るひげ武者は我ばかりが大將にて候と云つた樣に足を出來る

だけ廣げて、起つて居る人が五六人もあるのに少しも動きもしないで、右に居るお婆さんをギユー／＼押して居るお婆さんも負けぬ氣で押し返すので此度は此方に進軍して來る。私は押されても一番隅なので、板にぶつかつて其より先に押す事が出來ない、其て仕方がないから起つて皮にぶらさがると、お婆さんは氣の毒さうな顔をして見る。ひげ黑の大將は大威張て二人前分捕つて居る。眞中頃の皮につかまつて居る赤毛布は時時懐から何か出しては口に押し込むで居る。電車が廻る度によろけては、ひげ黑の頭につかまつて苦い顔でにらみ付られて居る。其の風が餘りおかしいので皆がクスクス笑ふ。向側の隅から五番目に居る四ツか五ツ位の女の子が其の田舍者を見て不思議さうな顔で見ながら連の女中に向つて「ツナやあの人はおかちいね起つちして何か食べてるよ」と大きな聲て云ふ。田舍者自分の事と知つてか知らずにか、女の子が餘り可愛いのでニコ／＼しながら譯の分らないことを云つてあやして居る。又懐に手を入れて何か出さうとして居る其の時丁度、半藏門の處に來たので電車が廻ると手が懐に入つて居て出せないで、ひげ黑の頭につかまる事も出來ないでペツタリ尻餅をつく。此度は皆一時にドツと笑ふ。

をかしい（評）

○梅雨晴の朝

石田町　菊池りう子

「時に大山守命纂立を謀り兵を發して襲はんとす……」あゝ稚郎子の讓位か……。くりかへし／＼日本歷史の暗記に餘念もなかつた自分はふと開いた窓から庭をみた、いつの間にかじめ／＼降つてたさみだれがすつかり晴れて、强い／＼朝の日光が輝いて百日紅のうねつたのや、横ばいになつてる紅葉、ぞよ／＼した水柳、胡蝶花などから盛に水蒸氣が起つて、それが幾筋もスーと繁の中からもれて射る光線の中に朦々とたちこめてまるで夢の樣と云はふか。と繁の中から露に包まれた美しい半身がつと現れた、おや！と思つてよく見ると綠さんだ、面長の輪廓の正しい、刻んだ樣な鼻透き通る樣な色、はえ際がクツキリ富士の山を示して秀いでた眉、口はしつかり結んで、少し險のあるちらちらと光る目でじつと此方をみて一寸首をかしげる拍子に長いふさ／＼した洗髮がユラリと肩にかゝつて紫のリボンの木目がチヲと光つた、私は一瞬に虞美人草の藤尾と對照した、飽迄麗しい、が、どこかに人を射る險がある、そして常に好んでそれよりさゝぬ紫のリボン！そつくりだ、と思ふと藤尾の最後が浮んで此の美しい人の運命がぞく／＼と身をさす樣に妙な心になつた、私は「ふじ……」と呼びかけて驚いて口をつぐむと今度は彼方から「まあお早くから御勉强？」「綠さん

こそ、いつの間にいらしつたの、ちつとも存じませんでしたの、まあ一寸、『梅雨晴の日は葉枝こえきら〳〵と御髪をこそ靑うてりたれ』そつくりですわ」と私はほゝ笑んだ、綠樣はそれには答もしないでどこ迄も美しい姿に品をもたせて、つと幾筋かの日光を横ぎりぬけて歩み出した、藤色の細い縞の千代田草履はビッシヨリ露にぬれてはてにすつきりまげを結んだ單帶からも黑い〳〵髮からも少さい露の玉がはら〳〵とダイヤモンドの樣に光つて落る、手にした赤い表紙の小さい本は何だらう?! 窓の下にすりよつた綠樣は「ゆきさん」と云ふ、私は上から顏許り出して「何? まあおあがり遊ばせナ」「あのお兄樣はいらしつて?」と。其時私は弱い〳〵詩より外に世の樂を知らぬ靑い兄の顏が目に浮んで……。兄があんなに眞心こめた愛を此綠樣がうけてくれなかつた去年の春の夕を思ひ出して美しい其顏が惡魔の樣に恨しく恐ろしく目をまどはせるので私は視線をさけて伏目になり「兄は相變らずでね、早くからどつかにぶら〳〵出てしまひましたの…、何か御用?」「いゝえあの一寸英語をきゝに上つたの」「さう、おき歸りませう」「私又後でまゐりますから、さよなら」一寸首をまげてすつと足をかへしてサッサと先よりは少し薄らいだ霧の中に消えてしまつた、私は「兄はます〳〵陰氣になつてよ」と云はふとして駄目だ! と口をつぐんでしまつた、心が妙にめ入つて來る、ずつとならんだ文學書の中で「虞美人草」と許りが目につく、と又頻に藤尾と綠樣とを對照し初めた、雀がチウチウとやかましいので又庭を見るともう霧はすつかり晴れて日光は所々にさしてる、紅葉のはに重さうにたまつた露がポタリ〳〵落るのが現心に目に入るのみである。

少し才氣がありすぎて、逸しはすまいかと氣遣はれもする、愼重の態度を失はぬやうにして進めば見込のあることは確かである(評)

○海峽

草村瑩子

林檎や桃や、バナヽ、パインアップル、梨など、暖かい匂のする露店の打ちつゞく大通りを、急いで連絡船の乘場へ入つて、あたふたと棧橋へ出た。大瀨戶丸と云ふ美くしい白い滊船である。ベンチへ腰をかけると、間もなく滊笛を揚げて棧橋をはなれた。煤煙みなぎり渡る門司の市街は、綠の山を負ふて、幾十艘となく碇泊せる大滊船の間に展開してゆく。妾はじつと眺め入つた。空は美くしく晴れてゐる。潮の瀨はやゝ急であるけれど、小さなランチが絕えず汽笛をあげて忙しく往來する。

ふと妾は、妾のすぐ傍で忍び泣く聲をきいた。びつくりして見ると、妾と脊合せのベンチに俯伏してゐる少女を見つけた。

白い頸にくづれた髮がもつれて、重ねた兩袖の上に顏

を伏せてゐる。リボンがいぢらしいまでに震ふ。そして傍には小さな風呂敷包がある。その包をおいて一人の老人がゐた。暗らい顔、曇つた眼、妾はすぐ娘の父だらうと思つた。船はもう半分以上來てゐる。

滿船の人はみな海峽の風光にあくがれてゐる。少女のことは誰も知らぬらしい。

下關の白堊粉壁は手にとるやうに見えてくる。下關、そこには大きな遊廓が幾つもある――と思つた時、妾は身ぶるひした。泣く少女泣かぬ老人の心の中はどんなだらう。どうかそんな身の上でなければ好いがと心から祈つた。

汽笛をあげた。濃い波の色の末に門司はもう小さい。船は停車場構内の棧橋についた。洋服の紳士、美くしい女、商人、勞働者、外國人もゐた。妾も急いで下りた。斜めな板の橋を上る時、かの少女、あはれな少女は、やはり袖で顔を被ふたまゝ、父の老人に助けられて上つて行つてゐた。

今少し、描寫が物足りぬ（評）



毬つき（地賞）

水戸市上市八幡町　中川しづ江

○庭

京都　濱部風窓女

夕食が濟むと私は無意識に椽側へ出た、直ぐ下の敷石の上に駒下駄が揃へて有つたのでツイ穿いて見る。

今日は朝から雨はふらないがむし／＼とした日なので妙に足がほてつて、ジク／＼と濕つて居る土の水氣が私の足の裏に吸ひ込むやうな心地がする、空を見上げると薄墨色の雲がちぎれ／＼に成つて靜かに比叡山の方へ歩いて行く偶然軒と楓の茂り合つてる枝の隙間を見ると小さい黑いものが有る、能く見ると私の不好の蜘蛛だけれど小さいからまだ逃げる程でも無い。

猫の額といふても無いが廣いとも云れない庭、よくも恁麽に澤山な木を植ゑたものだ、去年の夏父樣が陰氣だといつて邪魔に成る枝を片つ端から切つて仕舞はれたので、殊に楓などは實に可憐さうな姿になつて迚も今年は駄目だらうと皆て謂つて居たのに一番勢よく繁つて居る、庭て高いのは松て次が

椎、桃、次はまだ名も知らない花も咲かぬ別に眼障りにもならぬ木、それから檜、杉といふ順序で低い木は澤山有る、私は此の内杉が好きだ、裏庭の樅が塀を超えて羨やましさうな風に當方を覗いて居るのが何だか氣の毒な。

これだけの庭にこれだけの木を格好能く植ゑるのは中々骨折りて有らうが、どうも箱庭的なので、醫て見ると人間が丁度濃いお化粧をしたやうで天然の美に乏しい。一軒置いて西隣の家では相變らず御召の糊打ちする音がトン／＼と調子よく聞えて居る、馴れた私の耳にはさ程煩さいとも思はぬ、何處かで與那板を忙しく叩く音がし出した、此の節の事であるから胡瓜でも刻んで居るのだらう其の音が歇むと間もなく鮭をやく香がして來た、不意に後が明るくなつたので振り向くと電燈が點いたので有る。

弟の俊ちやんが茫然とした顔をして硝子越に中庭の空を眺めて居る。

文章は箱庭的ならず（評）

○利根川

千葉縣　川島波津子

有明月がおちさうに傾いてパッと東の空が明るくなると進んで行く汽船に浪立つ川の流れが白々と眼にたつてきた旅馴れぬ身の夜通し眠れなかつたので船に乘たのは昨日だか今日だか解らぬと云つた樣な夢ざめ心地のあやしい思にとじられてヂッと船べりによつて眼を上げた一行は姉樣と叔父との三人汽車でといはれる母樣に逆らつて汽船にのつたのは汽車ならばたつた五時間で着れるのを船ならば十五時間もかゝるといふのに少しても長い旅をして見たいとの醉興な心からである

うと／＼眠つて居つしやる叔父樣の白線の校帽をそつと取つて自分の袂へかくして是も眼をとぢて如何やら眠つてをるらしい姉樣をゆり起し「夜が明けてよ」といふとパッチリ眼を開いて窓の外にてて「好い氣持ね」とにつこりなさるやがて叔父樣も起して用意してきたパンやジャムや夏みかんをとりだして語りつゝ眺めつゝ朝飯を食たが此間約一時間何といふ長いご飯だらうと獨りて可笑くなる新利根てのりかへたのが丁度五時半

上等室の一隅に三人は座しただまつて外を見た船は大利根にでたのであるもやが深く下りて右も左も洋々たる水ばかり岸は見へぬ果知らぬ海の中をゆくかと思はれて手も足も伸る樣な廣々した心地になつた「あゝ爽快」とお叫びになつて叔父樣はポッケットからハモニカをだして「川路の旅」をおふきなすつた川浪の船にみだるゝさゝやかな音とハモニカの高い美しい音とはうまく調和して何かから天のさゝやきをもたらした目に見へぬくしき物の身に迫つて居るやうな氣がしてうつとりほゝゑんだ「日の出日の出美しいのよ」只是丈の短い文句をさつきスケッチした川の景色の葉書にかいて

舟がついたら直ださうと思つて鉛筆ながら丁寧になつかしい方の名を上書にする深いもやにせかれて日の光は縞の樣に美しく川の面を射て風は心地よく頬に吹く遠くにつないである舟や櫓をこいて行く船頭などを望遠鏡て見ると面白いこと向ふの舟ては船頭の内儀が子をだいて日にやけた肌あらはに乳をのませて居るああそこてはお茶碗を川の中て洗つてゐると夢中になつて見て居るとやあと叔父樣は私の袂を引なさるおどろいて振返るとさつきかくした白線帽を見つけて私の袂からおだしなすつたのだ「舟がついて上る時迄かくして置かうと思つてましたに」と云ふと「人が惡いナ」つて笑つて居るこんな事も旅の徒然の興てある舟は進んで行くゆくてにははるかに山の影が見えてきたあゝ筑波根美しい眺めだこと船がつくのもやがて一時後のことてあらうふたたび叔父樣がハモニカを口におあてなさると姉樣がスケッチノートを手におとりなすつた私はうたを思ふて舟の欄干によりかゝつた。

坂東一の大河に舟で行く愉快さは斯うもあらうかと思はれる（評）

○印刷所の半日　大阪　て　る　代

先づ五時から下男下女は、お掃除やご飯たきてドタバタ致します。

六時半頃から職人の出入て騷々しく、やう／＼靜まつた頃に七時が打ちますすると早速例の鈴の合圖て、モートルが舞ひ出す、機械の音がガチャガチャ實に八釜しい「ナショナル、リーダー」の奥書と、戀學士の見本とおくなはれ」「ボールを一枚お出しなはつとくれやす」等云つて來る、外から大きな體の仲仕が、「今日は…日進舍から來ました、鳳菊判四十五斤入二個と百紙十連入一個と」「さうですかどうぞ入れて下さい」受取書く、郵便と一聲、原稿が三つ校正刷が二つ、それから貞樣のお手紙、早く見度いけど後にと思つて、原稿と校正刷を植字部へ持つてゆくと、コンマのーエッキスのーと妙な節でそれ／＼、活字を組んで居る。

やう／＼暇が出來たと思つてお手紙拜見してると、突然隣の電話室てチリチリンチリン、とけたゝましい音「誰か行つてくれるだらう」とかまはず讀み下す、まだ止まない、仕方なしに「ア、モシモシ誰方樣ですか」「アアあなた夏野さんてすか」「イエ私靑木てす」「あ、さうてすかどうもおじやま致しました、サヨナラ」チリチリン、店へ歸へつて見ると、可愛い子供が、「今日は毎度大きに、中井インキ屋から參りやした、何ぞ御注文ごわへんか」「エまだ皆、揃つてる樣てす」「へ又どうぞ、宜敷うお願ひ申やす、サイナラ」出違ひに製本屋から刷本とりに來ました「お暑う…」と云ひ樣つと、刷場へ行つてしまつた、今度は職長が「オ嬢さん一寸お付けやしとくれやす、測量早學、谷間の姫百合、酒落禪、今日はそいだけ、だす」「さう」と云つて帳につける、つけ終つてホッと一息ついたところへ下女が「お

孃樣お忙がしうございますか」「エ」「アノウ女華族の木版出しとくなあれ」と破鐘の樣な聲、ビックリすると下女が「マア田中さんそんな、大きな聲して、お孃樣が、びつくりなさるがな、ちと氣をお注けッ」つてたしなめて居る、木版渡すと直ぐ走つて行つて、誰かまはず皆に、「アノお多福奴、己にえらい怒りやがるねん」と。

「ほんとに仕用がないチ、ホヽヽ」と笑つてるやさき、チンチンと十二時が打つ、これて今日半日も無事に過ぎた、又例の鈴をチリン〳〵是れは晝食の報知です。

東京なら珍しくもないが、大阪だけに毛色が變つてゐて面白い（評）

○轢死

阿波　芳野

朝より日影を見せぬ天は、時の移るに從ひ雲足早く、西へ〳〵と押し寄せて一層雲層を厚くしたが、午前十時頃になり今迄吹いてゐた東風が俄に靜まると、雲足がハタと止まつて、一天は只薄墨を流した樣、今にも泣き出しさうな空模樣になつて來た。

折りしも三番の下り列車が驛を發してシユーナル外へ出たと思ふ頃、俄に此沈靜を破つて汽笛尖く二聲三聲聞えたが、續いて非常汽笛をしきりに吹き立て、汽車の進行は忽ち其處に停止された樣子。あれたゞ事ではあるまいと隣の酒屋の人々は外へ出てみる、妾は二階の裏窓を開けて線路の方を眺めると、機關車からは又濁聲をだして白氣を吹き立てゝゐるし、煙突からは朦々と黑煙を吐き空を掩ふてゐる、列車から後方五六十間の所には、列車の係員一同が呆れた樣に線路を取圍んで見詰めてゐる、其樣は如何しても轢死者があつたに違ひない。それに西からも東からも轢死があつたといふので、一目散に鐵道指して走つて來る男女は、見るまに變事の場所に人山を築きあげた。

遂には酒屋の若衆も見たくなつて走りだしたが、傍にゐた一人の若者だけは眞面目に、「我身にかゝらぬ者は轢死や見るものてない、夜氣味が惡るいからチ」といつて其處におろしてあつた牧草擔いで我家へと歸つた。

此時列車も汽笛一聲西へ向つて進行を始めたが、黑い黑い煙は尙後に殘つて群集の上に渦を卷き、恰も惡魔が毒氣を吹いて死靈をなぶつて居る樣、遠方で見てゐてさへ慄とする位物凄く思はれた。

あゝ不幸な人、不幸な轢死者は誰てあらう？、先に迄此處にゐたあの若者の伯父に當る一人暮の老人てあらうとは!!、誠に老人の悲しさ聾の上に目がうすいので、誤つて哀れの最後をとげたのだといふ事てある。二三時間して後漸く檢視が濟んだ時、先の若者は泣く〳〵伯父の遺骸を棺桶に納め、悄然としてそれを擔ひ歸りかけた、折柄今迄閉されてゐた雲の扉は忽ち開かれ、大粒の雨は篠つく樣に降り出して、世は悽愴として一

しば淋しくなつて來た。

其當時の光景、乃ち空模様や何かに注意して細く書いてあるから、讀者其ものは寫されてなくても、讀者のありさうな日の感じは表れてゐる、好い文章である（評）

○月下の曲

栃木縣 青木多佳子

一片の雲もない空には金砂を撒の様な月がさえ渡つて、をまいた様に星が美くしい、今宵世の人の視線は皆此月にそゝがれるであらう、そよ〳〵と吹きくる涼風に胸の憂もやゝ開けて唯恍惚と眺め入つてゐた、と突然向ふの家からヴアイオリンの音がきこえる、高く低く細く太く、しばしは調をあはせてゐたがやがて清い聲て

夕空晴れて秋風吹く、月影おちて鈴虫なく

餘韻長う大空に消えて行く、彼の人の胸は恰ど今宵のやうに一點の曇りもないてあらう、私は言知れぬ感に打たれてぢつと聞とれてゐると、胸の奥の奥にひそめる何物かと其細い音とが相ふれては只悲しさのひしひしと胸にせまつてくる。



子守（入賞）　三河國岡崎町康生一三八　近藤道江

思へば遠し故郷の空、あゝ我父母如何にか在す此まで來て私はもう堪へきれなくなつて熱い涙が糸の様に頬を傳ふ、あゝ懐かしい故郷の父母さぞ不孝な奴と怒つていらつしやるだらう御氣の小さい母上は御病氣になどなりはすまいか姉様姉様と慕つた妹も頼もしからぬ姉と怨んで居るであらう、あゝ實に不孝此上の不孝が世にあらうか、友人が東京の某學校へ入學するときいた時は少女心のやもたてても堪らず婿をと迫る父母の言葉を逃れ前途に一道の光りを認めて家を出たものゝさて學資もなく一人漂然とさまよふうちに浮世の風の冷たさ、家にありての考へは皆空想と成つてしまつた、友人の傳手にて僅かばかりの日給に其日々々の食に饑える様な事はなけれど薄給の身には師によつて學ばん程の餘裕もなく望をとげらるゝのはそもいつであらう、何年の後であらうさり氣なく打よする世の大波小波には堂々たる男子でさへ絶望の―渦に巻込まれてしまつて、月桂冠を得たものは指折る程もないのであるに、ましてか弱い女の身で世の荒波を濟ぎぬいて

理想の岸につく事が出來るであらうか……と思ふと只心細さのみ迫つて、あゝもう何もいらぬいつそ斷つてお詫をしやうかと思つた事もいく度か知れぬ、けれど今更どの顔下て逢はれやう、いつそ友人に賴まうかと思ふと依賴心と誰かゞさゝやく樣ではつと思つて目を開いた。

いかなる大波がよせて來やうと、それは覺悟の上ではないか今更に何を嘆かう、命の續く限りは其と戰つて目的をとげねばやまぬ、もし意をとげた曉こそは深き不孝の罪もわび思ふ存分孝行もしやうもの、それまでは、父樣、母樣、ゆるして……………

今まで固くメてゐた涙の袋の緒も故鄕戀しさの念に破れて拭つても拭つても涙がせぐりくる、ヴアイオリンの音はいつか止んだ、月は益々さへて萬象皆靑黑く輝いてゐる、星が一つすうと流れた影を逐ふて目を遣ると、いつの間に出たか白い雲がふうはりと南の方へ恰ど我故鄕のあたり、彼の下には父母が何をして仰居るだらう、せめては蔭ながら我家の健康を祈らうとしづかにふり仰いで懷しい名をいく度ともなく繰返したのである。

月下の戀曲に望鄕の涙を催ふすと云ふのは、もう文章にも詩歌にも陳くなるほど作られてゐるが、人間の情に變りない以上は、幾度讀んでも心が動く（評）

○新らしき家

熊本市　近野春子

今迄の所では、色々不便ではあるし、も少し小ヂンマリとした所の方が、宜いと云ふので、總掛りで、二三日足を棒にして、漸つと見付け出したのが昨日。場末ではあるが、まだ新築後間もない事とて、外見もどうやら、さう見蔑つたものでもない。それに、誂へ向の屋賃が安うて、庭が廣いときてゐるから、さあ善は急げと、大小の世帶道具を、荷車四つに仕立てゝ、今、引き移つたばかりである。

門からは入ると、すぐ、玄關の二疊敷になつて、其次の間が八疊の坐敷、其の隣りが、唐紙一重で六疊敷の室、厨は丁度其の後の小屋になつて、すぐ右手に井戸がある。玄關の脇の仕切戸を開けて、此の井戸の横を通り拔けると、もう廣い〳〵庭になつてゐる。

暫らく、住ひ人がなかつたので、大分庭などは荒れて露茂き亂れ草の根元なんどは、ジメ〳〵して、何だか心持が惡い。お母樣と安夫とは家の中の掃除、妾とお梅とが庭と云ふので、草を拔いたり、掃出したり、廣いだけ、大分辛勞したが、それでも、夕方頃には、スツカリ濟んで、拭ひ淸められた椽端に、腰打ち掛け乍ら、打水凉しう庭を見やると、何とも云へぬ愉快さ。晝間の疲もと皆早く寢た。お梅と二人で室に寢た。頭が枕に付くか付かぬに、もうお梅の鼾が耳につく。

時計の刻む音、鼠の天井を走る音、玄關の方でも怪しげな響。淋しい樣な恐い樣な……。目は益さえる計り。犬が近くて吠えた。物皆死んだ樣な靜かな夜の氣を動かして、ガラ〳〵ッと空車が、門の前を通つた。三尺長屋に、しどけなく小さいのが四五人、寢てゐる枕元には、薄暗いカンテラから、油煙が盛に立つて、そこに、ションボリ、夫の歸るのを待つてる、井戸端會議の議長の事を、色々想像して見た。時計がチンと一つ鳴つた。

輕い(評)

○琴の稽古

本郷 須藤さだ

何時も學校の歸りによるのを今日は朝行くいつもの通り格子を開けて這入つたら八時前なのに二三人來てゐたのでマアと逐口から出る上つて御機嫌ようと頭を下げると皆なも下げる居る所が無いから玄關から其の人々を見て居た隅にゐる青ぶくれのスラリとした十八九の日本髮が隣りの人をジロジロうるさい程見てゐる其の人はグッとハイカラの十

金魚屋 水戸 中川しづ江



七八羽二重の帶を可愛らしく結てゐる人でこの人も時時青ぶくれを見る二人の眼がハタと合ふと兩方でハッとそらすよほどお可笑い三十分程たつてからすいたから室に這入つて番を待つてゐたこの室には私と新に來た人と都合三人何れも手を膝の上にのせて行儀よくして話一つしないするといつの間にか來た廿二三のやせぎすの色白の美人がこれも挨拶した後は紫矢絣の銘仙の袖の上に眞白なフックリした手を尋常にかさねるやはりだまつてる次の室ではさつきの青ぶくれが俊寛の曲を稽古してゐる「うけてぞ開く赦文めぐみの露の玉くしげ」といふ聲の音量のたつぷりある歌が琴と和して室の中にたゞよふ「二人の袖にかゝれどももれしはいかにおのが目の」と曲はいよ〳〵進む人々は聽ほれてる次の次の室では何やら手ものらしい「くもりやすると」こゝまでくると音がハタとやんで一寸々々○○さんこゝはこうとツル〳〵ひて見せるヱウさうですよと次の手ものゝ音もやんでうるみ聲の○○さんが答え

るどうもありがとうとお禮いひ〳〵「うたがひの雲ははらへども」と聲はしんみりとなつてよく意味がわかつてうれしいこの時奥からさつきのハイカラと共に代稽古の人が出て來てこんど貴女でしようと私を爪をはめたまゝの指でさすエ、といへばそれじあ奥にいらつしやいとさきへサッサッと、私もあとから。

文章の稽古もなさつたてせう（評）

○春　夕　　大阪府　寺部君子

既う日は落ちて、何處よりか鐘の音が響いて、其餘韻が地を這うて野末の森に消え込む。塒に歸る夕烏の聲も聞えなく成つて、淋しい春の夕暮に「返答は什麽だサア返答は怎麽だ」と大聲に怒鳴て、町外れの電線を杖で打ては耳を傾けて居た、五十餘りの男が、此度は電柱に向て「サア返答は怎麽だ、返答は有るまい」と獨肩を聳かして居る。朧に霞める夕月の影あらはれて全く暮れて了た、其處へ花見歸りの浮男が通り掛て、面白半分「返答は怎うだ」と言ふと「返答は何うだ」と杖を振り乍、血相變へて詰め寄つたので、件の男は吃驚して逃げて行て了た「馬鹿、馬鹿野郎、返答をせんか」とあらぬ方を白眼めて、狂ひに狂ふて居る「あらお父樣、這麽處にお居てなさつて、妾先刻から、什麽に捜して居ましたか」「返答は何うだ」未だ言て居る「最う可いわ分て居ますわ、さあ歸りませう」と娘が、這麽謂ふと、さしも狂ふて居た父は「うん」と柔順に歸て行た。此哀れ相な二人の影が見え無くなると、一時に夜は寂寞として何處やらに梟の聲がする。

○夜の交換室　　大連市　柿本千枝子

已經到了時候了と昨日學んだ支那語で呼起されて、枕元にたゝんで置た白の事業服に紫の袴を手早くつけて一寸前髪を直しながら機械室へ行く。主事は早寢されたとみえて取締のみが今日の市外通話の張簿を整理し居られる、晝間の忙しさは何處へやら大連の町も眠に入つたとみへて外は往來のけはひもなう遙遠くに支那人が砂糖マンヂユウと亡國の兆を帶びたとでも云ふべき哀れげな聲が聞ゆるばかり、たまさか落ちたドロップに何番えと聞くと大連病院へとしんみりした女の聲此の夜更に病院へ懸けるのは必ずや急病人であらう？と私は三年前の父が最後の光景を思出して云ふべからざる寂寥が襲ふてそゞろに衿が寒い。何に驚いたやら近所て犬がけたゝましく吠ゆるので氣味が惡くて東の方の窓をメに行く友はと見れば受話器をかけたまゝ臺に寄り懸つて白河夜船は白帆を揚て圓かなる夢は故郷の事てがな。軈て窓先が少し明るくなつて隣の家が朝靄の中に漂と浮ぶ、大陸のならはしと夜は明けながら太陽は昇らぬ、時計を見れば四時に二十分前。

●●●

記者曰　左に掲げる貞水女の御嶽登山の記事は前後數回に投稿されたもので凡そ二十枚以上あるのです、明治四十年八月三十一日首途　九月一日淨水に身を淨めて日待す、同行七人女は貞水女一人。二日遠州掛ノ内驛發車、名古屋を經て中仙道線に依り大井驛下車、付知町一泊。三日、木曾の深林を歩き、御嶽山麓に一泊。四日、登山。五日、下山途。六日、福岡町一泊。七日、大井町より乘車、熱田乘換、掛川下車、夜十一時歸宅。八日、下山祝ひに出席。九日、土産物くばる。以上十日間の旅行記事を正直に飾り氣なく書いてありますが、限りある紙上で之を全部掲載することは許しませんから其中の主眼たる御嶽登山の一節を載せました、時節柄登山の記事も面白からうと思ひまして。

御嶽登山（節錄）

静岡縣　貞水孤讀

九月四日（雨）從、此所は御嶽山の麓で、麓より不淨の物を持つべからずとのこと、旅衣を脫いで宿へ預け、行者、行手拭、一笠一座の身拵らへ、金剛杖を突きながら鈴を鳴らし、强力に三圓分の辨當と其他小荷物を持たせて登るのである、少し行けば定休所がある。麓より登る路傍に二三尺乃至一丈位の大きな〳〵石碑が金文字入で三鏡靈神とか末廣靈神とか一々違つた名目で澤山々々建立してある。暫らく行くと「キヨタキ」「ナホタキ」の二瀧があつて一々此瀧に打たれて身を清め「六根清淨」を唱へて登る、麓より三里も登ると八海山神社となる、此所が四合目で、定休所がある、甘酒、駄菓子など賣つて居る、此近傍は遙かの間草山で所々にハンの木や楪の大木がある、又少し登り鳥居を潜ると今度は樅、栂等の大森林で下は熊笹、路は三尺乃至一間巾位で大きな柏を一面横に渡してある、梯子を登る樣で辷らず外れず步きよい。又もや雨が降つて來て風も交り大變寒くなつた。次が三笠山神社である。八海山から此所迄登る間一里もあらうに大森林の下を行くので遠くは見えず、登山者の群に度々逢ひ。金剛杖を力足、一步々々に喘ぎつゝ、富士登山と同じ樣に六根清淨御山快晴を連呼し、愈三笠山迄登ると、もう全く氣候が變つて丁度おまけに曇天だから雲霧が矢の樣に走り、風は冷たく頰に打付け、手足は氷と冷え突へガチ〳〵齒は打付かる、是でも血の巡りがあるのかと我を眺め人を眺め、急いで參詣濟す、社の右手に水溜り二つあり此水眼の藥になるとて一同戴く、左は嶮崖である、此山下に入るべからずの札があつた。寒くて堪らぬので急いで行く、少し下ると田の原でふ盆地へ出る、下る路にも詣る所あり、詣る度に講者經文を唱へて手間取り、私等は御經を知らぬので顫えながら待て居る、田の原は六合目、濕つた平地で風の爲の爲に押へられた樅栂等の短かい黑木が密林してゐる、此所に粗末な旅宿がある、今夜は此所に泊るので急いで此家に入り座笠を片よせ、足を洗つて座敷へ上つた、ちよつと酒屋や米屋へ行くにも十里十五里の山路を行かれば無い此山中に飯も酒も甘酒もあるので都合は宜いが此所は一棟家だから諸方の行者講者が此宿へ入り込むので非常の混雜、此夜なども凡そ百人以上泊り、飲食物は甚だ粗末で高價である、白飯一膳五錢、味噌汁二口計りのが三錢五厘、精酒一合金八錢、何も角も是に習ふて高價い、此宿で使ふ飲食物は美濃國から取るとの由、無論登山者のある時計りの稼業で秋になれば麓へ下るとの事。おつとめを濟し、さて副食を取つて强力に持たした辨當頂く。宿泊人が大勢で夜着の

無いのに困る、薄き煎餅蒲團七人五枚で行衣の儘、一同館の締詰となり、淡き夢路に入る。

同五日(雨後曇)朝は一時頃から御所藏をする講者もある、松明を燈して御山へ登る連中が九分九厘である私等は三時頃起きておつとめしたが生憎雨が降り出した、辨當食して休んで居るとすらりと夜が明けて了つた、諸講者が皆登山して了うから私の組も慄へ乍ら支度を調へ出發した時既に五時。雲霧が擾亂して矢の様に飛んで來て手と云はず顔と云はず打付けて瞼はばた〳〵菅笠は取られさう、冷たいよりは寧ろ痛い、路はツルツル辷つて怖い、逸のせに登る内、樅、樺、白樫などの黒木が風雪の爲に押へられ高くは伸びず横に蔓つて奇體な古木に見える、其内に雨霰や雲風がゴー〳〵と飛んで來て行手が見えず、一生懸命登つて行く數十人の連中が見ゆる許り、若し晴天であつたら眺望美しからうに惜むべし、七合目あたりから五葉の這松ばかりとなつて、八合九合の間に石室もあれば種々の神が安置してある。雨は下から吹上げて來る、一丁以外は見えない、綠色をなしてる五葉松の間へ大きな石が突出してゐる、九合目以上になると這松も盡きて只金糞のやうな燒石ばかりがら〳〵してゐる、十合目が頂上で御嶽山絕頂の木札があり、其下に小屋がある。頂上に拜殿鎭座します、拜殿の四方は石垣で本殿は木造りである、極寒の爲何年經ても朽ちぬ有様。天候惡しくて殘念ながら滿足を得ず、笠を脫して拜殿に參詣したのもそこ〳〵。是から奧山に劔ヶ峰から、御池が五つあるとの事月の御門日の御門などもあるさうなが、今日はまさしく凶惡な天氣模様、吹上げて來る風雨と寒氣に責められて、手足處か全身がち〳〵顫慄ひ、拜殿の參詣濟むと下の小屋へ下りて了つた、此小屋でも登山者を宿泊さすので飲食物がある、中へ入つて休まふとしたが人だらけで入る事ならず、入口に人の山を築いて大混雜、私等一同は臺所元の窓穴へ廻つて茲から甘酒二杯宛立つてゝ慄え乍ら飲むだ、あの美味かつた事一生忘れられず、霧水が茶碗へ這入て、いくら飲んでも甘酒が減らなんだとは下山祝ひの時故郷の人に語つての滑稽談であつた、後では笑ふが此所では笑ひ處か可愛想に先逹のお爺さんなどは死にさうな顔になつた、晴れる見込のない空模様、急いで下山に向つた六根清淨御山快晴を唱へながら驅け下る、八合目あたり怪しき小鳥の鳴聲がしてゐる、田の原の宿へ歸つて休むと寒さと疲れに責められて體がほと〳〵綿のやう、十時前此所を出發、昨日來た路を難なく下りて八海山の所へ來ると雨も歇んで雲切れ、日光が射して來た。頂上を振返ると雲は擾亂す様にはげしい。平地が半盤位の日には高山の頂は雨が降ると見える。登山者がまだ澤山あるので路は賑かである。又急いで下りて三合の宿で辨當食し、程なく大瀧村へ下ると、右へ少し路よりして御嶽三社へ參詣し、元來た路へ出て行手拭を洗ひ、漸く人間界へ出た。御札や山圖や御百草など買つて、さて一昨夜泊つた岩瀨屋へ來た、時既に午後五時、風呂に入り水浴し、おつとめして其內に酒肴が出る、無事で下山の祝として宿で呉れるので、此方ではそれだけの禮をする、酒宴も夕飯も程なく濟むで、一同疲れたホロ醉氣嫌、八時靜かに寢に就く。隣座敷ではまだ諸方の道者が賑かい。御嶽へは女人登山も多い、二十歲以上四五十歲の女がなか〳〵登る、講者の多いのは東京と埼玉であらう、東京には女人講さへある。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は乙種の規定に據る。

天

○薔薇姫姉妹

京都　さくら

或國に王樣がありました。大變優しいお方でございましたから人民は皆從つてをりました。が、ふと御病氣におなりなすつたが、とても快くなる事はてきぬと覺悟を決めまして、お妃と二人の姫君をよびよせ、「今度はとても快くなる事は出來ぬ。其れて此指輪は我國の寶物であるから如何な事があらうとも離してはならぬ。」と言つて其まゝお死になさいました。

お妃と姫君とは悲しみましたが仕方がありません。寶物の指輪を寸時も離さず半年程も悲しみの中に送りました。すると或夜の事母君の姿がふいと見えなくなりました。姫君は勿論臣下の者も大騷ぎをしましたが仕方がありません。氣が付いて見ると彼指輪もありません。さあ愈々大變と驚く計……

父君を失つて間もなく此騷ぎ、あゝ生きて甲斐なき此身よと姫達は泣く／＼手を携へて泉水の邊へ歩ひてきますと、何處からか芳い香がプンとして優しい聲が聞えました。「お姫樣お泣きなさいますなよ」

驚いて見ますと姫君の常から愛してゐる薔薇てありました。姫君は「オヽお前は薔薇てはないか？」「お母樣のゐらつしやる所でも知つてるの？」と妹姫も急込んて尋ねました。白い薔薇は申ました。

「ハイ此處から十里計北の森の中に古城があつて指輪王が住んてをります。そして立派な指輪さえ見れば盜つてゆくのてす。それて寶庫は指輪て一杯になつてゐます。夫が御殿に立派な指輪のある事を聞いたから堪りません。昨夜盜りに來たのですが、お母樣は目をお覺しになつて盜られてなるものかと指輪をきつとお握りなさると、不思議やお母樣の躰は眞珠の指輪になつて今は指輪王の庫に入れられてゐらつしやるのてす」

姉姫は妹姫と顏見合せ「それじや早くお助け申さねば……」「薔薇や如何したら可いだらうね」と妹姫。紅い薔薇は美しい姫達の顏を仰ぎながら言ひました。

「お姫様夫には可い事を教へて上げませう。私の片をとつて吹いて下さい。すると私は指輪になりますから手にのせて、行け〳〵と三度言つて下されば私がお伴れ申しませう。」とすつかり教へてくれましたから姫達はよろこんで、先づ姉姫が白い薔薇をとつてフッと吹きますと金剛石の指輪になり、妹姫が紅い薔薇の花片をとつてふつと吹くと紅玉の指輪になりました。

そこで掌に載せて行け〳〵と三度言ひますと、不思議や姫の體は宙を飛んでやがて指輪王の城に着きました。

指輪王は居間で色々と立派な指輪を見て樂しんで居ましたが、不意に窓から飛び込んて來た者があるので驚いて、



「ヤイだれだ斷もなく這入つて來たのは？」と言つて見ますと美しい姫が二人立つてをります。

「何しに來た？」姫は美しい顔を上げて、

「ハイ妾は隣國の者ですが王樣のお名は豫て承つて居りまして、何卒して女中に使つて頂きたいとはる〴〵參りましてございます。」

「イヤ身分も知れぬ女など使ふ事は出來ぬ。」

姫達は彼指輪を出して「お粗末ながら納めて下さいませ。」と差し出すを見れば金剛石と紅石の指輪、夫れに精巧なる薔薇がほりつけてあります。指輪王は莞爾として「可いとも〳〵此樣なよい指輪をくれるなら」と許してくれや

した。そして其晩は二人の膝を枕に眠りました。姫達はそつと起き上りました。そして指輪王が指にさしたる金剛石と紅石の指輪を拔き取り手にのせて、行け行けと三度言ふと姫の體は自然に走つてやがて指輪の寶庫につきました。見ると彼寶の指輪はチヤンと一番上の棚に置いてありました。夫より氣になるは母君の御身の上如何成つてゐらつしやるだらうと其下を見ると眞珠の指輪は幾つもあるが、さて何者が母君か知れません。「あゝお母樣！」と思はず泪を落しますと中央にあつた眞珠の面に明かに母君の顏がうつりました。「オオお懷かしいお母樣！」と馳せ寄つて姉君が其指輪を取り上げる中に、妹君は寶の指輪を取り返す。又もや彼の指輪の力をかりて御殿へ歸つて參りました。

すると不思議や、眞珠の指輪は何時の間にか母君に返つてゐらつしやいました。彼金剛石と紅石の指輪は元の紅白の薔薇にかへり、只だ寶の指輪のみは愈々光り輝いてをりましたとさ。

（評）恐らくは材を西洋お伽噺から取られたのでせうなか〳〵よく出來て居ます。

地

○水中の花

千葉縣　橘　露子

ある所に大きな池がありました。其の池の中に其れは其れは美しい花が咲いて居て、そよ〳〵と池の面を吹く風に連れ、立つ漣の上に恁う搖り〳〵と動いて居る態といつたら、宛て龍宮の仙女が揷す簪ではないかと思はれるほど、奇麗な花でありました。

すると此處を通りかゝつた淸太郞といふ男の子が、それを見つけて

「おゝ奇麗な花だ」と少時見恍れて居たが、池の中に咲いてるのだから、欲しくても取る事が出來ませんから、たゞそれを眺め〳〵池を廻つて那方に往つて了ひました。

稍少時經つて、今度は其處へ女の子が來て、やはり其花を見て居たが、欲しくて堪らないものだから、自分から池の中へ這入つて行きましたが、足を投るや否や中が泥深いものですから、ぶく〳〵と足深く這入つて動く事が出來ないやうになり、最う花を取る處ではありません、困りきつて泣き出して了ひました。

其の中に又何處からか一人の男の子が來て、此樣を見「お前は何を泣いて居るのね？」と尋ねると、女の子は、

「わたし、那お花が欲しいから取らうと思つて入つた

ら泥て動けなくなつたの、後生だから救けて下さい」と泣きながら申します。て、

「女の癖に何て言ふお轉婆だらう」と言ひながらも、先づ其女の子の手を取つて、救け上げて置いて那向を眺めると、成程美しい花が咲て居るので、急に自分も欲しくなつたので、

「僕は水泳ぎを知つて居るから、何の事はありやしない。さうだ、那の花は僕が取つて了はう」と直ぐ裸體になつて池の中に飛び込ました。

なる程泳ぎは仲々上手であつたが、泳げば泳ぐ程水に波が立つて、一尺泳いで前へ進むと、花はやはり一尺波に搖れて那方へ往つて了ふ。急いで泳げば大波が起つて花は波を破つて了ふし靜かに泳げば何時までも手が届かないて、遂々花を取る事が出來ません。

其の中に幾ら泳ぎは上手でも、身體が疲れて來て詮方が無くなつたから、諦めて元へ歸らうと思ひ、回顧つて見ると、なか／＼遠いので、早や戻る勇氣も失くなつて困りきり、それも遂々泣き出しました。

すると花は男の子が動かなくなつたから、自分は元のやうにチャンと水に浮んてをります。

此の時又一人、今度は大人の男が來合はして、此の有樣を見て、驚いて直ぐ其側にあつた小船に飛乘り、アハヤ溺死をしかゝつて居る子を救ひ上げて、さて其譯を糺して見ると、實はこれ／＼恁ういふ譯と、花を指して仔細を話しますから、

「お前達は餘り智惠が無さすぎるから不可い、此船に乘つて取れば雜作もないに、どれ私が取つて上やう」とドン／＼船を漕ながら、花の方に近付いて行くと、次第に波が起つて來て、ユラリ／＼と花は那方に動き出しました。て、寧その事、棹て花を搔寄やうとすると、花はヒヨイと頭を水の中に沈めて了ふ。忌々しいから、船を漕いでは棹を出し／＼すると、花は頭を沈めては逃て行く。その中に有繋大人の腕でも疲れて了つて、向岸に近い邊まで往た頃は、早や何うする事も出來なくなりました。

恰度其時、一番始めに通つた、花の美しいのを褒めて往て了つた清太郎といふ子が、其處まで巡つて來た處又此の花を見て、

「あら、先刻も美しい花を見たが、又此處にも同じやうな美しい花がある、これなら取れさうだから、取つてやらうよ」と云ひながら手を延ばして、岸邊に寄て居た件の花を、手もなく取り上げて、大悅びて家へ持

つて歸りました。

何うてす皆さん、清太郎といふ子は最初取らうとは思はなかつた花を、恁うして安々と手に取る事が出來たてはありませんか。

（評）行文は稀に見ろ流暢ですが教訓的としては果してどうてせうか清太郎の性格を今少しはつきりかいて頂きたい様な氣もします。

人 ○お雪さん

熊本市被分町一　近野春子

或る北國の片山里に、谷合村と云ふ村がありまして、母子二人暮しの一軒がありました。娘は今年十二て、雪と云ふ名てしたが、名には似も付かぬ色の黒さ。顔容もさまで醜い方でなく、唯色の黒いのが疵て

子守　　青森縣　松尾ちよ子



した。一體不思議な事には、此村は、皆色の眞白い人達計りてしたから、お雪様の色の黒いのが、一際目に付きます。小供同志遊ぶ時なんど、「お雪様、貴女の色何故そんなてしやう」「名計りお雪つて仕方が無いのね」、などと冷かしますので、お雪様は殘念で殘念で堪りません、自然と獨り坊つちになつて了ひました。

或る日例の如く、獨て家の前に遊んでゐますと、二三人の小供が通りかゝつて「まあ御覧な。色の黒い事ねえ。大方前の生て、不孝ばかししたんだらう」。と云ひ乍ら、行つて了ひました。お雪様は年には老せて、賢い娘てしたから「今迄一

度も、たつた一人の親の言ひ付けに、背いた事もないが……あゝまだ孝行が足りぬか」と思つて、それからは尚一層、孝行を盡しましたので、後には、界隈の評判娘となりました。

ところが、お雪樣が十三の冬、お母樣が病氣に罹りまして、手を盡しても、捗々しう快くなりません。寢床に臥つてゐる、目の凹んだ、お母樣の樣子を見る度毎に、お雪樣は、涙に暮れてゐましたが、何か思ひ付いた如に、キッと頭を擡げて、雪降る夕暮、後の山路を段々上つて參ります。もう彼是一里も上ると、法華峠と云ふのがありまして、其の近所に雪宮とて、小さな社が、建つてゐます。健氣な此娘は、親を思ふ一心には、道なき道を踏み求めて、漸う社の前迄參りまして神前の平石に跪いて、祈願を籠めてゐます。

夜は大分更けて雪は益々降りしきる。お雪樣は寒さをヂッと堪へてゐる中に、夢ともなく幻ともなく、バタリと倒れました。

頓て、倒れてるお雪樣の肩を搖つて、「お雪、お雪」、つて聲が致しますから、ハッと氣付いて見ますと、その目の前に、銀の如に長い髭を垂れた、高尙いお爺樣がゐて、「俺は雪の靈だ。汝の孝心はよく知つてる。すく歸つて見よ。お母樣はもう全然快くなつてるに違ひない。褒美には、雪よりも白い色をやらう」と二三度、お雪樣に觸つたと思ふ間に、フッと其の姿は消て了ひました。アッと思つてパッチリ目を見開くと、疑も無い我家です。是は不思議だと思つて、頭を上げて見廻しますと、近所の人達が四五人、ズラリと枕元に坐つて心配相に眉を寄せてゐます。尙驚いた事には、あの大病のお母樣までが、火よ藥よといそ〳〵してをられるのです。さては先刻のお爺樣のお言葉は、夢ではなかつたかと、先づ嬉しさがこみ上げて、打ち震ふ聲をあげて、「お母樣、御病氣は？」。と尋ねました、お雪樣は一體どうして家に歸つたてしやう。

それは、お雪樣は社前に氣絶した翌朝、折りよく、村の者に助けられたのでした。

お雪樣のお母樣は、さすがの病も、お雪樣の眞心が徹つて全快し、其代りに、お雪樣は、二三日して、すつかり身體の痛みも取れて床を出ましたが、不思議にも以前の醜くかつた色の黑いのは何處へやら、丁度、生れ變つた樣に、其の名の雪にも劣らぬ樣な、眞白い美くしい娘となりました。

（評）これはよく見かける類のはなしですがよく出來て居ます又作者の文字の達者なのは殊に感服いたしました。

和歌

與謝野晶子先生選



△規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は丙種に據る。

【天】

大阪市北區上福島一丁目四十邸　田中とき

下髪も袖も裳裾も輕やかにゆれて涼しき初夏の風

【地】

三重縣名張町　關本粱子

けだものゝこゝろとなりて獸の心に似たる君を惡みぬ

【人】

鹿兒島市加治屋町百六十二番戸　山下敏枝

雲の峯吹き崩されて白銀の浪の中より海の月出ぬ

【秀逸】

○　上毛　元子

三つの山裾のみ見えて雲掩ひ野はほの〴〵と朝霧湧く

○　越後　佐藤浪子

わが山の百合咲く谷の眞清水は流れて海の潮にぞ逢ふ

○　伊賀　秋山伊冊緒

かなしさの極みの心われとわが胸を破りぬせんすべもなみ

○　廣島　綠子

松風や山の中なる眞淸水を汲むごと覺ゆ汝が聲きけば

○　肥後　富丸わか子

あぢさゐはすゞしうさきぬ花園に初夏來ると告げむばかりに

○　伊勢　かすみ

久方の月の園生は白銀の眞玉こぼるゝ夕とおもふ

○　大阪　山內溪子

病む時に細き雨して紫陽花の落ちるを泣きぬすだれの中に

○　芝　長谷川靜枝

いつくしま汐滿ちくれば海上に燈籠ならび松の風吹く

○　福岡　香具山歌子

奈良の山憶良が棄てし歌反古の埋もれてあると思ひつゝ行く

○　山口　酒向とり子

さみだれに身の行すゑをおもほえにうつゝともなう尼の影見ゆ

○　常陸　宮本いち子

うし車高荷積み行く幾輛に秋雨すなり丘の上の街

○　千葉縣　とむら賓子

（兩國川開の夜舟出して）

天津空の大海をこぎわたる月の御舟とわれおもふかな

○　羽前　千代子

夏衣すゞしき君は琅玕のおばしまにより月見ると云ふ

和歌

○　日本橋　清　鳳子
戀せよと小女の我に美しき髮とましろの櫛をあたへける

○　越後　金子たま
秋の風道にまよひしたび僧が小がさにうすき三日月さしぬ

○　信濃　太田喜志子
灰白のみ空さびしく鳥とばず敗殘の子が胸に似るかな

○　信濃　胡　蝶子
君慕ふ胸は消しと知りながらなほ口びるに紅さしてきぬ

○　南總　滑白艶子
籠にいれし虫も今宵は放ちけり月おもしろき秋かぜの家

○　常陸　大久保輝子
あはれなるうなゐの聲のきこゆなりゆふべさびしき谷の一つ家

○　三河　鈴木春子
雨晴れて夕日照り添ふ磯ぎはに貝拾ふ子の袖見ゆるかな

○　茨城　金塚仁子
少女ぞと云ひて涙をそと拭ひ雨降る窓によりませし君

○　信濃　伊藤蕗子
白百合は鷺の羽色の靄の中に香りてありぬふるさとの野邊

○　山城　山田幸子
こほろぎの聲きく夜となりにけり庭の白萩咲き初めしより

○　上毛　岡下きん子
深みどり若葉しげりて此のころの社の森に日ぐらし啼くも

○　伊賀　森野とら
初夏の海にし立てばほのじろく月は殘りぬかたわれ月は

○　下野　栗原くに子
木々はみな綠衣つけほととぎす山に啼くなる初夏はきぬ

○　京橋　野澤光子
山一つ越ゆれば今日も宿からむ赤き衣きる君が背の猿

○　奈良縣　中富よしみ
露ぐもり小雨そぼふる山ごもり君ぞなつかし世をすれし子も

○　日本橋　松岡千代子
いつの間に種こぼれけん籬垣にこきむらさきの朝顏さくも

○　岡山市　小林露子
郭公有明空に鳴く聲をそひれの園に聽くぞうれしき

○　茨城縣　前原琴江
三日の月ほのに匂ひてキオリンのしらべも涼し白萩のやど

○　埼玉縣　大澤花畔子
武藏野をやせて流るゝいさゝ川白うさびしや初秋にして

○　伊豫　井上いち子
母居ますみ座の前に手向けしは香にしきびにむらさきの花

○　大阪　鈴木房子
待つごとく花散る夕御名よべど永久にかへらぬ君にてありき

○　近江　太田靜江
君戀ひて三とせの春となりぬるにやさしき歌もきかず我逝く

○　肥後　宮丸わか子
谷川に切り倒されしこぶ柳青き芽たちて五月雨のふる

○　伊勢　今井まさ子
寛の靭の白銀の征矢束あまた擲投るがごと夏の雨ふる

○　伊豫　曉　子
懐しと待し君とい向へは月を見るやうに仰ぎ得ぬわれ

○　上毛　飯島さよ子
憂き事の數々われは胸に秘めて笛吹き居れば月のぼりきぬ

○　秋田縣　千代子
三年振故郷に歸りて妹と朝露おける苺とる哉

○　靜岡市　中村三千代
かず〳〵の大盃ぞ天の酒溢えしに似る遊樂の露

○　上毛　伏島直子
朧夜のとばりは今ぞおろされぬおばしまちかうさくらちりつつ

○　本郷　朝井千とせ
ゆあみして竹の小椽に月待てば桐の葉かげに日暮のなく

○　仙臺市　早瀨このめ
釣り忍ぶかゝれる露のしたたりを硯にうけて忍び日記かく

○　伊勢　大原しづ子
詩なりてあづまやの軒さまよへばいとゞ清き風髪をふく

○　大阪　中島龍子
ほとゝぎす啼く夜は遠き花柑子咲ける小家の灯ぞこひしけれ

○　筑前　高松ひで代
帆柱の山の麓はもやこめて背戸の小川に萩の花ちる

○　横濱　清水ふみ子
夏ぐものこき紫にむらがれる上にか天の園はあるらむ

○　備後　井上年子
さめにける戀と思へど猶君の姿の夜半にほの見ゆるかな

○　鳥取　上山千賀子
月ふみて小萩が許のおもひ草きるとおとせし紅扇かな

○　寺尾村　野中泰子
天つ姫いくもゝ千人ひと時になみだする如夕立ぞふる

○　遠江　加藤糸子
我一人暮れ行く空を眺めやり線の陰に友おもふかな

○　本所　尾崎あい子
去年の今日さきくと云ひて別れにし友もなつかし夕月見れば

○　宇都宮　淺野謐子
七色の大橋遠く東の七浦かけて夏の雨降る

○　福井縣　片山千里
其上に天童金の烱とりて御日を迎ふらし夕紫の雲

○　静岡市　根岸錄子
紫の雲に乗り來る夕月を迎へて立ちぬなでしこの花

梅雨　山梨縣　古屋しげ子



○　香川縣　長尾峰子
湯上りの衣がへして歌思ふ少女うつくし夕顔の宿

○　新潟縣　原　つれを
君を見ぬ心くもりぬさみだれの降る日淋しく晩鐘きく心地

○　徳島縣　吉田紫花
螢かと槇の葉ごしのまばら星萩散る宵の眼に疑ひぬ

○　茨城縣　今泉磯千島
相逢ひぬ天の川原に二つ星地に今われら口びるをつく

○　東京　高田秀子
はらはらと露の玉ちる宵柳の糸よりいてし夏の月かな

○　大阪市　山内溪子
むかしの書小羊追ひて歸へる子を君に似るよといひたまふ君

○　金澤　吉川たつを
わが母よ君がやむ日はもろともにわれは病ひを身におぼえぬれ

○　岡山縣　田　鶴子
み手とりて共にゆかばと思ひけり八千草匂ふ秋の野の原

○　攝津　小夜子
流れ行く花に胡蝶の夢のせてはかなく春もくれはてにけり

○　薩摩　みずゑ女
竹垣の外にさへ咲く夏菊は心なき子に手折られやせむ

○　下總　青雲子
竹垣も破れはてたる古寺にこき紫の朝顔の咲く

○たらちねも來ずやゐまさん旅路なる我や如何と月あかき夜は　下谷 雁雨子
○つゝましうくむさかづきに月さして夏もよそなるふな遊びする　幽草女
○紫の朝虹淡く湖に白帆涼しき背蔭の風　京橋 細川桊子
○山清水その傍らに百合咲きて我な迎へぬ古さとにして　岩代 根水K女
○何者ぞまとふかぐろき雲に居て吾吞つゝみ哭けとしゆゐは　山形縣 八千代
○しげりあふ夏の青葉をわけ行けば涼しく聞ゆたきのひゞきを　茨城縣 坂本癸耶子
○君がみかげちひさくなりて野の末に夢にも似たる雲ぞ流るゝ　茨城縣 山下馥子
○湯上りて涼しき風に吹かれつゝ小川近くに螢狩する　茨城縣 須崎綾子
○草原やさやに月照り虫あまたよき音に鳴きぬ日本振りかも　信濃 山越三千代
○涼しさや江に浪おこり水に浮く花藻の草のさゆらぎするも　信濃 駒澤ひろ子
○寂として心はさびし死の海の遠鳴もきく靜かなる夜　金澤市 高村安江
○やはらかに紅らむ雲のみ空かもほのかにもろゝ潮の遠なり　常陸 酒樂しづく
○わが遣りし君が持つばら友の來て取れは忽ち崩れけるかな　尾張 鈴木しげ子
○夏草の小路月夜の虫なきて流の遠に伯母が家見ゆる　板橋 瀬々とし子
○美しき水もなかれて小野川の岸の夏くさ花白うさく　寺尾村 野中やす
○窓により語る人なき夕暮み故郷に似て村雨ふりぬ　靜岡縣 上原靈子
○わが消さ愁を寄せむ花としも吹きけるものか白蓮草　岐阜縣 山北淑子
○緋櫻はみだれて散りぬ美しく窓によりたる少女の髮に　備中 大西好子
○尼老いて訪ふ人もなく白萩の愁しめやかに秋の雨ふる　大和 豐田晴子
○一とせの幸なき日記爐に投げてかなしき去年をのろひぬわれは　上總 北田秀子
○いろはより覺え易きや手まり唄わがうたひける四つ五つかな　安房 鈴木勝子
○戀ふにあらず戀はぬにあらず何となく人に言はれぬ胸のおどろき　伊勢 佐々木らく子
○うちもちて扇の風やさそひけむあやなく袖に螢つつみし　千葉縣 吉田やす子
○朝かゞみ向ふもいつか忘れけり鳴鶯にこゝろうつせば　會津 藤琴女
○朝顔の紫の花つみながら自ら泣ぬきり深き朝　千葉縣 田村斂江
○そらだきの移香奇しき衣きて君と相見し日を思ふかな　日本橋 みなつくし
○きくまゝに己れも非ず人も非ずしばしたゞよふ神の花園　上總 政子
○わかるゝ日草も若葉も夏雨にぬれてそよぎし我が古里よ　金澤市 きよし
○君のりしふねは浪間に影消えて遠き海原白き鳥とぶ　會津 坂田銀鈴
○天の岩おしあけ方に尊き神のかざして舞ひぬ千代の神樂　福島縣 齋藤卯花
○亡き君がめてし扇の風ぬるし夏は吾身にうきおもひあり　岩代 松江子

○
鵑聲を高うあざける辭ありとわれうたがひて泣く夕かな
大阪　百田ふみ子

○
去年の夏君とかわせしひめ歌を思ひ出てつつわれ泣きしかな
上田町　田村あい子

○
罪みなき君お御言葉くりかへし日暮に迷ふ千代の松原
田中茂子

○
幾日見ざる君見しわれの如くにも草木いさみぬ夏の日の雨
伊賀　山村龍子

○
その薔薇は君をさゝやく心地して耳にあてけりゆく春の日よ
鳥取縣　桑本きさ子

○
亡き父の御墓邊近き砂山に何心なく花つむ妹
千葉縣　榮子

○
いさゝ川流るゝ音の涼しくて岸の青葉に風靜かなり
岩手縣　横澤きよ

○
五月雨や小田のかはづの聲遠しなき友慕ふともしびの下
和歌山縣　松本米子

○
笛の音に遠き都に住む君を思ひやらるゝ夏の夕ぐれ
高子

○
忘れ得ずあてなる丈の黒髪をさとみだしつつ膝によりしを
三重縣　細川美津子

○
夏なればあかがれ溶す沙漠野を人乗せ行かむ駱駝を思ふ
茨城縣　斎藤もと

○
神々し出雲の國に今もなほ巣篭る鵜のありときくかな
岩手縣　吉田とせ

○
つれ〴〵にわがとり出す人形の色もあせたり紅のふり袖
日本橋　吉田さく

○
相見てはたゞにはづかし逢はざればたゞにかなしきあえかなる人
三　河　宮野加那子

○
山奥のたにまの松に夏ごろも干すとかきたる友の玉づさ
鷲田一重

○
千鳥なく波のかなたに書していとど美くし沖の島山
大阪市　古川紫雲

○
浮草をわけて眺めん水底に女神の秘めし清き鏡よ
福井縣　吉田梅子

○
月の夜に垣根こしなる箜篌を弾く子の髪を見むとしおもふ
愛知縣　岡田信子

○
己がじゞ花ちり行きぬ天人の五衰に似たる春の暮がた
備中　葵森紫風子

○
荒鷲のわしるとやうに七村は夕立ふりぬ山本にして
遠江　鈴木みえ子

○
月細く穂頭の山にかたむきていと靜かなる千本の海
靜岡縣　青木綾子

○
にはか雨よき人ふたり花もちて門にたゝづむ楠若葉かな
伊豫　曉子

○
雷の落つると思ふ聲の消え行きしわが胸のさびしさ
三　河　富美子

○
其の人の昔を忍ぶよすがともなりてかなしき秋の雨かな
下野　茶煎女

○
少女子は垣根に立ちて朝顔の明日咲く花を樂と云ふ
紀伊　大川しをり

○
病得て三月過ごしぬ母亡くて淋し心のたへぬ少女は
篠原登里子

○
夕風の草まにとべる螢をば百のには火のゆらぎぬとみし
磯宮郡　入田文子

○
海のおも故郷遠く眺めやる秋風冷た欄干のうへ
北多摩　小黒春子

○
孔雀舞ふ君がみ園の高垣に凌霄花うつくしく咲く
松山市　草村登子

○
箜篌弾けとも胸はなごまずてあやにむつれぬ十三の絃
山口縣　吉田美代子

○
朝風に綺蚊帳ゆらぎぬ白蓮の開く音する湖ぞひの宿
近江　大角うた子

○ 沼澤　渡邊とよを

古への名殘りをとめし老松の小枝にかゝる冬の月かな

○ 函館　藤本ゆう

なつかしや文よむ窓によろ／＼とはひかゝりけり朝顔のつる

○ 岐阜　篠田とみ子

をみなそれ心やわけく岩が根をよきても生ふる草の芽を觀よ

○ 丹後　阪井峰子

白雲はかるう流れて夢のごと山にかくれぬあなものさびし

○ 金澤市　木原蓮舟

越の路山越え來れば旅人の菅笠を吹く青嵐かな

○ 相模　鍋田爽代子

初秋や越の藥のあきびとと默りてゆきぬ信濃山道

○ 水戸市　小桃子

衣擣つ音はさやかに聞えつゝ田中の庵はきりこめにけり

○ 印旛郡　ふさ子

春風の雲ふきはらふ中空に月ぞ出てけるしら梅の上

○ 下總　秋山梅子

月影に笛の遠音を聞居れは涼しき心身にあまりけり

○ 甲斐　矢崎ひろ衣子

燃え盛る胸の炎は黒髮の君をつゝみぬおほけなけれと

○ 西多摩　大久保楓子

峠茶屋酒酌み交はす客人のみ酒にちりし栗の花散

○ 筑前　田中とよ子

清宵の扉そと搖れ星ちりし其夜園生に白桔梗さく

○ 北海道　武田とし子

かしましき蟬の羽音も打たえて野べのすゝきに秋風ぞ見ゆ

○ 大阪市　木村花子

淀の船伏見通ひの帆柱に隱踪ほしたる五月晴れかな

○ 飛驒　むら子

給はりぬ君の許より珊瑚珠の根掛の玉の如きぐみの實

○ 近江　嬉貴子

春の日は比叡のみ山にいりはてぬよき金色の雲を殘して

○ 新潟縣　岡田いわ

夕ぐれに小田の畔道ふみ行ばむかへ顔なる山の端の月

○ 栃木縣　黒須菊子

朝日かげ露の若葉に照り映えて那須二十里緑りしたゝる

○ 三河　天野清子

たそがれに夕立ちやみて虹の橋過ぎも渡りぬ天少女たち

○ 土佐　姫野野萩

瑠璃の布しきつられたる庭もせに調べ床しく夜の雫もろる

○ 信濃　岸波子

かず／＼の波なる色紙や哥きかみならべしかとも夏の畑見ぬ

○ 長野縣　內山けさよ

鐘なりてひとしほ淋し五月雨の夕戀しき故鄕の母

○ 越後　はな子

夕さればつれにきくなる鐘の音もかなしかりけり山里の人

○ 德島縣　白菊子

菊の花花より先きにおとろふる身とも知らずてかざしつるかな

○ 滋賀縣　山本粲洋子

夕月の涼しき影を帆にうけて矢橋に歸る舟おもしろき

○ 中津町　やま川

雨寒き夕べの汀声のまのくちし小舟にさぎのおりきぬ

○ 越智郡　佐野春枝

われ自ら戀して やがてまた君にあかずしありぬたれをうらみむ

○ 羽前　大谷部てい子

故鄕は小田の畑邊に少女ども登呼び交ふ時となりぬる

○ 長野縣　瀬澤みずえ

わが魂や小草の露とまろび置きゆらめきゐるをわれと眺むる

○ 山形縣　よん子

五月雨の窓に倚りつゝいと遠くかへらずなりし人を思ひぬ

○ 越後　末廣女

むらさきのもや立つ中を秋風の吹きあけ見する女郎花かな

○　岡山市　池田芳子
しめやかに春雨すなり香たかばむかしのまゝの姉やきまさむ

○　薩摩　みゆき
今夏にかなしかりけり海女の子がうらぶれ姿うつしゑにみて

○　青森縣　柳沼あき子
我宿は青田に近く風清く妻は若うてくろ髪ながき

○　下總　越川つれ子
暮の鐘響くみ寺の新墓に香を手向くる人やそも誰れ

○　大阪府　淺田治子
蚊やり火の烟たなびきて破垣の垣根に白し夕顔の花

○　豐後　潮花子
五月雨の細きが中に我立てばけぶれる空に不如歸啼く

○　佐賀縣　熊本きの子
紫に霞む沖辺の夕凪に海士の船謠ひくう聞ゆる

○　豐後　立川つや子
いく萬里ゆきなば次の境見む憂きに倦みたる現世の道

○　靜岡縣　杉山じゆん
賤の男は心のとかに畑うちぬかゝろ里より春や立つらん

○　遠江　厚木きせ子
濱の松の間にかゝる満月は君に別れし夕べとも似ぬ

○　長野　臼井東子
雨はれし梢はるかになく蟬の羽よりおつる露の白玉

○　長野縣　瀧澤みずえ



旅路　青森縣　立花とも

小雨ふる軒に濡れたり磯の子が帆を繕る家の朝顔の花

○　茨城　若杉とり子
野の花の色ににし君たゞひとり蝶の行方にあこがれてある

○　千葉縣　西村いつむ子
亡き母をそゞろに思ひ朝な夕な御墓の山を透し見る哉

○　神田　森川蕗賀子
亡き母やしのべよとてか山里のわびしき庵に小雨そぼふる

○　神戸市　山本幽霞里
さびしさの秋の木立にひゞきてはわがつく鐘に我れもの思ふ

○　紀伊　田中早苗
夢にだに忘れぬ君の便りみて都の空の忍ばるゝかな

○　栃木縣　栃木彌生子
夕立の過ぎ行く竹の下かげにほたるとびかふ夏の夕ぐれ

○　備後　佐藤實子
風かよふ木の下影の夏川は涼しかりけり君とわれある

○　越後　近藤てつ子
かわづなき螢飛びかふ夏の夜にいとゞ涼しき水の音かな

○　群馬縣　泉花
吾が魂は夢の浮橋かけわたり戀の扉をそとたゝきぬる

○　大阪市　河盛よしの
雨よはれはれなば虹の橋越えて君住む方に渡りもゆかん

○　岐阜縣　加藤芳子
限りなうたかき高根の松が枝をかりてぞ咲ける紫の藤

○
巣鴨　荻野泉子
萩の葉の青葉がくれに聲高う雨蛙鳴くなり雨戀しさに
○
牛込　今井淑子
ふるさとや禰宜たち白き袖ふりて祓行ふ水無月の川
○
紀伊　木下操子
戀すてゝ吾れを捨てゝ世をすてゝ我は入りぬれ秋の山里
○
遠江　山下柿葉
雷の神が斧の刃のしたゝりか絶壁たかく瀧かかるかな
○
奈良市　清水良子
茂り合ふ木の間の月のあでやかに清水に宿る影の涼しさ
○
久留米　山崎もと子
さほ姫のみわざ巧みに織り給ふつゝじの模様色美くしき
○
宮古町　熊谷文子
若草のもゆる長閑けき春の日の遠方に見る富士の山かな
○
京都市　笹影かずみ
紫の実はなあまた咲く里の皐月をおもふ夕映の雲
○
四谷　みどり子
おとづるゝ人なき宿の軒近くつばめとひきぬ小雨ふる日を
○
羽前　紅葉子
うるはしき花の都の旅がたり兄をかこみてきくわれらかな
○
三重縣　杉田たか子
驛路を出て行く駄馬に夕日さし靜かに聞ゆ馬子の歌聲
○
熊本縣　小田綠葉女
乙女子の百合を携へ行く姿しばしとよびて畫になさましを
○
大阪　新家雁子
八雲琴夏の曲彈く盲の師何とはなしにいたみまつりし
○
新潟縣　川崎良枝子
わが心いたく動きぬ物の怪をびるごとき君を見しとき
○
下野　手塚如香
永き日をうつゝ心にまどろみて髮長き子をまた見つるかな
○
函館　菊葉

簾越し燈あかろく湯あがりの君がおん手のうちはさへ見ゆ
○
大阪市　本田千代子
朝晴や東の空あかうしてかつらぎ山は高うそびゆる
○
若狹　瀬木なみ
雲なくて風やゝ立つ夜白浪の銀馬走ると海の月見る
○
大阪　岩西正枝
降りそめて晴るゝひまなき五月雨にまたくり返す人の文かな
○
佐渡　相田かすみ
夏の夜もふけゆく影のすゞしさは狐狸なく山の秋こゝちする
○
大阪市　豐田しげ
誰が家にちご生るるや秋の月白萩しげる川添ひの村
○
三河　宮田梅子
折にふれて秋の花野に出て立てばにほへる露にもすそはぬれぬ
○
下總　小澤てふ
合歡の花たわわに咲きて一すじの水めぐる家に梭の音ぞする
○
常陸　飯塚廣子
夕立のあとの涼しきくれがたに旅僧一人西に行くかな
○
上總　金山ふく子
春川の岸の花かげ柳かげいづれのかげに舟はよすべき
○
若狹　早水その子
松かさのなり〳〵落つる磯路に追分の曲消えてくれにけり
○
名古屋　加藤蕊子
行く雲のはてしも知らぬわか運命明日はいづこに雨とふるべき
○
遠江　田口津多子
歌にわびて筆を抛つ夕なり一ひら散りぬ紅のさうびは
○
葉月女
浴衣きてたゝずむ磯の汐風に月はくだけて黑髮の散る
○
茨城縣　天谷雅子
ふか山も春の惠はうけにけんほのかににほふ蘭の一株
○
薩摩　山下巽子
繪扇を君とかざして夏雲の行くへを丘に今日もまた見る

○陸中　黒澤芙蓉星
有明の月はのこりて京の朝加茂川こえて鳴くほとゝぎす

○岐阜縣　日野歌子
最上川幾千萬の雷の鳴り渡ること水あふれゆく

○盛岡　四戸節子
御堂に因覚えし思をば燃えゆく紅き火にやたとえむ

○上総　笹浦子
うらみある詩のみ霊か　あか〳〵と夕べを咲きぬ紅の炎よ

○名古屋　鈴木文子
川したの夕日彩雲うすれ行きて霧雨しろし水神の森

○京都　才木みさを
岩角をしづかにめぐる柴舟のともにへさきに翠の花ちる

○陸前　ふみ子
杉立てる杜の木蔭を吹風は夏の御神の衣のそよぎ

○大阪　田宮薫
山姫の曝らせる布か織る絲か岩間に見ゆる白妙の瀧

○豊後　阿南しのぶ
庭の桐おつるさびしき音のして秋は来りぬ我お里の家

○兵庫縣　橋きみ子
夕立のはれ渡り行く雲間より涼しく出づる月のよろしき

○北海道　赤岡眞佐子
卯の花のましろに匂ふ夕まぐれおばしまによる羅の衣の人

○見附町　天津子
若き水流き花にほふ野をもとめくらやみの野をひた流れゆく

讀書　三河　近藤道江



○越後　天津子
長き夜の夢に取られて歸りこぬ魂の姿を朝の星見る

○溜城村　しぐれ
かきつばた五月の雨にゆあみして池の面てに姿見るかな

○徳島縣　西野花菱
めづらしき父の笑顔のうれしさに今日の一日を若く暮しぬ

○豊後　岸上かつ子
朝つゆにしばしとゞめし朝顔も思へはかなきあだし世の花

○伊豆　勝子美嬉子
幸なやと涙にくれてふくる夜を闇に仰げば星ほのに見ゆ

○紀伊　加藤薫子
奇しき力われ親る君が目にありと知りてし日よりをみなとなりぬ

○若狭　山田小濱
雲に居る悪魔は雨の絹をつがひ花をし射たり春を逐ふとて

○静岡縣　鹽澤きく子
朝かほのつぼみかぞうるをとゞひのかろき袂に夕かぜぞふく

○丹後　高栄小靜
蚊遣火に翠の袖焚く丹波路の山邊の宿の夕顔の花

○名古屋　吉田波子
去きし春君と花野にあくがれて取りし小草の色はあせれど

○本郷　花がすみ
わけもなふ君のさゝやき聞くがごとわれはあるなり春の夜のあめ

○古への名殘りをとめし老松の小枝にかゝる冬の月かな　沼津　渡邊とよを

○なつかしや文よむ窓によろ〳〵とはひかゝりけり朝顏のつる　函館　藤本ゆう

○をみなそれ心やわけく岩が根をよきても生ふる草の芽を觀よ　岐阜　篠田とみ子

○白雲はかろう流れて夢のごと山にかくれぬあなものさびし　丹後　阪井峰子

○越の路山越え來れば旅人の菅笠を吹く青嵐かな　金澤市　木原蓮舟

○初秋や越の嶺のあきびとと語りてゆきぬ信濃山道　相模　鍋田癸代子

○衣擣つ音はさやかに聞えつゝ田中の庵はきりこめにけり　水戸市　小桃子

○春風の哉ふきはらふ中空に月ぞ出でけるしら梅の上　印旛郡　ふさ子

○月影に笛の遠音を聞居れは涼しき心身にあまりけり　下總　秋山梅子

○燃え盛る胸の炎は黒髮の君をつつみぬおほけなけれと　甲斐　矢崎ひろ女子

○峠茶屋酒酌み交はす客人のみ酒にちりし栗の花散　西多摩　大久保楓子

○絹青の扉そと搖れ星ちりし其夜圓生に白桔梗さく　筑前　田中とよ子

○かしましき蟬の羽音も打たえて野べのすゝきに秋風ぞ見ゆ　北海道　武田とし子

○淀の船伏見通ひの帆柱に陽琛ほしたる五月晴れかな　大阪市　木村花子

○給はりぬ君の許より珊瑚珠の根掛の玉の如きぐみの實　飛驒　むら子

○

春の日は比叡のみ山にいりはてぬよき金色の雲を殘して　新潟縣　岡田いわ

○夕ぐれに小田の畔道ふみ行ばむかへ顏なる山の端の月　栃木縣　黑須菊子

○朝日かげ露の若葉に照り映えて那須二十里緑りしたゝる　三河　天野淸子

○たそがれに夕立ちやみて虹の橋過ぎも渡りぬ天少女たち　土佐　姬野野萩

○瑠璃の布しきつられたる庭もせに調べ床しく夜の琴もろる　信濃　犀波子

○かず〳〵の雅なる色紙や蔌きかみならべしかとも夏の畑見ぬ　長野縣　内山けさよ

○鐘なりてひとしほ淋し五月雨の夕戀しき故郷の母　越後　はな子

○夕さればつれにきくなる鐘の音もかなしかりけり山里の人　德島縣　白菊子

○菊の花花より先きにおとろふる身とも知らずてかざしつるかな　滋賀縣　山本棠洋子

○夕月の涼しき影を帆にうけて矢橋に歸る舟おもしろき　中津町　やま川

○雨寒き夕べの汀芦のまのくちし小舟にさぎのおりきぬ　越智郡　佐野春枝

○われ自ら戀してやがてまた君にあかずしありぬたれをうらみむ　羽前　大谷部てい子

○故郷は小田の畑邊に少女ども聲呼び交ふ時となりぬる　長野縣　瀧澤みずえ

○わが魂や小草の露とまろび置きゆらめきゐるをわれと眺むる　山形縣　よん子

○五月雨の窓に倚りつゝいと遠くかへらずなりし人を思ひぬ　越後　末廣女

○むらさきのもや立つ中を秋風の吹きあげ見する女郎花かな　近江　嬉貴子

○　岡山市　池田芳子

しめやかに春雨すなり香たかばむかしのまゝの姉やきまさむ

○　薩摩　みゆき

今夏にかなしかりけり海女の子がうらぶれ姿うつしゑにみて

○　青森縣　柳沼あさ子

我宿は青田に近く風清く裏は若うてくろ髪ながき

○　下総　越川つれ子

暮の鐘響くみ寺の新墓に香を手向くる人やそも誰れ

○　大阪府　淺田治子

蚊やり火の烟たなびきて破垣の垣根に白し夕顔の花

○　豊後　潮花子

五月雨の細きが中に我立てばけぶれる空に不如歸啼く

○　佐賀縣　熊本きの子

紫に霞む沖邊の夕凪に海士の船謡ひくう聞ゆる

○　豊後　立川つや子

いく萬里ゆきなば次の境見む憂きに倦みたる現世の道

○　静岡縣　杉山じゅん

賤の男は心のとかに畑うちぬかゝる里より春や立つらん

○　遠江　厚木きせ子

濱の松の間にかゝる満月は君に別れし夕べとも似ぬ

○　長野　臼井東子

雨はれし梢はるかになく蟬の羽よりおつる露の白玉

○　長野縣　瀧澤みずえ

旅路　青森縣　立花とも



小雨ふる軒に濡れたり磯の子が帆を繕ろ家の朝顔の花

○　茨城　若杉とり子

野の花の色ににし君たゞひとり蝶の行方にあこがれてある

○　千葉縣　西村いつむ子

亡き母をそゞろに思ひ朝な夕な御墓の山を透し見る哉

○　神田　森川露賀子

亡き母やしのべよとてか山里のわびしき庵に小雨そぼふる

○　神戸市　山本幽霞星

さびしさの秋の木立にひゞきてはわがつく鐘に我れもの思ふ

○　紀伊　田中早苗

夢にだに忘れぬ君の便りみて都の空の忍ばるゝかな

○　栃木縣　栃木彌生子

夕立の過ぎ行く竹の下かげにはたるとびかふ夏の夕ぐれ

○　備後　佐藤實子

風かよふ木の下影の夏川は涼しかりけり君とわれある

○　越後　近藤てつ子

かわづなき螢飛びかふ夏の夜にいとゞ涼しき水の音かな

○　群馬縣　泉　花

吾が魂は夢の浮橋かけわたり戀の扉をそとたゝきぬる

○　大阪市　河盛よしの

雨よはれはれなば虹の橋越えて君住む方に渡りもゆかん

○　岐阜縣　加藤芳子

限りなうたかき高根の松が枝をかりてぞ咲ける紫の藤

○萩の葉の青葉がくれに聲高う雨蛙鳴くなり雨戀しさに　巣鴨　荻野泉子

○ふるさとや禰宜たち白き袖ふりて祓行ふ水無月の川　牛込　今井淑子

○戀すてゝ譽れを捨てゝ世をすてゝ我は入りぬれ秋の山里　紀伊　木下操子

○竜の神が斧の刃のしたゝりか絶壁たかく瀧かかるかな　遠江　山下柿葉

○茂り合ふ木の間の月のあてやかに清水に宿る影の涼しさ　奈良市　清水良子

○さほ姫のみわざ巧みに織り給ふつゝじの模様色美くしき　久留米　山崎もと子

○若草のもゆる長閑けき春の日の遠方に見る富士の山かな　宮古町　熊谷文子

○紫の美はなあまた咲く里の皐月をおもふ夕映の空　京都市　笹影かずみ

○おとづるゝ人なき宿の軒近くつばめとひきぬ小雨ふる日を　四谷　みどり子

○うるはしき花の都の旅がたり兄をかこみてきくわれらかな　羽前　紅葉子

○夢路を出て行く駄馬に夕日さし靜かに聞ゆ馬子の歌聲　三重縣　杉田たか子

○乙女子の百合を摘へ行く姿しばしとよびて畫になさましを　熊本縣　小田絲葉女

○入雲琴夏の曲彈く盲の師何とはなしにいたみまつりし　大阪　新家雁子

○わが心いたく動きぬ物の怪になびるごとき君を見しとき　新潟縣　川崎良枝子

○永き日をうつゝ心にまどろみて髪長き子をまた見つるかな　下野　手塚如香

○簾越し燈あかるく湯あがりの君がおん手のうちはさへ見ゆ　函館　菊葉

○朝晴や東の空あかうしてかつらぎ山は高うそびゆる　大阪市　本田千代子

○雲なくて風やゝ立つ夜白浪の銀馬走ると海の月見る　若狹　瀧木なみ

○降りそめて晴るゝひまなき五月雨にまたくり返す人の文かな　大阪　岩西正枝

○夏の夜もふけゆく影のすゞしさは狐狸なく山の秋こゝちする　佐渡　相田かすみ

○誰が家にちご生るるや秋の月白萩しげる川添ひの村　大阪市　豐田しげ

○折にふれて秋の花野に出て立てばにほへる露にもすそはぬれぬ　三河　宮田梅子

○合歡の花たわわに咲きて一すじの水めぐる家に梭の音ぞする　下總　小澤てふ

○夕立のあとの涼しきくれがたに旅僧一人西に行くかな　常陸　飯塚廣子

○春川の岸の花かげ柳かげいづれのかげに舟はよすべき　上總　金山ふく子

○松かさのなり〳〵落つる磯路に追分の曲消えてくれにけり　若狹　早水その子

○行く雲のはてしも知らぬわか運命明日はいづこに雨とふるべき　名古屋　加藤蕙子

○歌にわびて筆を抛つ夕なり一ひら散りぬ紅のさうびは　遠江　田口津多子

○浴衣きてたゝすむ磯の汐風に月はくだけて黒髪の散る　葉月女

○ふか山も春の恵はうけにけんほのかににほふ蘭の一株　茨城縣　天谷雅子

○絵扇を君とかざして夏雲の行くへを丘に今日もまた見る　薩摩　山下夏子

女子文壇和歌

○　羽中　黒澤美登里

有明の月はのこりて京の朝加茂川こえて啼くほとゝぎす

○　岐阜縣　日野歌子

長良川幾千萬の雷の鳴り渡ること水あぶれゆく

○　盛岡　四戸郁子

初戀に目覺えし　戀なば燃えゆく紅き火にやたとえむ

○　上總　笹浦子

うらみある詩のみ靈か　あか〳〵と夕べを咲きぬ紅の炎よ

○　名古屋　鈴木文子

川したの夕日彩雲　うすれ行きて霧罩しろし水神の森

○　京都　才木みさを

岩角をしづかにめぐる　柴舟のともにへさきに栗の花ちる

○　陸前　ふみ子

杉立てる杜の木蔭を吹風は　夏の御神の衣のそよぎ

○　大阪　田宮薫

山姫の晒らせる　布か織る絲か岩間に見ゆる白妙の瀧

○　豐後　阿南しのぶ

庭の桐おつるさびしき音　のして秋は來りぬ我が里の家

○　兵庫縣　福　きみ子

夕立のはれ渡り行く　雲間より涼しく出づる月のよろしき

○　北海道　赤岡眞佐子

卯の花のましろに匂ふ夕まぐれおばしまによる羅の衣の人

○　見附町　天津子



讃　齊　三河　近藤道江

若き水遠き花にほふ野をもとめくらやみの野をひた流れゆく

○　越後　天津子

長き夜の夢に取られて歸りこぬ魂の姿を朝の屋見る

○　津城村　しぐれ

かきつばた五月の雨にゆあみして池の面てに姿見るかな

○　徳島縣　西野花葉

めづらしき父の笑顔のうれしさに今日の一日を若く暮しぬ

○　豐後　岸上かつ子

朝つゆにしばしとゞめし朝顔も凋へはかなきあだし世の花

○　伊豆　勝子美壽子

幸なやと涙にくれてふくる夜を闇に仰げば星ほのに見ゆ

○　紀伊　加藤直子

奇しき力われ觀る君が目にありと知りし日よりをみなとなりぬ

○　若狹　山田小濱

雲に居る惡魔は雨の箭をつがひ花をし射たり春を逐ふとて

○　靜岡縣　鹽澤きく子

朝かほのつぼみかぞうるをとゞひのかろき袂に夕かぜぞふく

○　丹後　高栗小靜

蚊遣火に栗の花咲く丹波路の山邊の宿の夕顔の花

○　名古屋　吉田波子

去きし春君と花野にあくがれて取りし小草の色はあせれど

○　本郷　花おすみ

わけもなふ君のさゝやき聞くがことわれはあるなり春の夜のあめ

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以內とす、用紙は半紙又は原稿紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

天

○緣談

本所區相生町一丁目九番地　江原田鶴子

私の緣談は、もう餘程進んだ、見合の日取まで極つた。何だかある力が自分を壓迫して來たやうで、怖ろしいやうな、不安の念がする。

男――、先の人、それはもう寫眞で見た。然しお母樣のゐる前で見たので、頭がかあつとして、目がくらむやうで動悸がうつて、よくは分らなかつた。たゞ和服を着て溫順しやかな、さう華美な所もなかつたやうに覺えてゐるだけである。男の人――、自分は今迄いくらも接したことはある。店の者を始め家へ來る某さん、某さん、皆男である、けれども自分は何とも思つたことは無かつた。私の夫たるべき人――、それは何も變つたことはない、矢張り男である。けれども、考へるとわく／＼して針の手を休めたり、縫物の寸法の思ひ違ひをしたり、そんなことばかりしてゐる。

往來を歩いても、男の人を見るたび、若い夫婦の方が、女が男の跡にうなだれ勝に跟いて行くのを見るたび、私の胸は動悸がうつて耳が鳴る。

過日、お嫁に行つてゐる姉さんが來た。姉さんはもう子供がある、私のことを冷やかすやうな風で、平氣に男の子に乳をやつてゐたが、私もあゝならなければならないのか、それにしても姉樣は、あんまり此頃平氣だ、お母樣なぞに平氣に『今日は夫に何と云つてやつた』とか話してゐらつしやるが、あんまり平氣だ、姉さんがお嫁に行く夕方、私の所へ來て、たゞ譯もなく私の手を取り、泣かれたことを知つてゐる、それが今は如何だらう、忘れたやうにあの平氣さ。

私の見合の日が、伯母さんが來て極つた夕方。私はお向ふの女中さんから、二階の先生がもうお向ふの二階にゐないことを聞かれた。

『まあ如何して？』と、私もあまり急なことに吃驚して聞くと、

『ホヽヽ』と笑つて、『何だか高等三年を教へてゐらッしやる先生と如何か……』と目て人の顔を見て、『それておとゝひの晩、急にお立ちになつたのよ』と、妙な笑ひ方をする。『如何つて……』

『ホヽヽヽ』と、女中は目て物を言ふやうな、何となし厭らしい笑ひ方をする。私それ以上、聞く勇氣はなかつた。眞逆！と思つた。あの温順しい教師が！と心の中に繰り返した。

先生とは綾瀬さんと仰つて、尋常三年の女生徒を教へてゐらつしやる、女教師てある。私とは、妹が三年て綾瀬先生に教へて貰つてゐるし、すぐお向ふに同居



してゐらつしやるので、一寸した事からたび〳〵先生のゐらつしやるお二階へ伺ふやうになつた。

あの割合に明るい、窓に面した方へ机を向けて、紫のふッくりした綿の肘突へ手をつき、何か讀むでゐるか、稀には、生徒の作文や、習字などを調べてゐる時もあつた。

廂髪の前を大きくとつた、今年二十三とかで、色の白い、一寸御氣色は美しい。先生には、兄さんがあつて、何とかの會社から倫敦の支店詰として行つてゐてもう二年經つと期が滿ち、日本へ歸つてくるのださうて、さうしたら教師を止め、兄さんと東京に家庭

を設けるのだ、とそればかりを言つてゐた。

先生はいつも、早く兩親を失つてまだ孤獨でゐるといふことや、こう年をとつて了つては仕樣がないとか、もう一度貴女のやうな時代になりたいとか、さういふことばかり言つてゐた。

私はこれ以外、何にも知らなかつた。たゞ女の身でこんな教師などをするものぢやない、といふことは、明白に言ッた。

「私なんか一生老嬢だわ」何かの話の拍子に言つた。そして顏にはさう絶望の色が浮ばず、何か思ひ出したやうに顏を少し紅くした。それは十日ばかり前に會つた時である。それから二日ばかり經つて行つた時、私が昇つて行つたのも氣がつかず、一生懸命に何か書いてゐた。私が「今日は、あら何か御用？」ッて言ふと吃驚して「アラいゝえ、まあ」と顏をあげて、書きかけた手紙を机の上に押しやつた。

「何か御用なら……」と私が言つたら、「いゝえさうぢやないの、遊んで頂戴」と云つたが、妙にそわ〳〵して顏を赧め、手紙を氣にしてゐた。

それから今日は一週間經つ。聞けば高等三年の方の男の教師とかも、もう學校へ出ないさうだ。

私はもうぢき、人の妻となる身だ。

先生はその後私へ何のお便りもない、勿論何方へ行つたか行つた先も分らない。

私も姉さんのやうに、赤子を抱えて、人の前で乳をやる身となるのだ。

（評）處女が人の妻となる前の心の動搖——若い女性の多い本誌の應募小說には毎回珍らしからぬ趣向だが、本篇は際立つて好く描かれてゐる。人の妻、人の母となり濟した姉を見て、妙に淺ましいやうな心持のするのも面白いし、それに不斷獨身を主張してゐた女教師が、突然男と姿を隱したと云ふエピソートも能く利いてゐる。文章も厭味が無い。

地　○里がへり

京都　濱部風窓女

京子は昨日久し振りで下の赤ん坊を連れて里家へ歸つて來た、別に是といふ用事を帶びて來たのでは無いが長らく實家へも歸らなかつたし、また平常餘り壯強い身躰では無いのが茲二ケ月前から少し氣分が勝れ無いので保養？がてらと云ふ名稱の下で有つた。

其の夜京子は頭痛がすると謂ふて早くから床に就いたので兄や母にも餘り話さなかつた、母のお勢は京子の病氣に心を痛め醫者をと謂つたけれど別に大した事も無い唯、旅行の疲勞だと云つて斷つて仕舞つた。

京子が翌朝目醒めた時母のお勢はモー起きて箪笥の抽斗を開けたり閉めたりして居つたので、
「お母さん何時ですの」と京子が床の上に起きて訊くと、
「お京氣分は什麽なの、まだ早いからモッと寢て居た方がいゝよ」とお勢は口早に謂ふ。
「ハー難有う、お母さん何處かお出掛？」
「いゝえ、繁（京子の兄）が今朝社用て岡山迄行くのてね」
「アラ左樣てすか」と起きて着物を着換へやうと立つとお勢は障子を啓けて心配そうな顔をして、
「お京お前かまはずに寢てお出てよ」と留めるので、
「ぢや失禮てすけれどお見送りだけしますわ」とネルの寢衣の上へ衣桁に掛けて有つた縞御召の羽織を引掛けて部屋を出ると繁が丁度出て來た、京子は跪いて
「お早う御座います」と會釋をする、繁は細かい縞の洋服を着てパナマの中折を右手に持つて居る。
「京ちやん大層早いネナーニ寢て居ればいゝに、氣分は什麽だネ」と何時に變らず優しく尋ねる。
「ハーもう宜しいの……」

折柄、女中が俥の來たことを告げに來たので繁は出て行く。
「ぢやお母さん行つて參ります」と會釋して、
「京ちやん大事にし給へ、多分僕は明日の夜歸れるだらうと思つてる、また久し振りに話すサー」
玄關へ出ると綺麗な俥が待て居る、繁は靴を穿き乍ら
「早くから御苦勞だね」と車夫に謂ふと車夫は丁寧にお叩頭をする、繁がヒラリと乘ると俥は勢よく門を出た、お勢は火鉢に煮物がして有るのを思ひ付いたので急いて這入る、お京は這入うともせずまだ玄關に立つて、茫然と濟々して塵一つ許さぬ朝の光景に見惚れて居ると夏の朝風が颯つと吹いて來て洗ひ髮の鬢の後れ毛を動かして行く、玄關の右手の笹が風の吹く毎にサワサワと葉摺の音をさせてゐる、綺麗に並んだ敷石には打水がされて何處とは無しに土の香がして來る、京子は偶然、幼少い頃兄と兩人てよく此の敷石を飛んで遊んだ事を思ひ出しておもはず微笑んだ。
お京、風邪引くといけ無いよ、未だ朝は寒いからと茶の間からお勢の聲がする、お京は氣が付いた樣に這入つて茶の間へ行く。
「お母さん長らく見無い間に玄關の笹が成長く成りま

したのね」

「あゝ大きく成つたよ」お勢は謂ひ乍らシン〳〵と沸いて居る湯を急須にさして茶棚から楓の模樣の畫かれた湯呑を取つて茶を入れた。

「熱いよ」とお京に注意する、モー子が二人も有る身でも親は何時迄も小供の樣に思つて居るのが可愛いお勢は以前から大切に保存つて居る六兵衛燒の海老の模樣の有る湯呑に茶をいれ乍ら、

「赤ん坊はまだよく眠つてるのだらうね」と鳥渡次の間を覗いて見る。

「ハー信實に能く寢る子ですよ、朝早くから起きられると煩さくつてね……」と京子は前髮の櫛を取つて髱の後れ髮を搔き上ると、

「格好能く結つて有るよ、矢張、髮は東京だネ」とお勢は見惚れた顏付をして居る、京子は鳥渡髱を抑へて見て、

「さうですね、つい毎日結ふのが煩さいものですから」

「私などは矢張り日本髮の方が好きだよ」

「さうですかネ……」と何か考へてゞも居たのか京子は氣の無い返事をする。

「お母さん兄さんは相變らずですの」と京子が不意に恁麽事を聞くのでお勢は鳥渡躊躇した。

「あゝ、私も彼の事には困つて仕舞ふよ」と小さい吐息をホッとする。

「信實に兄さんは理屈の能く解つた人なんですがネ」と一寸言葉を切つて、

「それにお母さんにだつて私にだつて誰にでも親切で優しくなさるのに、そりや獨身も。兄さんの御考へでは立派な議論も有りませうけれど第一人の道に間違つて居ますし、また年老つたお母さんの心にも成らなければ成りませんわ……婚家の主人も謂つてるんてすよ、丁度東京に適當な人が有るので……私今度兄さんに謂つて見る氣なのてすの」

「そりや謂つてお呉れだといゝがネ……」と跡の言葉を云ひ出さぬ主に京子は、

「お母さん私だつて何時も子供ぢや無いのですものネホヽヽヽ」

「ホヽヽヽヽ」

「ホヽヽヽヽさうだともモー二人のお母さんなんだもの」

とお勢も輕く笑ふ、柱時計がチン〳〵と七時を打つと間も無く赤ん坊が泣き出した、京子が急いで次の間へ

と出て行く後姿をお勢は凝乎見送つて居る。

（評）兄の何時までも獨身でゐるのを、妹が心配すると云ふ筋で、何の奇も無い。けれど、人妻となつて子まで持つた若い女性の面影が活々と出てゐる。而して久振に生家へ歸つて、母や兄の前には自然と昔の娘になり妹に返る其心持が、何所と無く篇中に浮出てゝ見られる。筆も細かく能く行渡つて、何と無く人を引付ける作だ。

人 ○嫁

伯耆　竹本　春江

おふみは、毎晩敏子の小便をさゝげに出て、そして、門のあたりをぶら〳〵あてもなく歩いて見る。向の家の二階の隅の障子を、灯火がかすかにボーッと明るくしてるのを、さまつた樣に見る。それは、夏代さんが本を讀んで居るのだ。時にはあの新體詩とか何とやらを、かざり氣のない大きな聲で歌ひながら、障子を開けて、おゝ良い夜などゝ仰つてるのをも見る。時には、子供の樣に柱に凭つて、笛を鳴らしてなさるのをも聞く。その音につひほろりとなる。年を云へば今年が十七て、自分よりは僅つた一つしか若くはないものを、まだ邪のない、そして苦勞のなささうなあの樣な、おふみは羨やましいやうな、妬ましい樣な氣になつて、折々いら〳〵と焦れて來る。自分が此家へ嫁入つたのは一昨年て、十六の春てあつた。其の當分御母樣がいつても、夏代さんを見て「あの子もほんとに困つたものだよお前、どうせ寡婦ても暮らさせまいにネう、あんなお轉婆だら誰れが貰ふものて、今時のちつと字の讀める娘は仕末に了やせぬよ」と云つては、自分の素直な女らしいのを喜んで下さつた。其度に、おふみは何とはしらずほてらしい樣な氣がして、夏代さんを見ると氣の毒でならなかつた。けれど矢はり、今ては其人が羨ましい。自分が嫁に來た



ほいづき屋　名古屋　きよし

年もかはらぬあの姿を見るたびに、自分は何故、あんなに急いで嫁入つたらう。と涙がこぼれる。夫は來年が適齡で、嫁に來た年が中學の二年で退てしまはれた。天にも晴れにも此家の一粒種、殊に兩親が年寄つての子ではあるし、別段其人を當てにせなくても、家計の饒かな處から、ほんの遊び半分、それでも將來はまア村長樣位にする積りで、村役場へ雇として毎日通はせてある。それが當人は大變な御自慢で、平常もお酒の、上の醉狂口には、おふみを前に座らせて、自分は、此近邊ての名望家とか何とか、無學な耳にたこが出るほど。まア、一寸意氣なハイカラー樣だ。

おふみは、何でも家が四五軒ばかりで成り立つたと云ふ、淋しい村に育つた身で、學問も何もない。只、自然が磨いた美しい容貌と、素直な女らしい性質が、其身を飾る唯一の光であるのだ。

その若い淺い心に、友より先きに嫁に行く。と云ふのが無上に嬉しくて、それに、夫は學生あがりの書生樣と山家に育つた人めづらしさは、自分の夫が如何にも立派な、偉い人の樣に思はれて、末頼母しい樣な‥‥うら若い胸はしきりに躍つたのである。

あゝあの新婚の當分、どんなに樂しい夢を見て居たことか‥‥。

人の一生に、新婚の當分ほどたのしみな、威勢なことはないであらう。またその夢の覺めた時‥‥それほど寂しいこともなからう。

おふみは、もう其の夢はさめて、これからは地味な生活に年を寄らせねばならぬ身である。

父も母も、非常にやさしくして下さつて、之までついぞ田へも畑へも出して下さらぬまで、大切にして下さるし、夫とても、酒にさへ醉つて居らねば、自分がまだ若いのに、子の母となつたその苦勞を察して、非常に優しくして與れる。それにはさら／＼不足はないけれど、自分は何故あんなに早く嫁入つたらう。としみじみ感ずる。

來るとすぐ、其の翌年は敏子を生み落して、今また、人なみ／＼の身ではない。

金にも着物にも不足のない身を、貰ひ乳の不自由さ‥‥近頃敏子が弱つてしまつた。可愛そうに、と月あかりに、抱いた子をすかして見たが、蒼白い顏の活氣がうせて、思ひなしか寢息もかすかに、すや／＼として眼を閉じて居る。おふみはしかと抱きしめて、ハラ／＼と落涙した。「敏や許しておくれ‥‥。」

矢はり一人身のお方は幸せだ。女は何故人の妻にならねばならぬだらう、この子が大きくなつても、私はいつまでも人にやりたくない。とおふみはしみ〲泣いた。

(評)筆も迪々しく缺點の多い作だが、如何にも然うして田舎に有りさうな人物境遇で、素朴な筆の中に強く人を動かす力がある。不思議にカラーの能く出た作だ。

秀逸

○渡り者

本郷　筆子

茅蜩が鳴いて、一つ星が榎の梢に高い夕。

母様が、朝顔の蕾を數へて被入る傍に蹲踞んで、小聲て唱歌を歌ふて居ると、心安立ちに木戸口から、

「お孃様お暑う御座いますこと」と年より若い聲で、佐藤のをばさんが、私にお世辭を振りまきながら這入つて、突然、「御新造さん、本當にもう厭になつ了ひますよ、貴女ね昨日桂庵の婆さんが御隱居一人で靜かな家だつて云ふんでせう、處が大違ひ！一文だつて金には成らずあゝ〲馬鹿見ちまひましたよ」と一人合點て云ひ終つて唾を呑む、又かと母様は苦笑しながら、

「奈何も困るのね、何處へ行つても惡るい處ばかりて：……けれども奉口と云へば苦らいものなのだからまあまあ、花田の歸る迄、動かない方が可いてせう」

「だつて貴女！彼樣な水一杯出し惜しみをする奴の處へ、私しや……」とさも不平らしく口を尖らした。

私は小供の事で深い事は知らないが、何でも、母樣の親類の花田さんが未だ片町に下宿して居た頃、一廻りも年重さな佐藤のをばさんと、奈何かして夫婦約束を爲て了つた後、其振り捨て策に困じて、體よく北海道の社の支店に轉任つて了つたのを、猶はかない夢を追ふて、下女奉口迄して其歸京を待つて居る、をばさんの身は實に氣の毒だと思ふ。然し生來が口數の多い人だから、奉口しても三日と落付いた事が無い。彼處は娘が意知惡るいだの、此處は旦那が人を見下げたのと其實、先樣から御拂ひ箱とされたのを――其樣な風だから。母樣も常々心配なすつて「花田も善くないがおつなさん(をばさん)もあれぢや、行末を奈何する心算だらう」と仰有る、それで深切に、花田はお前の思ふ程熱情のある人ぢや無いから、など云ふと眞紅になつて、花田の爲に辨明する。

其深い情を忍べば、そゞろ哀れに、「本當に花田は罪な人だ」と母樣はほろりとなさる。私は只をばさんが好

きだつた、氣の若い人で時々娘の樣な事を云つて、譯もなく私と一緒に、大きな口をあけてハツハと笑ふのだ、數日影が見えないと私は何時も「佐藤のをばさんはどうしたらう」と母樣に伺ふのであつた。

「花田から便でもあるかね」と母樣は團扇で藪蚊を拂つて、お聞きになる。

「いゝえ」と珍らしくをばさんは、吐息をした。

母樣は少し膝を進めて「餘けいな樣だが、善い加減に身の振方をお付けなさいよ、そりあ花田は忘れはしますまいけれど——何時までそうやつて、ぶら〳〵して居て、萬一病氣でもしたら、仕方がありませんわ」

「有難う御座います……此度はねえ御新造さん、病院へ出なさる方の留守番ですつて、えゝ是から直に、目見えに行くんです」とけろりとして「此度からは御土産ぐらい持つて來られますよ、ほゝゝゝ」

「ぢやあ、まあ辛棒するさ」

仕方がないと云ふ風で母樣は、私の遲れ毛を、鬢櫛で掻き上げて下さる。

こんな話には局外者の私も、多少見聞きするだけ、善惡を思ふて、全くおばさんは一生を奈何して終るてあらう！

「彼の人は渡り者さ、奈何せ碌な往生はするまい」と臺所で過日、何かのついでに松が云つた言葉を、考へ出して、熟々とをばさんを見ると、大分水に漬かつた單衣に、やまの這入つた帶を占めて、呑氣の樣だが、それでも、少し痩せた樣だ。

渡り者！渡り者といへ、明日が日にも定め難い露の命を、此樣他愛なく世を渡つて、をばさんは、善く一日でも滿足して行かれる——然しながら不幸な人だ。私は知らず〳〵、同情の涙を流さずには、居られなかつた。

(評)是も辿々しい未熟な筆だが、をばさんなる人の性格が能く出てゐる斯うした人の辿り行く運命を泌々と思はせる、渡り者と云ふ哀れな感も讀む者の胸に響く。

○女尊

「上」

武藏　角田秀子

主人が死でからも家は別段衰へも仕ない。勿論働の有る人では無かつたので其れが死だから何と云ふ差支へは無いので有つた。却て折々起る、いさこざが無くつて增な位に心の内では思ふてる者も在らう。て、死んだ折ても誰れ一人眞に悲みの涙を注いだ者は無かつた位だ。子供は三人ある、上の二人が女で十才に成るのが幸次と云ふ男の子で在る、一家四人を母親の手一つで

暮てゐる。元より財產と云ふては何も無い、遺つた物は、と云へば何十年前に建てられたか現に住んで居る、家屋が殘つたと云へば言はれる、が其れさへ手入れも出來ぬ故年月のふる儘に土藏は破れて役には立たず、住家さへ嵐の每に屋根瓦は落され庇はくちて梅雨の頃には能くゲヂや百足抔が這出す、家人は、每年二百十日抔云ふ荒日は家の爲めに案じるので在る。其格子戶が今度酩酒荒物類と太く書いた腰高障子に變つてから夕暮れ時などには里歸へりの馬子がゲーブと云ひながら面を染めて出て來る事も能く在る、主婦は以前より若返へつた樣―三十五六にしきや見えない小肥りて色が白くて世辭が好くて此樣商には適して居て全く其本性が滿足したのだ。一度這入つた客は大概後を引いて、度重さなる樣にとする主婦の手腕は中々なものである其れには家に居る、妹娘をも使ふのである薄々香はせる其色に迷ふて入り込むのも少なくはない中にも近所の小學校の先生て未だ若い男が在る、柄て無い所這入りに一時は近所の評判にも成つたが今では美事今の生活の寧ろ主人が在世の時よりは餘裕が有る皆倦いたと云ふ樣に何とも云はなくなつたが通ふのは元通りである。

宇治の茶摘女　大坂　今西きこゆ



「下」

「幸ちやん／＼幸ちやんや――」と一頻り呼んだが返事が無いので主婦は外に出て、又呼んだ、けれど矢張返事が無い。夕陽を避けて額に白い手をかざしながら邊を見たが其れらしい姿が見へないので一寸舌打ち仕て「何處へ行つたんだね：……」口小言云ひ／＼內へ這入つて了つた暫くして六

丁目の方から在の穢ない子供と連れ立つて來た幸次は、其群を拔けた。
「あら幸ちやん歸へるの」と連れの一人が云ふ。
「あゝ家で呼んだつて云ふから明日又遊ばうや」
「然うぢやあ又姉樣持つていらつしやいね、」
「あゝ」と幸次は家へ還入り口で答へた。
還入るや否や主婦の罵り聲がもれて打つ樣な氣勢ひてある御免なさい〳〵と云ふ聲を聞いて隣の家では又話し會つた、「幸ちやんも女に生れたら彼那目に逢はずに大切にされて彼の主婦の食物に成るのだけれど幸か不幸なんだかね眞逆何時迄も先の、女の風もさせては置かれまいし可愛想に彼の好い顏が男にはたゝりだわねと而して姉娘の噂さに移つた。何でも横濱邊の西洋人の何とやら忌はしい者に成つて居て親元に月々の仕送りも少なからぬとか」
五町目に湯が立たないとて三丁目まで行つたのか向ふから、ぬれ手拭に石鹼箱くるんで湯氣に上つた血色の宜い顏して歸へつて來るのは酩酒屋の　妹娘である、家へ入ると最早例の先生が遊びに來て居た、而して幸次を合手に古寫眞杯見て居たが娘を見て、
「お花姉さんよりは、幸ちやんの方が餘程宜い女だねえ幸ちやん」と云ふと、幸次は、
「あたいね先には頭結てたの其の時分此れは寫したのよ」物言ひの未だあどけ無い紅の口唇をうごかして笑つて居る目の愛らしさ、誰れも之を見ては女の子だつたかと思ふてあらう。まして此境遇、此母！。

（評）小さな町にても有りさうな、面白い話だ恐らく事實を取つて其まま書かれたものであらう。幸ちやんと云ふ子の不思議な運命も同情するに足る。只此作者の原稿の字の讀み惜いには閉口した。

○春ゆく宵

麹町　横關春子

唯さへ淋しい五月雨の宵、殊に藥香高き部屋の中は一層の寂寥を增し、雨の音ごと風の音毎に、慄然と身を引締られて、暗黑の渦中に投げ込まれる樣な氣がする。今飲つた藥の効能か、輝ちやんは細い寢息を立てて現の夢を辿つて居る。其瘠せ憔悴た蒼白い顏、電燈の光を正面に受けて、異樣の凄味を帶びた其面影、嗚呼之が去年の今頃、澁紙色の背を沙上に洒し、兄樣と角力取つて負けた悔しまぎれに、何時も妾に突掛つて困らした、あの元氣よい輝ちやんかと、思ふと、全て空事の樣、當時の事共分明と眼に映じ、其れや此れやて唯胸が塞がつて淚に搔きくれてしまつた。
嗚呼、最う到底助からないのかしら、お醫者さんは

大丈夫だと被仰つて下さるもの丶、それも單に妾共を一時安心させる爲めの方辨ではないかしら、あの樣に衰弱た身體が、何うして何うして再び此世の人となる事が出來よう。嗚呼這麼時に阿母樣でも居て下すつたら……エッ最う思ふまい〳〵到底返らぬ追憶だものと自ら勢つけて力むものが、扨又輝ちやんの無邪氣ない淋しい寢顏を見ては、何うして〳〵泣かずに居られやう、熱い熱い血の涙が止度もなく滴るのであつた。

外は未だ淋しい沈み切つた音を立て丶、颯々と木の葉打つ五月雨。時計は刻一刻寂寞の天地に悲調を刻んで居る。

可哀そうだ、眞實に可哀そうだ！

「お母樣……お……お母樣――」

輝ちやんは細い〳〵震聲て魘されて、慄然とする樣な氣味の惡るい、淋しい笑を浮めた、ハッと我に返つて轟く胸を押へ、徐と蒼白い面を覗き込んだが、後は又スヤ〳〵と眠つて居る。



夏の朝　武藏　込谷敬子

嗚呼若しや……お母樣がお迎へに被居つた夢でも見たのぢやないかしら……と殆んど失望の溜息をついて泣崩れてしまつた。

お隣りの邸から洩れた、優しい琴の音も、はたとやんで、夜は最う靜寂と更けて行く。

『姉さん』と、寢返り打つた輝ちやんは、ぱつちりと眼を開き「氷下さい」と云ふも喉の中。

「目がさめて、……」と氷を出してやりながら、

「最うお腹痛かないの」

「え、最う……」と喉て答へて氷を口の中で、轉がして居たが、又寢れた眼をクルリとさせて、

「姉様、僕は今ね」と、息をはづませながら、
「一杯花の咲いた廣い野原へ行つたの、そしたらね羽の生へた小供と阿母様が手招きしてましたよ」
「あら、嫌な……夢……夢でせう」
「え、夢……」と、失望と云つた様な顔で、ニッと白歯を出して凄い笑顔を作つた。
吁、若しや——若しや、其れが正夢となりはしまいか、未だ十一歳の蕾の花を何故に天は其様に情なくなさるだらうと思ふと、又も堰き來る悲哀の涙、見せじと横を振向く程もあらせず、數滴の涙は潸々と、
「姉様、何うしたの……え、姉様」と額に皺を寄せながら、氣遣はし相に聲を振り絞つた。
「何うもしないことよ」と態と平氣を装へば
「だつて僕の顔へ涙が……そうら、隠したつて駄目」と、か細い手で額を密と撫てながら「姉様、又僕の事種々心配してるんでせう。」と、ハヤ潤み聲になつた。
「心配つて……何？」
「僕が癒らないかしれないつて——」
「あら、其麼心配なんかしやしないわ、だつてお醫者さんが屹度快くなるつて午前もあの位被仰つたぢやないの、輝ちやんも聞てたでせう。」
「え、だけどもね」と腑に落ち兼た様子で「僕は、快くなりたいんだけどもね……」と投出した様に云ふて、細い溜息を突いた。
「屹度快くなることよ、今年も亦國府津に行きませう去年は面白かつたはね眞黒くなつてさ、——よく兄様に水かぶせられて泣いたの誰？ホヽヽヽ」
「だつて……だつて兄様が餘り虐いんだもの……」と面白き當時を思ひ浮べたか、微笑んで居る。
「早く快くして、屹度又行きませうね」
「え、行きます、屹度快くして行きますよ」とか弱い聲ながらも、元氣よく云ひ放つた。
「姉様、勉強して下さい、僕はもう眠るから」
「え、でも試驗も最う明日きりになつてよ」
「左う……」と云ひながら、安心したやうに目を潰つた。
油が竭きたか、洋燈がジー〳〵鳴て居る、其れが恰ら悲哀の曲を奏する様に、異様に胸に響き渡り、思はず涙を拂つたのである。
時々洩るゝ幽かな寢息は、一吐息毎に細りゆくやう。

（評）能く描けてゐる、弟の病床に看護する優しい姉の心持が思遣られる。會話も活きてゐるし文章も巧みだ。どうか此手腕て以て、今度は今少し意味ある物を書いて貰ひたい。

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切每月十五日、懸賞品は乙種規定に據る。

天

○日記の一節

伊賀國上野町
布袋屋染工場方　荒木千代子

七月十日。五月晴れの日和、ボーッと草いきれのする山路を通つて、安養寺の叔父さんを訪ねた。苔の靑々とした石堦を上つて門をは入ると、可愛らしい小僧さんが、地藏樣の前で草を引いてゐる、その橫手に白うお米を撒いた樣に南天の花が一面に散つて、何となくなつかしい。「叔父さんは？」と聞くと「今裏の山にお出でましたが」と答へる、で本堂の右手を曲つて、薊の花の澤山咲いたダラ〳〵阪を少し上ると一面の廣い墓地で、叔父さんがセッセと草をむしつて居られる「やあ……お千代かよう來たな、もう直きは入るによつて庫裡へ上つてお休み、時にみんな變りは無いかな」と云つて人の好さそうな顏をニッコリせられる、「えゝ皆まめでやかましく云つてますわ！」と云つて、そこらを見渡すと、廣い〳〵綠色の田の中で、田の草取りをしてゐる人が小さく見えて、姐さん被りにした白い手拭に日が照り榮えて、恰で美しい水彩畫を見る樣。こんな靜かな處に氣樂に暮して居る叔父さんの境遇が泌々と羨ましく思つた。しばらくすると叔父さんは、土だらけの手を腰にブラ下げた手拭で拭き〳〵阪を下りる、私も其後からついて下りた。

庫裡の障子を開けては入ると、美しく掃除が行き屆いて、柱も椽もピカ〳〵美しく光つてゐる、ヒヤリと、涼しい冷たい風が奧の方から吹いて來る。小僧さんは、美しい頭をキラ〳〵させながら、まだ同じ處で草を引いてゐる。背後の山ではもう早い蟬が鳴き出した。

（評）凡手にあらず。

地

○病床日記

神田區和泉町
一ノ一四號　田中喜代子

七月六日。今日は大分宜いやうだけれど、未だ立つとふらふらする。午前は新聞を讀む、常には氣にも留めない、黑枠の廣告が目につく。一々叮嚀に見る。波子と云ふ女の名があつた。不如歸を思ひ出して、その傑を追うて見る。矢張りあんな方で、矢張りあんな御病

氣ぢやあ無かつたか知らん、と涙ぐまれる。

今夜は、姉樣あちらへおやすみなさる。此の離座敷へ、私一人、何だかさびしくて、ね返りばかり打つ。幻影と云ふものか、何かの影が、身のほとりをおそふやうに、思はれる。

七月七日。明方目ざめる。もう電氣は消えて、戸のすき間からもるゝ光に夜の明けたのはわかるけれど。未だ部屋の内はうすくらい。又しても、臨終と云ふやうな事を考へて泣いて居ると。姉樣が入して下さる。何時お目ざめになつたのか、御髮さへ濟ふ取り上げてある。又けふも暑いか知ら。とおつしやり乍ら、團扇であふいて下さる。そこに、眞身の影はつき添うて、温かい親しみの情が、胸に泌み入るやうであつた。十時頃、波多野樣が入して下さる。美しい風采に、金茶色の單帶、きりゝとしたお姿。なてやかな中に、犯されぬ威が見える。あゝ姿もすこやかならと、何とはなく、思ひなされて、やつれた手を見つめて居た。おひるは、姉樣が御自慢なさる洋食の風味て、波多野さまと御一緒に頂く。此の四五日に無く、食が進む。二時頃、御歸へりになる。

今日は七夕だ、病さへなければ、去年の樣に、二人で歌書いて上げるのにねえ、と云ふ。せめてその心でもと、姉樣のさえた二絃琴に合せて、私は竹を‥‥覺束なくも、七夕の一曲！曲終つて、思はずよろ〳〵と立つと、月さえた空に、流星長尾を引いて落ちてゆく。風鈴が鳴つた、虫賣が通る。今都は漫歩の時代である。

（評）病に關する一種不安の情、稍しのばれたり。

【入】

○病床の感（日記の一節）

栃木縣下都賀郡豢村　草方華子

戸の外に人の數多いと心地よげに笑ひ興ずる聲を聞きては、病彌々增すかと覺えぬ。

母上の在して、背の邊り撫てさせ給ふ時は、身の痛みなきかとばかり快かりき。

親しき友の二たり三たり、くさ〳〵の物持ちて訪はれし時は嬉しかりしも、自がじゝ笑ひさゞめきて、我を餘所なる樣には泣きたかりき。

日頃近しくもせざりし友の只一人來て、何くれとなう語られし折りは、此人の爲めならばと、身も惜しからず思ひぬ。

北子君の菓子折には、心嬉しとも動かざりしが、眞心こもれる、靜子君が白百合の花一輪送られし時は、世に嬉しく覺えたりき。

（評）斷片なれどいづれもさもこそとうなづかれたり。

【秀逸】

○梅雨日記

四谷　網野田都子

六月廿九日、降りみ降らずみとはよく云つたもの。每

日此様お天氣なので氣がくさ〳〵してしまふ。始終此様お天氣の國が有ると云ふから嘸ぞ其の國の人は皆陰氣な性て始終煮え切らない事ばかり云うて、人が何か云つてもろくに返事も仕ない様な人に違ひない。よく一寸した事て死にたくなつたとか厄になりたいとか云ふ人があるのはやつぱり平常から其様心の人はかりに違ひないと思ふ。其ても中には隨分活潑てあつた人が自殺したり首くゝりをやつたりすると云ふから、はつきりは分らないけれど。其様事は私がいくら研究しても別に答も出ないし面白いこともないから打捨てゝ置く。夕方歇むだので庭を散歩する。朝顔の葉にも豆の葉にも至る處になめくぢやかたつむりが呑氣そうな風て歩いて居る。夜鯉がはねたので明日も雨かとおもつて空を見ると星がきら〳〵光つて居るから一先づ安心する。



日盛り　大阪　小百合子

三十日、昨日とは裏と表位の違がある。雨なんか降らした事はありませんと云ふた様な顔をして太陽が輝き出す。雨が續いたので庭が散らかつて居るから御飯の後て掃除を爲る。一寸くたびれたので池の傍に立つて居ると少さな蛙が足に飛びつく。驚いて足を引く拍子に池に片足落す。蛙が憎らしいので踏てたゝいてやつた。お晝過ぎに久しぶりて小枝子さんが見えた。晩方から又雨が落て來たので小枝子さんと約束した緣日はお止め。

（評）記事汽車の旅の心地す。

○梅雨日記

芝　安藤いそ子

七月五日、今日は梅雨の中にも珍らしきお天氣にて心地すがすがし。兼てお約束の通り、すみ様と銀座へ行く。お母様は中古の縮緬のお召を着せ給ふ。いとはしたなけれど、我が胸さゝめき、心臓は早鐘を打ち、眼は異様に輝む。されど最早詮なき事、まゝよ腐つても鯛と云へば、腐つても縮

[illegible]なるべしと負惜しみし乍らチカを連れてそこそこに出づ。すみ樣と先へ、チカとツチは後から、久し振りのお天氣のせいか日比谷公園の人出は盛んな物、最寄りのベンチに腰掛けて皆無意しきに風に吹かれて居る樣、中には樂しき空想にふけつて居る人もあらう、中には活社會の煩雜な事物にあきて、心の底に鉛の樣な重い物をとかした人は無いてあらうかと、自分は今迄嘗て無き事をふと考へた、電車はいろ〳〵の方へ馳る、自分のすぐ傍を自働車がかける。あゝ自分は今にどうなる事と、心配と云ふ或る物がむかむかと起つて來た。午後から本鄕と小石川の從姉が來る。お二人とも夢二式いとおかし。山茶花とシユロの植込多き八疊にて、お線香まわしをして遊ぶ。興につれておひ〳〵空が曇つて來る樣、時に山茶花の細かき葉がさら〳〵と風も無きにゆらめく。弟の武樣「今に雨が降つて來るよ」とつぶやく。植込多きお室の益々暗くなつてシユロの二三度バサバサと音すると、いよ〳〵雨が降つて來た。細き五月雨がしよぼ〳〵と山茶花にかゝると、お座敷のお線香は紫の煙を立てゝくゆらぐ。從姉はほゝ笑む、武樣は笑つて居る、自分はあゝ風情と思つた。夜は皆の好きな讀書をしてあそぶ。從姉は樗牛全集、自分は思出の記、武樣は言行錄、折々隣家にて笑聲が聞こゆる、其の間はカラ〳〵と母樣のミシンを掛け給ふ音のみ。從姉や武樣はポリポリデセールを食べてはチウチウお茶をすゝつて居る。更けて行くに從ひ電氣はますますさえ、雨はいよ〳〵ひどくなつたらしい。

（評）行末の恋を祈る。

○看病日記

岩代　泉　花　枝

八月三十日。兄樣の苦げに爲給ふ咳の音に疲れし儘の假寢の夢破れて眼覺むれば、夜は疾白みたり。脫ぎ給ひし夜具徐かに着せまつれば、寢返りして呼吸靜に寢入り給ひぬ。

手水濟みて東の方日出の催せるを拜しつゝ只管に、兄樣病の一日も疾く平癒ましますやうにと祈念を凝しぬ。かゝる時弱きは人わけては女の心なりけり。

十時過國手の君、途中より態と俥のわだちの音靜に訪はせ給へる御情の、先づ嬉しきに、洗水石鹼など用意する間に診察卒へて出で給へる御顏色穩に拜し參らすれば、常になく微笑の波さへ見ゆるにぞ、千百人の力得たらむ心地して何とはなしに嬉しかりき。

叔母樣方より見舞の生鮎味よしとて夕餐の糊半膳程多く過し給へるも、軈がては藥の効も翌日や一層加はらんと、老いたる母上の喜びも斜ならず。

九月三日。雨蕭々降り續きて三日、今朝もまだ止まず。健なる身には猶快からぬものを、况してや病むて三月餘り臥床の身は如何許り物憂からんと、盃餐進め參らせてより、枕許なる小說『人の兄』讀み聽かせます程に、いつしか心地よげに睡入り給ひぬ。

夜は雨晴れたり。月明し。庭の小竹のサラ〳〵と障

子にするゝ音に早も秋の聲あり。按摩の笛の音遠くさびてきこゆ。

九月五日。霧もなく晴れたる朝景色の美しきに、兄樣に格子窓越しに見せ參らす。萬頃の稻田穗頭漸く低うして雀の聲さやかに聞ゆ。飯豐の峰は中空に浮出てたる如く美しく鮮に、麓の木立の間には村の草屋の近く見ゆるもうれし。

寢つ起きつ、時々痩せたる腕さすりて、片頰に微笑み給ふ兄樣の姿、あはれにも亦心强く感じぬ。

(評)筆路整然、されど味に乏しきもの。

○花日記

羽前　しら浪

七月十一日、土曜、事務室なる大花瓶の唐葵、うつろひ初めたれば、校庭の菖蒲にかへばやと昨日より期したるを、朝よりの大雨の心憎くさ、さらば今日一日、水かへてこの花に親しまんと、萎みたるをのみ取り捨てぬ。

午後、宿に歸れば、紅と淡紅の八重咲の唐葵二本、今盛りなるが夏菊とさし替へられて床にあり。「まあ奇麗な」と、袴もとらず立ちつくす事暫時、誰ぞと問へば、五兵衛の婆さんが我爲にと持ち來しなりとや、例日は用もなきにぺちやくちやと饒舌りちらして、うるさき老婆よと思ひしが、今日の好意はいとゞ嬉しかりき。

七月十二日、日曜、梅雨そのまゝの日和なり、一週間の洗濯日なるものを‥‥　春の頃より腦そこなひて、もの讀めば頭必ず痛むに、せん方なく、暫し書卷に遠ざかり居る身なれば、昨日の老婆にお禮の珠數袋を縫ひ終へては、徒然に堪へず、物の隙に自ら培ひし石竹の花を、雨の晴間々々に見舞ひしも幾度か、眞紅なる絞りなる純白なる、とり〲にかゞやきたる姿哀れ深し、やがて、間もなく立ち去るべき宿なれば、後の紀念にもと、そが中の三本ばかり折りとりて、書にはさみつ。

夕方、一町餘ある山陰より淸水汲む時、野歸りの人と往き逢ふ厭はしさに、田の畔道を、手桶さげてたどりしに、足許に、紅梅色の小さき花つけたる左卷、やさしくも生ひ出てたり、あな嬉しと、ぬきとれば、そこにもこゝにも。咎むる人もなきものを追はるゝやうに立ち歸りて、野撫子の形よき葉ととり交へて、小さき花瓶にさして文机の上に、夜はこの花の下にて、姉樣に參らする文かきて獨ほゝゑみつ。

(評)今一息のところ。

○初夏日記

丹後　衣子

廿五日。(木曜)。晴、明日こそは我が不得意なる理科の試驗、早く起きて復習せばやなど思ひ居たりし豫算は外れ、頭痛きまゝに十五分の休息時間も、皆遊び通す。學校の小父さん(小使)よき人なり。花壇に植ゑたる花のいろ〱、美しとほめらるればにこ〲笑ひて、百合もあげましよ苺も矢車草もといはるゝ。我はいつ

としもなく此の花壇に親しみて、美しきやさしき花の名かず〳〵覺えたり、矢車草、千鳥草、雛げし、蛇の目草、虫取撫子、クローバ、松葉牡丹、立あふひなど。初夏の花は皆清くやさしうすが〳〵し、矢車草の清楚なる、緋百合の可憐なる、美人草のそよ風にもなやましげに、うす絹の如き花びらおの〻ける、たぐへつべくもなうなつかしうおぼえたり。

夜、理科の復習にもあきて、毬轉ばせつ小猫と遊ぶ。すぐる日より一心に復習なし〻なれば、これにて過失あらばそは運命とあきらめむ。

廿六日。（金曜）。うれしや又今日も靑空。學校道の小間物屋の仙人掌の花、いとよく開きたり。勢ひよく延びたる花莖の、今にも四邊のものをつかんづるかたち、初夏の花としては好個のもの。

一時間目、理科の答案、すら〳〵書けぬ、心地よし。午後、音樂の答案をいたゞく。我は幸に滿點にて何の不平もあらざれど、峰子様定子様などは、床の上にうちふして泣きくづをれ給ふ、理由をとへど只我が不甲斐なきに愛惜つきてとのみ。まことと其お言葉の如く悔ひの涙ならむか、千金にも換へ得ざる貴き價あり、さるはうはべのみにて、内心うらみ、そねみ、自暴の涙なりとせむか、そが玉なす露は賤しささもしさ汚れしものなりけり。我は大方それと推していひ知らず不快の念起りぬ、優にやさしき少女の振舞としては、あまりに荒くてそら恐ろしければ。

（評）涙の解釋うれし。

○お留守居日記　本鄕　朝井千とせ

八月八日。昨夜はふと寢そびれて了つて二時を聽いてから漸く睡り付いた、と思ふと今朝は又御出立騷ぎて何だか呆然して了つた、今頃はどの邊迄いらしたか、幸ひお天氣がい〻から嘸道中も御愉快だらう、抔と考へ乍ら後片付して裁縫に取掛つたが今日は曾祖母様のお日柄故、何か拵へて上げやうと、お末と相談して居たら、お座敷てい〻心持そうにおよつて被入つた兄様が突然に「白玉がよからう」と仰有つたので、あきれて笑つて了つた、斯う云ふお話なら何時でもよくお聞えなさると見える。

九日。むくり〳〵と大山の如き黒雲が南の方へ流れると藍色の空に生れ出た舊暦十三日頃の月は、翠の雫滴る松の木の間を漏れて打水した敷石に麗しい玉を散らす、日中八十九度の暑さも忘らる〻如な涼しい風が、湯上りの襟元をそよ〳〵渡ると、釣忍ぶの風鈴はちりんちりんと優い音を立てる、吁い〻心持と思ふに付け日光の御兩親の上が偲ばれて「兄様今頃父様や母様はどう仕て被居るでせう」「大方散歩してお出だらう」と被仰る「私は乾度宿屋の二階で此の月を眺めて被在る」と云へば「よしては僕が當つたらお前の土產物をみんなもらふよ」「ジャー私が勝たら兄様のを頂き升」とお

約束したが多分兄様の羊羹は私の物に成るだらう。

十日。さん〴〵着替る着換無いの押問答したあげく、とう〳〵今日は兄様が敗けて、新しい白絣を召してお出掛に成つた、裁縫をと思つたが餘り暑いから風通しのよい四疊半でつれ〴〵草を繙いて居ると行坊が、もち竿擔いて汗水くに成つて窓の前を通るのを呼び止めて「敬坊は今お晝寝して居るからお前も少しお休みな」と云へば、アアと默頭いて庭口の方へ廻つて行つた、常には、ねーこーなんてあくたれ計ついて居るのがお留守に成ると我儘も云はずによく言ふ事を聞く、夫れが何だか可愛相て……矢張いつものやうにあばれて居ればいゝと思ふ。

（評）結末稍きくべし。

宿雨　　盛岡　四月節子



石榴の赤い花瓣がゆら〳〵と散ると、青葉蔭に梅の實が黄ばんだ顔をちよい〳〵と見せる、離れては老鶯の聲がしきりなのでうすら眠い樣な午後、ふと、玄關で靴の音がするので行つて見ると、眞白い人がつゝ立つて居る、明い處から來たので何が何やらさつぱりと解らない、誰方と云ふとくすくすと笑ふ、おや弟の樣だ、夏服を着た五月見ぬうちに、見違ふ程丈高くなつた弟なので、急に離の御祖母樣にお知らせ申す、お庭の御父樣をお探し申すやら。畑から取り立ての新牛蒡に晩餐には弟の大好物の泥鰌鍋を作る、幾日振で御祖母様は病氣も忘れて一緒に召し上る、今日は誰方の顔も喜びに輝いて春がまたひつ返した樣。父樣は御酒を召し上りながら大きくなつた〳〵と、學校の事を色々と御たづねなさる。夜久し振て離れて三人て床を並べた、弟は先生の批評や、友達の噂や、運動會の時賞品を貰つたのと云ふて居たが、急にはね起きて洋服のかくしから寫眞を持つて來て、是れは運動會の時の

○楽しき日記　　越後　幽草女

あき〳〵する程續いた、梅雨も、天地の神樣の御相談がまとまつたのか、今日はがらりと晴れ上つた、そよそよと吹く風はしめ〳〵とした陰濕の氣を誘ひ出す、

を姉樣に上げ樣と思つて持つて來た、虞美人草の鉢植のは玄關へ忘れて來たといふ。

朝微暗いうちにそつと起きて、苺畑へ行く、すがれては有るが葉蔭に赤く輝つて居る、朝露に手足をぬらして弟の御馳走に一生懸命に取つて居ると、田の方から蛙が一聲に鳴き初める。脊後の方でがさ／＼といふ音がするので、びつくりすると、弟が青竹を持て梅の梢をにらんで居る、順ちやんそんな大きな丈をしてといふと、まだ十四だものをと微笑するので、終には二人顏を見合はせて笑ふ。

○京の一日

名古屋　八重子

二十一日。障子の越硝子が白う見えて目が醒めた。木の枝が逆さに寫つて居る、ゆら／＼と搖れて。

突然、ポタリ／＼と音がする。はて、雨かしら。宵にはあのやうに晴れて居たのにと考へると雨ではないらしい。

昨日一寸垣間見た時、隣の家の筧のいたく破れて居たが、木の葉に生れた露のこぼれて、筧にあつまつて、其雫のポタリ／＼と落ちるのではないかしら。そして其筧の下の何とか云ふ少な草花に、雫が落ちたなら、花は見るかげもなくやつれてしまふてあらうにと一寸した音が氣になつて寐ても居られず、起きて戸を繰ると、未だ朧な曙の幕を山も家も樹も被つたまゝ靜かに首垂れて居る。が日の影ばかりは白う／＼東の方から流れて來る。

庭を一廻り、隣の庭も見たが先の音の原因は解らなかつた内に這入つたら弟が、梅が落ちて居たと云つて青梅をかじつて居た。

晝、金魚賣りの女が來た。

此女のやからは鴨の川沿ひ、市のはづれに一つの部落をして住んで居て、市の者から穢多穢多と人間外視せられて居る。故に彼等も僻み根性て都の人を見るのである。其猜疑の眼、しつこい口前、私は大の大嫌いである。私は奧に引込んだ。

日が這入つてから庭を歩いたら、生垣となつた常磐木の間から山梔の花が灰白う咲いて居た。

○若葉日記

常陸　村野白洋子

一日曇。起床するや空を仰げば今にも雨の降り來らん模樣若葉曇りだなとすぐ合點が行きました。

　鐘に聞く若葉曇りや朝の寺

三日晴。何となく心地が好い折々若葉の匂が鼻をつく

　朝雨に若葉の匂ふ木幡哉

四日曇。また曇りかとつぶやきながら冠木門を庭へ出た狹い池に浮いて居る金魚の上へ椎若葉の影が浮いて居る。

　椎若葉魚浮いて居る小池哉

五日晴。日本晴だ朝から美知江が來て句等吐く。

　若葉して廻廊曇る廊下哉

新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は乙種の規定に據る

天 ○魂の惑

牛込のむら

黄金燦たる大殿の
玉の彩戸は開かれて
大理石の柱に彫刻れし
女神の像華やかに
瑠璃の階段一歩み
入らんとなせる瞬間に
外面を装ふ誘惑の
宮殿よこは耳にしぬ
慄ふ我足踏みしめて
急ぎ下れば後より
榮華の幸を受けずや――
富貴の譽を荷はずやと
いと高らかの叫び聲
黄金の壁に反響しぬ
をぞましやともすれば
引返さるゝ我袖の
聞かじと心耳を掩ひつゝ
青春き吾身に馳戻れば
眉を壓して立つ愛の宮
朧にこそは目に映れ
人誘惑の低き聲よ
なほ耳に絶えざれど
うれしきかな
わが志す旅にしては
目ざすは
唯一の愛の宮殿

君かつて華燭の賦を作りて、脫ぎすつる紅の袖に別れの目をくはしつゝ、われとわが一夜に迫れる處女の軀を愛惜し玉ひき。君が年は若し、げに愛の宮ならでは行くべき方もおはさざらむ。されどこの詩は完作にあらず。

地 ○落つる月

信濃　太田喜志女

山遠き國の――落つる月
そは地の果か
かびろき海の――落つる月
そは世の果か
今月は落つと
力ある低き叫びに
魂はなれ
夢心地たゞずみて
泪を墜す
詩人あはれ其國にありや
ふと思ふ
今宵この端山に傾く影を見て
泣ける吾が如
其の詩人はなほつよく
なほふかく
限りなき思ひのもとに
なげきの涙すゝるらむ
今ざれ唄に興ずる人の
狂ほしの子よと行ずりに

つぶやきつゝも振向きぬ
口惜しきかな
あゝ吾はつひに
狂ほしの子となりにける哉

落つる月――
今しばしとゞまれや
吾が足もとは見えぬまで
瞳は泪にうるほふに
一たび拂ひて仰ぎ見ぬ
二たび仰ぎぬ――胸はしびれて
三たび仰ぎぬ

あはれ〱舟の如尖れる尖鋭は
うね〱の波なす山に
刻一刻かくれぬ、沈みゆきぬ
小さき光いよゝ小さく
あゝあゝ遂に見えずなりぬ
吾立つ影も――行く方も
暗く悲しき心かな

その夜、沈み行く月を望んで立ちつくしゝ

君が面は白かりけむ、頬に傳ふ涙のもとは誰か知らむ。七月十二日夜ふけてわが見し月もくらかりき、雲しば〱銀河をわたりて二星いづれに在りともわかず、人みな眠りてわれひとりさむ、ああ夢。合せてや忌むといふらむぬばたまの夢野の鹿の諸聲に鳴く。

人

○亂調

大阪　木村　春江

降るは雨――
しとゞに落つる魂の
行方を追うて、わくらばに見る
夢も吾にはゆるさずとか
吹きまくそとの嵐よ風よ
花はもがれて狼籍の
苑生は土の匂ふらむ
朽ちゆく恨――
花ぞ吾身の上なるもの
まづ〆むる三の糸
はづみては撥の折れうとも
ああ我歌よはげしかれ
外面はしきる

雨の音風の聲

いしくも調を亂したるかな、眠り得ざる夜半の悶えもよし、彈くは琴ならで、まづてん手を〆る三絃なるもよし。

秀逸

○くづれ木戸

科野　小野つかさ

十坪の苑のくづれ木戸
くねから花の背延して
夏の日盛りに匂うて來た
なつかしい花、薔薇、萩、葵
一つづゝ摘んで手のひらに
のせて匂ひをかいだけど
燒石の上に皆すてちやつた
可愛いけれど、だつてあの
萎れてくろくなつたもの
只一つ私が髪にさして居る

五つ花びら常夏は
ほらね、苔がひらいてよ

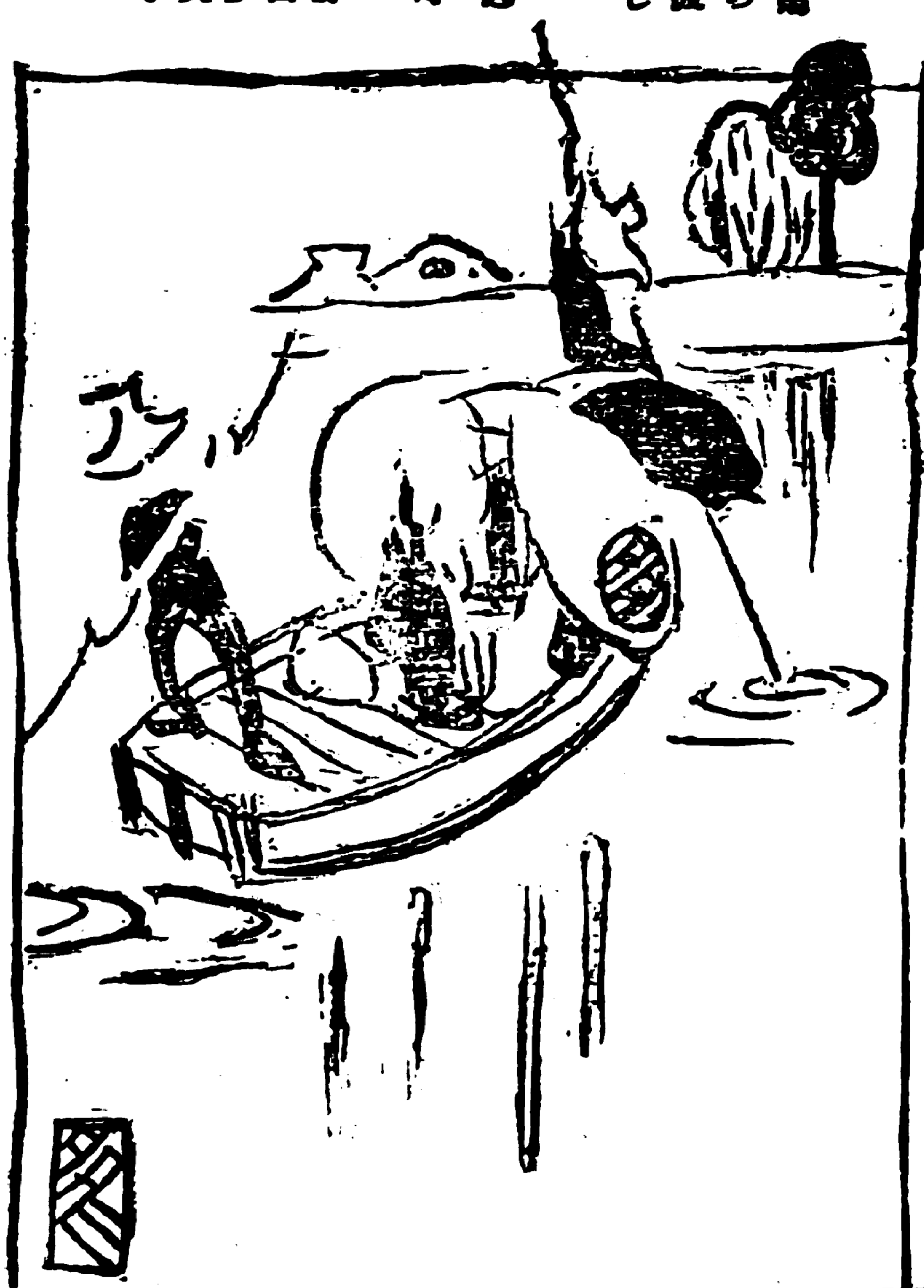
霜さゆる朝の庭の冬枯れに一花咲ける撫子、それは冬、これは雲白き夏の夕ぐれなりき。浴後の秋風輕う、手に白絹のはんけちをまさぐりて、ひとりはしゐしておはしたる、漆黒の髮、くれなゐの搔頭、君はたゞ花をかざゝんお爲めに小野に立ちし夢の子よ。

○母の顔

金澤市　八島れん子

小面憎い風はそしらぬ
風に亘る。
木の葉は醉うてる樣に
躍り出す。
日の暮の空は、まるで
水の穴だ。
くすぐつたい樣な哀感が、胸のどん
底に、
ぴん〳〵跳ねる。泪が出る、意氣地
なくぽた〳〵と。
それがまた生血のやうな感じがする。

雨の渡し　麹町　昔田多美子



あゝ青い空に、母の顔が浮ぶ。凝乎
と、
私を見ていらつしやる。……呼んで
見たいが、
もう口が利けぬといつた風に……苦
しさうだ。
母の顔が鳥になつて、
吸ひ込まれるのか深い
底に沈む。
痛切な悲しみは耳のは
たて呻吟る。……萬象
が、
消滅するやうな思ひ。
急に足が輕くなつた。
あゝ魂がくる〳〵廻つ
た。汚染の樣に
廣がつた……空一面に
どす黒く……腦を壓す
る。
あゝ苦しい。眼が眩む。

ご覽、花が廻ふ。五色七色…火の
牡丹が廻ふ。
灰色の薬が廣がる。やがてぱつと消
えた。
風の音がきこえる。空は同じい夕暮
の色だ。

これは男では無からうかといぶかるよりはむしろこれでも男かと言うた方がいゝ。茄子野といふのやら高村といふのやら、それとも八島といふのが本名やら、尼さんの名をつかうたこともあるし、せんさくするのも馬鹿らしい、それにおほふうな、きいたふうな口のききざまなので、何としても眞面目な人とはうけとれぬ。と言うと作者は不快だらうけれど、それはいたづらの報だとあきらめる事だ。

○立秋　麹町　横關春子

ポタリ……ポタリ
桐の一葉が散つて來た。
吁、最う秋になつたのか、
虫も啣いて居る…淋しいな、
風も、……かう何だか、
怪しく胸に響いてならぬ。
噫、我が魂も秋が來た、
沈淪は前に見えて居る……。
斯う思ふと堪らない、
ホロ、ホロ、泪が零れる。

萩の袂に松虫が、
痩せた聲で、愁を訴て居る、
だが——野路を見渡せば、
名もない草が花をもち、
榮華ある象を示して居る。
あゝ、未だ〳〵友がある。
希望の花も未だ散らぬ。

これも氣障な詩だ、好かぬ。「わが魂も秋が來た」と言へるなら、「馬も草が生へた、雞も柿が生つた」と言へる、あんまりては有りませんか。

○歌と響と　大和　豊田晴子

日の光、花の香、
濤の音、風の調、
鳥の歌、虫の聲、
地より天にのぼるもの、
わが胸の、
森にかよひて、
ひゞきは歌と、
湧く泉。

いつも名を書いたためしのない川島わかばといふ方は、酒に醉うて脛もあらはにねてゐる藝者を好もしがつた詩をよこしたが、あなたも誰にかぶれてか、あられもない作物を寄せるので、毎度々々こちらが赤面する、ことに人妻と一重の衣をへだつるのみにて寢たといふ男の詩はまさしく中毒の言て、女も女だ、愛相もこそも盡きてしまつた。中毒の言とは何の事だかくやしければまづそれから調べなさい。藝術の前には道德も法律も權威は無いなど言ふのはまだ早いてせう。

○想出の興　秀湖

緑の窓の獨り居や、
雲の行衛を眺めやる、
眼路さへぎりて我肩に、
こぼれし木の葉いぢらしう、
拾へば籠る哀愁の、
我とひとしき運命かな。

涙に過ぎし十七の、
榮えなき歴史をかへりみて、
あゝかへりみてたゞ
想ふ。
百千の星の照れる時、
棕櫚の樹影にうづく
まり、
双手に抱きし小さき
胸、
ふはり〳〵と魂脱け
て、
夢幻とかゝるなる、
天つ梯登りしか——
浮かぶ面影そのかみ
の、
高き希望の憧憬よ、
冷たき秋の風おもふ。

龍頭蛇尾

○窓の戸

福井縣　吉田　梅子

窓の戸をはたと啓くれば——
いき〳〵と心地よき風揺れて來し、
その微風に
我頬の紅ぞ燃え燃ゆる
見えたる刹那の君が小胸に簇葉ぞあ
また
——
うち靡ぐ一片毎に熱き戀の火照力——
窓の戸をはたと啓けば——
さや〳〵と靜けき調流
れ來し、その音に
わが心眞洞と空しそは
きのふ
別るゝ刹那の君が瞳の
涙の玉の
我胸の焰の花に散りか
かりてし、それの如く
に。
あゝかくて
二つ欲りつゝ窓の戸を
はたと啓くれば、
おごそかに冷氣ぞせま
り陰濕の風は來りぬ。
わが魂の宿りはいづこ
怖ぢさまに鎖ぢんとすれば
庭の桃の實は重き響をかへしつゝ地

少女　近江　大角歌子



に落ちぬる。

「火照力」にびつくりしただけて、詩はあやしい、取つたもんだらうか、捨てたもんだらうか。

○扉の影

山梨　井上　笹波

誰が業ぞ！誰が罪ぞ！

培ひつはぐくみし
香はしの胸の花
ーさは云へ黒き幽暗の中にー
眞少女の「眞」と云ふ
扉の影に生ひ立ちし純なる薫

幹太り葉は繁り
沈默の風にもそよぐ
明の日を君が前に
壽うけん……あゝ近かるを
魔の蝶？毒の蛾？
蚕食みて蜜吸ひぬ
干枯びしあゝこの萎え

時の刻みー光陰の力ー
靈のもだえ身の戰慄
今更に
君呪ふ惡業のあゝ恐ろしや

扉といふ扉はどんな扉か知らないが、草木ぢやあるまいし香が生ひ立つとは珍らしい今になつて君を呪ふといふのも、前に何かの暗示が無ければ、つかまへどころが無い。

○弱き心

本鄕　田村　花

僞り充てる世、
我は其が魔に囚はれて、
行すが儘に、
世をいつはりぬ、我は、
されど清き魂、濁なき魂、
神に搖り起されて、ふと醒めし、
心の深き底に、神の犯罪を責る囁き、
懺悔せよと促しの聲、微に、
胸は掻き挘らるゝ如、
百貫の鐵の笞、
泣きて……我は泣きぬ、そが涙、
ナイヤガラの瀑布も、かくもやと、
魂は消えしか、ーー
紅の血汐は沸りて、若き肉は躍りぬ、
喜の心に縢りて、
されどーーされど悔ても、永久に、
疑ひの雲のたなびき、
拭はるとしも、
思はねば、我は悶えてーー噫、
噫ーー我は弱き心よ、

むかし、良暹法師「宿近くしばしながなけ時鳥けふのあやめのねにも比べよ」とよみて、「ほと」と鳴きはじめて「きす」と鳴けとにやと笑はれた話がある、田村さんはナイヤガラの瀧のように涙をおとしたといふがこれもずゐ分後世に傳はりさうな滑稽だ。

○熟睡

大阪　豊田　繁子

炎帝の百の族が
猩熱の世の古き寳の
銅羅の合圖に陣立てゝ
限なき空氣を燃やし
地球を煮る七月の
盛晝の下り。

天地のおそれの皮膚は
毒舌の火にただれぬ、されど
こゝ晝顔の窓の簾蔭に
白蠟のもの、片われ
うまいの息をよそに洩らせり、
風のおこたり。

こは夏の、只狀なれど
戀の世の熱、假面のうらに
魔のいたずらよあゝかくて
うまいしぬ、可憐の少女
毒の醉とも、永久に知らずば、
幸のあはれや。

夏日戀を夢見て簾の蔭に睡れる少女を宇宙にかゝれる地球の光と熱とに煮らるゝにたとへたるもの、惜いかな、力負けしてしまつた。「永久に知らずば幸のあはれや」の句もべんけい同様衣川に立往生してゐる。

○はつ秋の風

丹後　中澤　衣子

むら濃よき衣丈短かう、
鈴なり下駄をほしがりし、
それも八年の昔にて、
われは少女となりにけり。
おゝそのかみは若かりし、
今はた老いし母君が、
朝戸ひらいて上げませる、
み手にあまたの落ち髪や、
鬢寒う吹く秋の風、
われは悲しう涙ぐまるゝ。

海岸　　陸奥　立花とも



○思ひ出

麹町　順子

垣より洩るゝ爪音の
主は知らず。
耳馴れし調べにそゞろ
我もこごゑ。
小さき胸に追憶は潮と湧きて
ありし日の俤うかぶ。
墓ふのみ忍ぶのみなる……
儚なき影よ。
痛める胸の
奥深く
寂寥は犇々と
身に迫る垣の下
胸抱くうらぶれの子に
夕づゝはひとり微笑む。

○たそがれ

會津　坂内　鐵鈴

秋の日は
黄昏れぬ、野は灰色に
悲哀のかげのたゞずまひ。
うちむきて、あなとぼ／＼と
辿りぬる、野なる細徑ゆ

一線に。
つとたゝずみて、
うつろなる空こそ見入れ、月は今、
霧に浮びぬ。冷たくも
胸こそ抉れ秋の月、
秋の風ふく寂寥の
小野の荒涼に病人は
あゝ、崩折ぬ――枯草の
香なき響をきく如く。

○わが宿　和歌山　田中　文子

丸まげの人となつたる
仲よき姉と
めだか掬ふと遊んだ小川
春は見渡す野の霞
桃もさきけり丘の家。

○向日葵　岐阜　氏家たつ子

きられて時や移るらむ
莖に眞白き指を觸れ
携てる少女よ日ぐるまの
花の意をわれぞ知る

心ぞ清き處女子の
柔手の熱も地の上の
人にしあれば天を戀ふ
花に感覺のあるべしや

土にさす日の影をのみ
ながめて何か慰むる
悶えつ萎む日ぐるまの
あゝ花の眞ぞあはれなる

○少女心　靜岡　杉山じゆん

今はしも、
春の光りをうちよせて、
吹くや野邊のこち風に、
枝もたわゝに咲き滿てる、
梅の花よりまだ清き、
少女心のうるはしさ、
神の心にさも似たり。
されどもし、
心の嵐ふき初めて、
さくら花さす其頃は、
匂ふ少女のこゝろにも、
やがては出てむ寛や劍、
少女心はさだめなき、
宵にひらめくいなづまか。

○狂ふ蝶　日本橋　吉野　郁子

繪にせんものと切りとりし、
まがきのもとの白百合の、
花なきあとのあを莖を、
朝な夕なに慕ひ來て、
蝶は何をかたづぬらん。
ますては契りも深かりし、
花の行衞をさがせるか。

○夏の晨　相摸　小川　白梅

見よ東の御空には、
七彩の雲たなびいて、
明星の影は消えぬ、
あなや、見る目に燦として、
世の憂き人が億劫の、
迷妄破る慈相して、
金色雲に日は出てぬ。
瑠璃の如き霧晴れて、
牧場に薫る白百合の、
こぼれて美し珠玉の露、
晨の鐘は殷々と、
「人の子醒めよ」と告げ渡る。

○冬の夜　日向　境　みつ子

甘藷はやけぬあたゝかく
火箸にはさみ取りあげて
兄と弟とは睦まじく
食ひはじめぬ甘しげに
今し室内薄ぐらく
吹雪はしきる窓の外

○夕　神奈川　後藤八重子

草おはせ――
鈴の響の勇ましく
里の畔道傳ひゆく
馬は斷き童は唄ふ
彼方に見ゆる我家の
門に待つのは妹か
軒より出づる夕煙
今日の名殘の夕燒も
薄れて今は影もなし
明星の唯一つ
西のみ空に光り出ぬ

新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどもむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は乙種に據る。

天　○青年作家の俤

小石川　夏衣女

それでは貞子様、私の心に映じたうち、かけるだけをかいてみませう。

まづ第一に小川未明様、初めて御作を拝見しましたのは十四の年、讀賣紙上でした、その時から、この方の御作には、常に、一種の強い哀愁に打れて、よんでゐる自分もその中の一人の樣な、氣がします、それてその御人柄を想像してをりましたのは、から、きやしやな神經質の、どこか物おぢした樣におど〱した風のある御方であらうと、處が、お目にかゝつてそのあまりにがん丈なのに驚きました、兄を大きいとおつしやいますが、まだ〱大きく、且つ御色が淺黑くてゐらつしやるので、本統に御丈夫さう、今の青年には有勝の近眼で、始終パチ〱させて、早口に物をおつしやる處は想像通りでございました、この方について一つ面白い？事があります、それは、四足のものを召しあがらないので、或は神官の家に人となられた故でもございませうか、次は水野葉舟様、癖のないすらつとした御筆つき、どこをどうといふ事なしにつられておしまひまでよんでしまひます、今月の早稲田文學の家出にしろ、文壇の花の家出にしろ、その他どれでもさうです、そしてよくその心持があらはれてゐます。

この方は、縞のお羽織やお洋服などめしてゐらつしやると、お年よりもふけて、銀行員かなんぞの樣、絣のお召に同じお羽織なぞですと、お若く、お坊ちやん〱してみえ、これでも二人のお子さんのパパさんかとおもはれます、夕方、行水あがりのつや〱したお顏に、お浴衣めして素足に女下駄などひつかけてゐらつしやる處は、實に意氣で、商店の若旦那？中高の色白で、いゝおかほ立ち、けれどおしい事にはお鼻がお惡いのでお話がいかにもお苦しさう、けふはこれにて失禮、他は次の日に、さらば。

能く御存知です、是には未明君も葉舟君も異議を申立てられないでせう、偖て此外の作家は何うです（評）

人

○投書家と選者

芳雲

私は女子文壇最初號からの讀者でありますが、今日迄に或は當選或は秀逸に掲載せられた、詩歌文章に就いて少しく意見が述べたうてなりません。小説は勿論美文から新體詩和歌新歌謠に至る迄、どれもこれも大方類似した事柄が書かれてある、思想といひ文字といひ毎號々々殆んど同じです、例へば追憶とか哀恨とか戀はれ戀ふると、云ふやうな、無暗に悲哀の意味に近い句を以て滿たされてあります、これは單に投書家が妙齡女子たるの故許りてはなく、概して感情を惹起せしめ易いから、人をして一讀直ちに紅涙點々の跡をとどめしめ、以て同情を買はんとの野心から自然其方面に筆をつけるてせう、若い人はそれとも氣付かずうかうかと愛讀玩味して、知らず〳〵の間に恐ろしい毒にあてられ、遂には恰度お酒呑みが自分で醉ふた時の醜體を悟つてゐ乍ら、猶それを止める事の出來ぬのと同じやうに、よからぬ事と知りつゝ益々耽讀して取返へしのつかぬ悲しい哀れむべき狀態に陷るやうな事が隨分少くないてせう、して見ると餘りに美くしきに過ぎて、優艶類ひなき叙情文の如きは慥かに、清淨無垢の少女を暗黑の淵に誘惑するの、力を持つてゐるものといつて差支へないてせう、かうなると非常に大きな問題になりますが、そこで私は切に選者の君にお願致します、どうぞ以後斷然と云ふ譯にもまゐりますまいけれど、道德上成る可くさういふ作物は惜しまず沒書して頂きたいてす、かういへば他に佳作がないからと、申されるてせうご尤もです、今の女子は徒らに情的方面にのみ流れて、のらくら者が多くその云ふ事も書く事も、悲觀や寂寥を免がれぬのは、誠に慨嘆の至りに堪へません、私は實に其等精神的死人を光輝く樂園に導く人が、あつて欲しいと思ひますの、て次に作家諸孃達にお願ひ致しますが、どうぞ愚考をご賛成あらば以後自然派文士をまね損なつたやうな作は、一切やめて至善至美至高至誠の、快文字に滿ちた高潔靈のやうな、奥床しい文て、高尙に本誌を飾らうてはありませんか。

甚だ有力な議論で結構でした、但し此論に賛成するものと、反對するものとは頓て當面の思想上の二大潮流てす、恐らく一大問題てせうから此處にかる〳〵しく判斷な與へません（野）

秀逸

○納涼

京都市　大森はる

こんな事を論文と申すのでもありますまいが、妾の近近に感じた儘を少し申上げます。

毎年七八の兩月は何地も納涼の期節ですが、晝の汗を

行水て流して夕方から、涼しい場所て涼しい風ても受けてユッタリ憩ふてこそ納涼としての本分てせう。けど他地方は知らず京都ては夏期になりますと毎日夕暮から納涼にと出掛ける人が澤山あります其お人達は男女共身分品位に限りはありませぬが先づ十中の八九は中流以上の方々て、晝の汗も行水に入つて折角サラリと洗ふた顔へもお白粉をべつたりと塗つてお衣裳と云つたら飾つた上にも着飾つて唯さへ暑いものを巾廣の帶を締めて足袋まで穿いて居られます、それて納涼にとて往かれる所は河岸や磧とは云へ電燈や瓦斯燈を數知れぬ程澤山燈した興行物等のある場所へ多くは人氣が集ります、人もさながら夏の蟲の樣てす、混雜な人込みの中を押しつ押されつして何が納涼てせう、往く時には眞つ白てあつた足袋も何時の間に踏まれたか泥まみれ、行水て流した汗は以前に增して玉の樣てす

雨　陸奥　立花とも



之れなら往かぬ方が或は納涼てせう。それて妾も折々お友達から此納涼に誘れますが、妾は矢張り在りもせぬ衣裳を着飾つて汗を出しに行く納涼より、自分の宅て椽側の障子を明け放して庭の樹々に打水したのを平常着の浴衣の儘火氣の無い涼しい場所て團扇片手に涼んだ方がほんとに納涼てはなからうかと存じます。

沈着な書きぶり、殊に京都の人には參考になります（評）

○自然のまゝたれ

麹町　横關春子

此世の中て何が美しいと申しても、自然の美に勝つたものはありますまい。そして私共の心を清め高尚なる思想潔白なる感動を呼起さしむるは、自然に越したものはありません。夫れを人々は此自然に要らざる加工をして俗な醜なものにしてしまう。早い話が妾共のお化裝——白粉てす、本當につまらない技工をしたものだと存じます。色賣る藝妓ならいざ知らず、苟も學生

の身分で心の花を咲かせようと云ふ者が、單に見つともないから位の考ておやりになるとは、實に歎はしい事です、心ある人は必ず顏を反向けなさる、殊に現今の男子に於て著しく左う云ふ傾向がある樣に思はれます。同じ人でも化裝した姿よりも、例令色黑くとも生來の姿其儘の方が、何んなにか高尙で奥床しいかしれません。そして意志の强固な相が分明と現はれて、にやけ男に付けられ心にもない恥を洒す樣な愛はありません。眞實に愛せられたいとならば自然其儘の姿て被居い、加工した姿を愛する樣な人は、屹度心に僞りの加工をしてあります。

昔澤庵禪師は、將軍家の御前で水瓜を御馳走になる時添へてあつた砂糖を付けずに嚙つたので、將軍家が砂糖をつけよと仰せられた所が、禪師は儼然として私は自然の味を賞美するものですと、暗に將軍家をお諫めなされたとの話がありますが、現今の人も何うも此自然の味を本當に知つて居る者が少ない樣です。私共は來れる暑中休暇を利用して、淸き自然の大氣を呼吸し、高尙なる思想を養ひ、本當に自然の味を嚙締めて、自然と同化したいものです。そして新學期には皆自然其儘の姿で一堂に會し、赤銅色の顏を撫て丶、田舍自慢や水泳自慢、扨は自然より與へられたる高尙優美なる感想を語り合つたなら、何んなにか面白いでせう。

此論の根本思想は確乎不動ですが、言葉の使ひやうに深さを缺いて居る爲め、自然と同化と云ふことが、判然と皆のあたまに入りませうか、何うか（評）

○記者樣を想像して

德島縣　西野ひさし

私は記者樣を想像て評して見ませう。澤山のお人の中に、左の樣な御三方が居られるように思ひます。

おつむりを分て烏の濡羽の樣にチックで光らし、お色の白い細面にゐかめしいお髯くつきりと、折々眼鏡越に皆の顏を御覧になつて、又原稿にお目を寫し、是も沒書だ、あれも沒書だと、何の御ゑんりよも無く、私等の苦心の作をお捨て遊ばす‥‥‥とはちと申すぎましたが。

お一人は、やはりおぐしを分て少し圓いお顏に、眦は稍下り加減ですが、恰好のよいお鼻、しまりのあるお口に、赤味がかつた薄いお髯をしきりにおひねりつ丶、何時も元氣のよい笑顏にお口輕く、短文の評の面白いのはたいてい此方が遊ばすとか、私の心が申ました。

又お一人は。おとしの若い、おつむりは無造作の五分刈で、お鼻の高い、お口のちひさい、お目に愛嬌の有

るそしてよく何とかお氣の付議にでもうけのよいお方雲つかむ樣な想像てすから、當ら無つたら失禮のとてろはごめん下さい。

此邊り、ちがひなし(評)

○文字につきて

京都　眞砂女

昔から今に或方面の人には「文字は姓名を記するにたる」と言はれて居りますが、私はおこがましう御座いますけれど、これ等の人と多少意見を異にして居りますのでございます。若しそれ、未だ一面識ない人と初めて交際を願ふ場合、先づ第一番に必要なのは手紙―文字でございます。其文字が人に惡感を起させない位に書けない樣てしたれば、はたして先方に取つては何と感じられるでせうか、若しそれが私として考へて見ますれば、多少輕蔑の意を起すのは當然でございます。人も亦同じではないかと存じます、まして婦人の細き〳〵字體を以て、尚金釘流と來ては、さすがに讀む人の心も思ひやられます、又夫れ、文字は其人の性質を表はすものと言はれて居ります、勿論之等の事は、天才による事てはございますけれど、例ひ、天が自分に才を與へて下さいませんでも、練習の結果或程度迄は、如何なる人でも進歩するもので御座います。さるを、何かといふと、私は天才がないから字はまづい、書けないと、おこぼしになる方々が澤山ございます、之等の方は、暗に自分の練習のたりない事をお知らせになるやうなことにはなりますまいか、交際頻繁なる今日、たゞ文字は姓名を記するにたるとの一點張りで居る事は各自の不得策では御座いますまいか。

とやかく高言を吐くと或は私に、如何程の手腕があるかとお考への方もありませうが、得て世の中は人の事を言ひ立てる割合に自分の事は棚の上的、其れとは稍事違ひ之は我身の事餘りの惡筆に感じたばかり、世の常にもれず思ふばかりて、十日に一度棚の掃除をするてなし、進歩の見込みはなけれど、日頃の感を記したのに過ぎないのでございます。

自ら言はれるだけあつて御筆跡はきれいです、此論を讀んで頂きたい方が投書家の中に澤山あります(評)



流し　水戸　北川うめ子

○お願ひ（岩手の諸嬢に）

岩手縣　つぼみ

私はまだ愛讀日數も淺いのですからよくはわかりませんけれども、岩手縣の方の文章を此の紙上で拜見することは、大變少くないようでございますが、皆さんにはきつとよいお作がたくさんあるだらうと思ひます。けれどもそれを、投書なさらないのでございませう。私のお友達にも、隨分うまい方がありますので、「あなたも御投書なすつては」と申しましたら「投書するには何字詰だとか何行限りだとか規定があるから面倒臭い」とおつしやいましたが、皆樣にはそんな事はないでせうけれども、綿密であるべき女であつて、もしも然ういふ風でありましたら、此の後、立派に世の中に立つて行くことが出來るでせうか?。

また、皆樣の中には、面倒だなどゝお思ひなさらなくても、『恥かしい』と思つて投書なさらない方があるだらうと思ひます。

私なども、早くから、投書し度いものとは思つて居りましたが、皆樣にもお恥かしいし、こんな、拙ないものでは、見て戴く方にも濟まないしといふ樣な氣がして、つい今までひつこんで居たのですけれども、然うばかり思つてゐては、上手になることも出來ませんから、これからは、書く暇さへあつたら投書して見ようと思ひます。

此の頃では、お歌のお上手な方も出ていらした樣ですから、此上もないことゝ、蔭ながら喜こんで居ります。岩手の皆樣！この後どうぞ、ます〳〵御投書なすつて下さい。始めのうちは沒書になつてもかまひません。そして此の地の文學を、ます〳〵盛んにしようではありませんか。

既に此處に一人の先達あるは、十人の同行よりも心强い、岩手の皆さんは何と思召す（評）

○死について

神田　田中きよ子

私田中久子樣の、死と云ふ美文を拜見して、死はそれ程恐るべきものかと思ひました。と云つて、決して死を美しいなんて、云ふのぢやありません。死は悲慘です、悽慘です。けれども、墓に彫まれた名は、在世中、如何に、罪を作つた人でも、淸いものです。されば、私は、死んでしまへば、誰しもきれいな處へゆくと云ふ事を、信じて居ります。丁度私が、十一の時、姉樣のお病氣が重くつて、お醫者もさじを投げてしまはれた時、不思議にも、追々お宜しくなつたので、ずゐ分苦しい事でしたらうと、刹那の思を伺ひましたら、些とも苦しい事はなく、只好い氣持に成つて、朱塗の御門の傍へ來たのですつて！　その先きは、大層景色の佳

い處！早く行きたいと、思つて居ると、美しい坊樣が入しつて、頻に手をふつて、來ては不可ない〱と云つて居るやうに、見えたと、……其後間もなく、姉樣は再び病氣がお惡くなつて、取縋つた私の手へ、冷たい身體ばかりを遺されましたけれども、其から今に至る迄、私は、姉樣は美麗な處へ、入しつたと思つて居ます。そりや私だつて未だ十六。死ぬなんて、ほんとにいやだ。けれども生きた人間ですもの、甚麼わざわひて、彼の世の人とならぬとも限らない、若しさういふ人があつたなら、其人は、それだけの命の人だつたんだ。最早、終る時が定まれば、泣いたつて、笑つたつて、駄目。死ぬ人は美麗な處へゆくのだから、安んじて行くより外はない。死！側から見れば悲しいけれど、ゆく人は現世の花を失つても、あの世の双葉を得るのだから、其人に取つては、悲しみは無い筈です。死は人間の段落で、之を悲しむのは、只單に感情の上ばかりです。併し其が人世の美しいのかも知れません。

實驗室　南多摩郡　中島縫子



久子さんとは立場が異ひますから斯う云ふ議論もあるでせう、勿論斯うあきらめて居るのが世間普通でせうだから人間も死んでゆけるのです（評）

○北海道本誌投稿家諸孃の一口評

札幌　篠原靜枝

都士子樣。貴女は小説界の雄將です。思想の豊富な筆の流麗な、此年十九才と承りました優しい姿！涙もろい、感情的の人でせう。

矢萩池根子樣。新體詩がお上手です。言葉の涼しい美

くしいお方、いつも白いリボンをかけて居なさる今年十九と承りました。

西部秋江樣、あまりお作を拜見しませんが、和歌が得意だと思ひます。あの廣々とした石狩川を見て、古風なアイヌの家を見て、さぞ和歌の材が多いでせう。お勉めなさい。

橋本千草樣。波の高い後志の海の人、矢張和歌がお上手てす。御病氣だときゝました。本誌のため御自愛なさいまし。

清水たか子樣。此方の美文は有名なものです、少女世界によく出て居ります、哀愁の深い、悲哀の文字の多い事、妾は心から同情します。

柳野すみれ樣、活潑な、二十世紀の女學生、文章はそうてもありませんが、學問に深い方です。

村岡たま子樣。色々の雜誌て拜見します。まだお若いのに、ほんとうにお上手てすこと。天才と言ふより外はありません。美文と和歌がオハコてす。

秋田せい子樣。未だ十五才の御身て、文章に熱心なのは感服の外はありません、感情の發逵した、哀愁の人て、妾は何となく懐かしくてなりません。

終に望んて一言申しますが、北海道の本誌愛讀諸嬢よ本誌紙上を北海の名で埋めようてはありませんか。末筆作ら記者樣の健康を祈ります。

一地方の人が自分の地の人の名を眼に着けるのは人情です、而かも批評まて試みる人が現れて來たのは郷土文學の爲によろこばしいことです（評）

○隣り同志

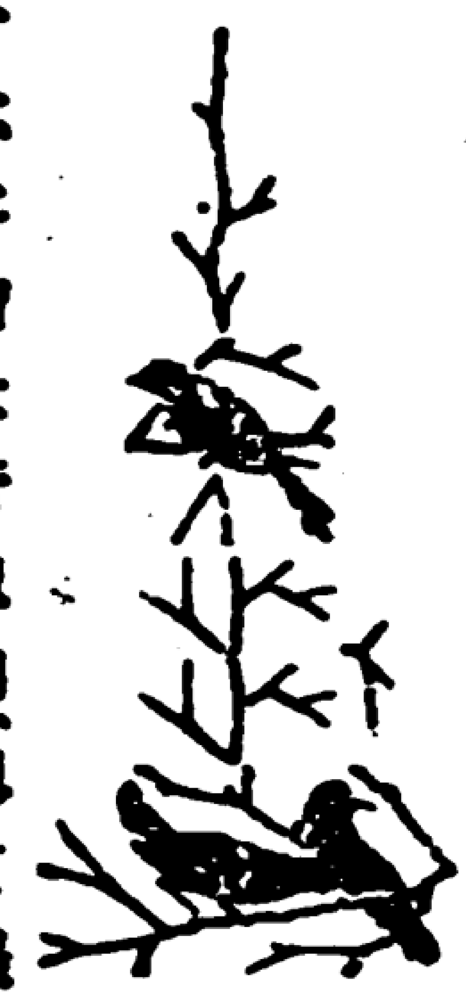
奨作　杉山花枝

私が此處の小學校に通ふ樣に成つたのは、もう二年の昔てす、宿として居るのは以前私の父がまだ榮えて居た頃世話にして居た八百屋の作と云ふ正直者、今は古里に歸り、里と云ふ女房と二人ぎりて先づ不自由なく暮して居る、私の通ふ學校と餘り遠く無いので彼れの進むる儘に遂に作の宅に宿ることゝ成つた。ついお隣りは鷄を多く飼つて居る金太郎とか云ふ人の宅。根が正直な變屈な作は何時どんな事が元てか隣と仲違ひしてしまひに行來はおろか小猫をさへ行かせないと云ふ風てした。そしてどちらも惡口の言ひ合ひ、他から見ると馬鹿らしいが、然し其れて快として居たのてす。他人の話によると、何ても此んなに成たのはも早私の來たより一二年も前からてしたとか。善く無い事故私も何とかしてと思ひましたが双方共變り者てすから手の附け樣が無いのて其れなりほつて置きました、隣同志は次第に高く茨の垣を造り鷄一羽越す事も能はぬ樣にしました。かくして二年三年と過ごす中に何時しか不自由と云ふ事を感じ逍がの作爺も大分熱がさめて來たので私は此處ぞと心を盡くして双方をなだめました處どちらも悔心したらしく其れからは行き來を仕猫も鷄も嬉れしそうに遊ぶのてす。

茨の垣も知らず〳〵取り去られ後に變つて朝顏の芽出昨日今日二ッ三ッと咲き初めました、其花はどちらから見ても同じへだて無い美くしい花てありました。私は其時或る深い感じに胸を打たれました、此感じは私一人てはありますまい。

論文としては少しお門違ひてすけれど、事柄も文章もおもしろい、是な論文にするには事柄を簡單に書いて、作者の意見をもつと多く加へなければなりません（評）

短文 河井醉茗選



規定 十六字詰七行以内、總て振假名を付くること、締切前月末、懸賞は丙種に據る。

〔天〕○送り迎ひ 京都 島本久惠

門に立つて、出て行く人を見送る時はもしこのまゝに歸り來まさぬのであつたらとそゞろ悲しく、其處此處破れた上り框の古疊に、兩手をつかへて迎へる時は、まあ良かつたと胸撫て下す、此の感は十四の彼岸に父を失つてから、ますます深うなりました。

不安

〔地〕○私の想ひ 長野 西條うめ

ボタ〳〵する白ちりめんに、百合の露て大きな、白百合を書いて、それに香を持たせて、蓮の莖の糸てお召に仕立てゝそして天上の星に嫁入したい。

地上の星に顏色なし

〔人〕○蝶の命 本郷區千駄木町五九 加藤ふて

炎天の不忍池畔に、集まる子供等の網を逃れた蝶は、ひら〳〵と私にまつわる。「彼方だ〳〵」と袖無し一枚の子や眞黑な惡太郎が追ふて來る。虫の命の一盛りの夏のそれより短い、蝶は水面を——私は袖て拂ふと、蝶は水面の方へ飛んて行きました。

其夜の夢には蝶の天使

〔秀逸〕

○渡島 會津 白井絹江

翼を並べて渡島が飛んて來た。里川の水に夕月させば夢かと映る白萩の一本。花も痩せたが人も痩せた、小肩にさらさらと黑髪が亂れて、紫褪せた袂を犇と胸に抱いて、薄寒い風に吹かれ吹かるゝまゝ彼の鳥の影見うしなはじと。

無限の哀愁

○電話て聞た聲 横濱 小夜子

岡山の人の聲は勉强家の樣、神戸に長崎は下品な聲、大坂はあつかましく、京都は奧床しく、名古屋は田舍者、横濱に横須賀は上品て、東京は氣取屋樣。

居ながら日本全國の人の聲を聞く

信濃 太田喜志女

この信濃の人の性質はいらいらとして居て、涙にもろく、妙にひねくれて居る、其くせまた熾んな情熱があつて上べは冷やかであつても胸には火山のやうなはげしい熱をもつて居る、一人ぼつちの沈思を好むこれが

妾の思ふ信濃人の根生、妾もこれに似て居ると思ひます。

能くあたつてゐる

○日蔭　山口深山鶯

私はお天氣の日にはいつても日蔭で時間をはかります、朝障子にパッとお日がさした時が八時、障子の腰板の下まで行つた時はお晝御飯の用意をする時、緣の端が十二時そして向ひの山の中程まで行つた時が夕飯の支度をする時であります。

曇った日は時計が狂ふ

○わすれな草　てる子

春雨の夕、妹が小さきひつぎを送りての歸るさふと垣根にるり色の忘れな草を見つけぬ。なつかしさの餘り堀りて小鉢に植ゑ吾が机を放たぬに此頃森の彼處に可愛き新星の出でゝ互に匂ひ合ふ。

詩人より

○失策　大阪府　寺部君子

私は何日も、お仕事を仕乍、投書する文章を考へ升、恁うすると、手は絶えず動いてそして心に好きな事を思ふて折り升から、愉快にお仕事が出來、時間の經濟でも有り、實に兩德と思ふて居りました。今日も例の考へ乍、お羽織を縫ふて居りましたが、出來上つて疊まうとすると、お袖の紋が前に附いて有りました。

傑作成る

○羽織の紐　水戸市　千石さだえ

今朝の風の冷たいこと、綿入が欲しい、それ故羽織を重ねたのですけれど、オヤ紐がない庭下駄にがさと障る物がある、みればすゝきでした、ひと節ぬいて「ち」に通しそつと俛首てみた。

枡文式

○夜の空　京城　ゆかり

理科で習つた北極星を見やうと思つて外へ出た、夏の夜おそく。暗の空を仰いで見ると天國の山野を縫つて居る樣な、ぼんやりとした一筋の光線をみとめた、もう天の川が、あらはれたのでしようか。

紅葉の句に星既に秋の眼を開きけり

○女子文壇を見て　茨城縣　今泉磯千鳥

「美文」はハイカラ女とせば「新體詩」はハイカラ男たるべく「お伽噺」は七八歳の小兒にして「小說」は悲慘なる境遇に遭遇せる女の如く人をして涙を催さしむ。又「俳句」は老人の如く「和歌」は花盛の少女の如く「日記文」は商家の番頭の如し。「實用文」は都に修業せる小僧にして「滑稽談」は無邪氣なる小兒「新歌謠」は山野に草苅る田舍の少女。

おもしろい見立

○薔薇　在米　合屋鮫子

森の入口に咲き亂れた薔薇の下に六つ許りの女の子が座つて居る其美しき花を母樣に見せたいのでせう、だが花は美しく此處に咲て居るのを望むてせう見つめて居た子は柔き草の上に眠つてしまひました、風は花片を子供の頬へ吹き散しました。

さすがは舶來の短文

○霧の中道　鹿兒島縣　山下敏枝

朝露の中にとて案内者に導かれて爪先上に差掛ると草刈る小女の鄙歌が聞へ出したが段々と高きに登るに從ひ霧雨が降つて來た模樣の樣な尾花女郎花と維て包んだ樣な赤松林がまるで土佐繪の樣に見へた妹は面白がつて先きに行つてハンカチーフを打振つて居た

斯う云ふ風に書いてあると女でも山に登りたくなるてせう

○向上心　本郷　千とせ

沒書にされゝばどんな隅にてもいゝからと思ひ、隅に出ればせめて秀逸に、秀逸ならば入賞仕度く成る、もし五等にても撰ばれゝば、二等か三等が取れぬのを殘念に思ひ升が――あながち私計りでもムい升まい。

一等になれば死んでも死なれないと云ふ方があります

そのまゝ　攝津豐子



○妹の髮結　露荻子

毎朝、妹の髮を結ふて遣ります毎にお稚兒にだの桃割にだのとそれは、種々の御注文、それを短いからと云へば御機嫌が惡ひのでとんぼのとまつた樣な工合に、まげつけてやりますと、それでも御身分は大得意で直ぐ發表にと駈け出しますよ。

發表はよかつた

○桑畑　廣島縣　和田靜枝

籠を脊に手甲脚袢を着け手拭冠つて朝霧深う罩めた桑畑に入ると朝の生氣はヒヤリと身に泌みて露に濡れた桑の葉はスーと頰を撫でる薄い彩羽の胡蝶は美しい夢を破られて翩々と舞揚りその儘つぎの葉へ。

葉末の白玉はホロ、と雫して主なき根株の蜘蛛の巣へ懸て居る。

上手な人から歌ひ出す桑摘唄

○歩む時　山城　幸子

私が道あゆむ時に、氣をつけるのが先づ、自分と同性同名の表札、それからゆき合ふ御婦人を、女子文壇の愛讀者でないかと、まさか御老人をそうと思ひませんが。此樣な事かんがへてゆくので、時には人とつきあたる事が、あるのです。

つきあたつたら御免蒙りて

○女の恥　栃木縣　惠　女

他所樣へ上りまして髮の毛や糸屑のちらばつてゐる程氣もちのわるい事はありません、それですから女は、よく〳〵注意しなければなりません。

分つてゐてちらかす人が多い

○今　京城　つた女

母さまと妹と宮ちやんは茶の間て繪合せをして姉さまはそのそばて編物をして居られます私は次の間て此文を書いて居ります二階ては父さまと兄さまが月を見ながら話して居られます、大聲て算術の答を云ひ合つて通りすぎたのは大方夜學校の生徒てせう。

京城らしい「今」を聞きたい

○製茶　島根　勢津子

私方は煎茶は手前で製造致しますがごく手輕な方法ですからお話致しませう、まづ新芽を摘みましたならばよい加げんに蒸してよく手で縒りますそしてこれを一旦澁紙の上にひろげて乾かして後ほいろにかけますかくして造るのでございますがそれても可成結構なお茶だと皆樣はほめ下さいます。

かなりは失敬じやありませんか

○棕梠　松江

暑い國に生れ乍ら、何故か吾家の背戸に植ゑられた。棕梠の一本、倉普請の邪魔になるとて堀りかえされ樣としたのを、私が漸く取り止めた敷石の傍、廣い葉が繁り合て雨降る度に、邪魔するけれど。

○蠶　山梨縣　古屋しげ子

暖爐だの炭だのと云つて念にも念を入れて飼つた蠶やつとの事て一昨日上がりました、心見に今日繭のふたを取つて見ますと、眞白、恰ど白粉を玉にでもしてころがした樣、今年もお夏着が買へるか知ら。

○雨の日　備後　井上年子

皆さんは屹度雨の日はお嫌てせう。それに私は妙に此雨の日が好きなのです。最樂しい日なのです。それはいつも晴天には仕事が忙しくつて、雜誌等ろく〳〵讀まれませんが、雨の日だけは一日しんみりと讀書する事が出來るからです。

○色彩の美　上總　さゆり子

姉樣が京土産の秋草模樣のお絽の帶がたまらない程氣に入てたのに、從姉の龍樣が華麗な縮緬のお召に、赤地絽繻珍の帶を締めて、仰入る、と又如何しても、淡泊したのより紅の勝たのが、美しいと思ふ。あゝ一體私は、如何樣な色彩に憧憬てゐるのでせう。

○歌　信濃　駒澤ひろ子

妾は歌が一番好きなのです。女子文壇が來ますと直ぐ與謝野晶子先生選の歌のある所を擴げまして、一首一首に感心して讀みます。

○口繪　三河　天野清子

私は毎月文壇が參りますと先づ一番先に口繪を取つてそして眼を一通り通します前に取つた口繪を一年を一册として本にとぢます丁度今年二册と入枚になりました私は何より是が大好てすから文壇のある限り此樣する心組です。

○牛げの日　末廣女

去年は、牛げに入つた日から蟬の聲聞いた、今年節が後くれたのかなかなない。屋敷中グル〳〵り見廻たが、梅や枇杷の實位な物。早秋姫樣が天降れば、栗、柿、まだ澤山好きな土產貰はれるがー。とつぶやいた。が熟考ると、終に冷い風をー。あゝ矢張初蟬の聲まつ頃は増しか知ら。

○薙刀體操　臺灣　川上みや子

或朝の事私は箒を持つた儘大好きな薙刀體操をして居りますと此が母樣の目にふれまして突然頰を打たれ ました其故まけず嫌ひの私はすぐ「朝今日も一つ打たれていたい哉」と詠じますと此を賞めては下さらないて又も一つ打たれましたけれども母樣の眼には笑を…。

○邪推　麹町　横關春子

兄樣と入谷の朝顏見に行つた歸り、根津權現境内を散歩して居ると、五六人の書生が私共二人を見て、何やら囁いて傍笑つて居る。『馬鹿つ貸樣娘の心が穢いからそう見へるんだ』と兄樣は小聲て呟かれた、妾も眞實に腹が立つてしやうがなかつたわ。

○たのしき日曜　麹町　多美子

妾は日曜毎に、兄の下宿を訪れるのが一番の樂しみてす。今日もいつものやうに、電車て行つて見ると、今しも醫歷の角帽を被つて、外出せんとして居た所てした、が妾が行つたので、思ひ止まつて、歸省を共にする約束などし、夕方まて話して、樂しく一緒に夕ご飯を食べてこの日は別れました。

○青い頭　徳島縣　西野ひさし

五月雨の窓のもとて、私が女子文壇を見て居ますと、不意に後から、可愛い手て目隱しする者お有りますから、妹かしら弟かしらと思うて「誰なのいたづらをするのは」と云ふと手を放して逃出したのを見ましたら、今朝刈た青い頭の末雄てした。

○山茶花　京橋　朝倉えみ子

菅笠斜めに夕の月を賞しつゝ今しも歸り來る山番の伐助爺、肩にせし山茶花はやもめ暮しの誰への土產か、『爺や其花誰にやるの!!!』と脊戸からなかば顏出して問へば爺はニコ〳〵『御娘樣によ』

○想像　茨城縣　若松とり子

靜枝さんと云ふ名を聞いた時好奇にも想像が動き出しました色白な細面の表情に富だ目許に愛嬌を見せて白百合をかざした黑髮！と斯う小說の女主人公の如に描きましたが實物とは大反對て想像と云ふ繪師は噓と筆を投げ出しました。

○朝顏　福井縣　吉田梅子

郵便と配達人の投げ込み行きし一通の手紙、取上げて姿を見れば、照子と記されてあるこは故郷の妹、封を切ればハラ〳〵と落つる朝顏の押花、手紙の文句は、姉さん朝顏が咲きました。

○妾の家　下野　下河部なみ子

妾の家は川の畔てす。冬は川風寒いてすがこれからは涼しくつて〳〵避暑なんかに行かなくつてもよいのてす。水鷄がなく、杜鵑がなく、螢が飛ぶ。晶子先生なんかお出になりますと歌の五十や百はじき出來ます。

○夢　盛岡市　節子

昨晚夢てけふのテニス會を見た夢ては我が組の大勝利てあつたが今日になつてみると事實は大敗に歸したあゝ今は昔と哭つて夢も的にならぬ世とはなつたかと再び眼を覺ました。

○學校での正午　愛知縣　坂野宮居

ドーンと、師團からの、正午の合圖が、先生の講話に、夢中になつて居た、我等一同の耳を驚すと、忽廊下の鐘が、カン〳〵同時に、ヒーと響

くのは、工業學校の烟突、ボーと吹出すのは、紡績會社の烟突、私は此時程樂しみな響はありませぬ。

○洪水

常陸　大塚せん子

私の地方では、七月になると、每年十日位つゞいて大雨が降ります、ですから利根川があふれて一面に湖と化してしまひます、そして家や倉や若い娘などが水と共に流れて來て、それはそれは、見るに忍びない慘狀を呈します。

○色

京都　安田初子

夜が黑色なれば、晝が白色、朝が紫色、で日中が紅色、夕方がクリーム。

○初秋の伊香保

上毛　元子

避暑客はボツ〳〵去つて日每に淋い山島の微けき聲が聞える、昨夜迄居た流しの三味が今宵は聞えぬ。夕方湯元へ散步した時日ぐらしの外にこほろぎが鳴いてゐた。明日は歸ると隣室の人も云つて居る。私も遠からず去るのだと思ふと湯瀧の音がなつかしい。

○學校の窓

大阪　西戶政江

北の窓こそ汚ない松島の遊廓を見下ろしますけれども西の窓を開けばつひ下の築港道路を隔てゝ遠く廣々とした野原、秋は紅、青の草花美はしく秋は黃金の波を漂はす、玩具のやうな電車は絕えず往來して居り市中とは云へ町はずれですから空氣は淸く樂しく通學して居るのでありまます。

○霞ケ浦の島

茨城縣　宮本楓子

私の村は周圍が湖で、三百戶許りある島です、字は五つに分けてあつて皆な百姓、中には漁師もあります、近頃になつては、養蠶も澤山やります、山もあれば野原もあり田草取りなどをして、午前辨當を喰べて居ると、土浦行きの汽船が通り、白帆揃る帆船も通り、中々よい村です。

○何れが幸福

青森縣　西村みや

同級生の山野なか子さんは、中學助教諭に嫁かれて、自分は敎育家の妻になつたとて滿足してゐらつしやるし、又花井濟子さんは、財產家で、門閥家で、醫學士で一等軍醫で、私らの目からは羨しい地位に嫁かれながら、始終煩悶してゐられる何れが幸福でせう。

○月見草

埼玉縣　露草

月の色に山の端が、あかるんでくる頃、表へ出て、むせぶ様な、川瀨の音をきゝながら、月見草の中に彳んでゐると、澤山の蕾は一時に、パツパツと、御空の星の生れる様に黃金の花を開きます、涼しい夕風に露を帶びた花の香が漂うて、月の色を甘涵浴いた様な、椒川の流から は河鹿の聲が聞え出しました。

○好き

安房　櫻子

ピヤノよりは、箏が好き、ダンスよりは長刀が好き、星と菫よりは武士と櫻が好き、新派劇よりは舊派劇が好き洋裝より振り袖姿の好きな私は「日本男子に二言は御座らぬ」と仰せらるゝ様な殿方が好きです。

○苺

北上川岸　沼倉富久子

家の所有地に苗苺はそれは〳〵澤山あります。養蠶過には食るによいので、每年取に行きます。私はこの苺を慰勞の苺と申して居りますの。

○里の字

德島市　河里子

謹上てお目にかゝつた芳名をあげて見ませう里子君は申すに及ばす山里の君小里の君下里の君千里子君幽霞里子君鹿發里子君發里子君野里子君最後に妾はこんなふう河里。

○花園

名古屋　加藤薫子

白百合のつゝましやかな姿は先づ目立つて淸くばらの花はいかにも美を誇り顏スヰートピーメーの艷な姿横手にパンヂーの無邪氣なるも愛らしく欧突人草の燃ゆる様な紅いのが三輪咲き殘つて居て何んとなく人目をよせる以上は私の愛する花園の花です。

○五月雨

淡路　小泉さと子

しと〳〵と降る五月雨の佗しさに障子開くれば鮮かなりし山梔の花は色あせ果てぽとりと落ちぬ、小池の水鏡をやぶつてぽかりと頭あげし鯉は銀玉を殘して沈み行く雨滴薬園を打つ音高うて家の中靜である。

○草取る姉妹

和泉　藤原美代子

雨降る日である、二階で讀書して居ると野邊より好い聲の唄が絶えず聞へる、野は今田草取る最中である、ふと見ると窓の下に愛らしい姉妹が餘念なく苗の草を取つてゐる……どうか來る秋には多くの收穫がある樣にと祈りました。

○理想の色　山口縣　藤井よし子

春の日の夜明け時、東の空に棚引く紫の雲と、野に咲く菫の花と、裏の垣根に咲く桔梗の花とを、同じ器に入れて、朝な夕な眺めて見たいと思ひますが神樣は之れを許して下さいますだらうか?。

○乳母　南豐　藤の家瑠璃子

此頃からすこし不快で寢て居ましたら、田舍の乳母が私の好きなおはぎをこしらへて見舞にきました。そして昔の事を語るのですこんなに零落れても、昔を忘れずきてくれると思つたら涙がこぼれてなりません。

○嬉しさ　羽前　高橋たか

幾度投書しても沒書にばかりなつて信實に落膽山と失望山とが目前に築かれたのですなんとかして此二大山を碎かうと一生懸命で勉强致しました爲か末ながらも此度一首當選致しました。



井戶端會議　陸奥　立花とも

○磐梯山　福島縣　大原清子

妾は學校へ行くに二里も行かればなりません毎朝磐梯山を天文臺として雲がある時は傘を持つて行きます雲がない時はもたずに行くのです、然し秋になると必ず用心して行きます。

○夏の朝　福岡縣　石川けい

鶏の聲しづけき夜の大氣を破つて天つ宮には、オレンヂばらふんじ紫の雲々の往來も繁くやがて淡紅の彩雲より燦爛たる金矢銀矢は幾萬條とも限りなく射出された。

○不幸者　山口縣　國兼岩子

家は貧しく、身は愚、是といふ職業もなく何一つ藝も知らず、一日の生活に困る樣なものは我村にもたくさんある。私は、其樣不幸者を見る度毎に、何なりとも、惠まずには居られませぬ。

○水鏡　紅花

村境の橋を渡りながら、何氣なく流に顔を出すと、自分の顔が水に寫るニコリとすると、水面でも笑て居る首を傾けると又首を傾ける、何だか面白く成て、色々のまれをして見て居る内、後へ誰か來る氣配がしたので、急に恥しくなり見向もせず走て餘程來てから見返つたら、川向に犬の立て居るのが見えた。

○旅館　下野　黒須菊子

晩く着いた宇都宮白木や旅館給仕にでた十二三の少婢が。お盆を持つたまゝ、コクリ／＼とやつてゐる。あつらからう、家の君子ならもう寢た頃だ。

○口繪　函館　松子

私は女子文壇の一番初めにある口繪をとつて私の室にかざつて居ります只今四枚かざられあります此頃ことに今日のは美うございましたこれ

から幾年かの後に美しいのを澤山撰んで大きな額をこしらへ樣と思つて居ります。

○胡蝶　神戸市　遠藤とらの

莊周が胡蝶になつたのか、胡蝶が莊周になつたのか知りませぬが、この頃、當地で貴いな蝶に、大層毒の有るのを發見しました。見當り次第殺すことになりました。今まで、蝶よ花よ、と愛せられて居た蝶も、これでは、夢のやうな心地がしますでせう。

○手風琴　沼津　岩井美枝

私は此頃毎晩手風琴を引きますが、未だよく出來ないのに妹の房ちやんが、桃から生れたを引いて下さい、私が歌ひます、と申しますから、では引きましやうと、云ひますと合はないのも知らずに一生懸命になつて歌ひます、房ちやんの歌に合ふ樣になるのは何時頃でしやう。

○今日はまめ　近江　鈴木みえ子

朝上海のお友達から支那百景の寫眞と種々の繪葉書を澤山、越後の姉樣から久しぶりでお手紙を、又お晝頃に國から書留を、今又原町のお友達のお宅からお重箱を下さいました、開けて見たらお餅がいつぱい。

○二つの會　丹後　花の家露女

百戸にたらぬ村なれど、大成會、共進會の二つの會があります。大成會は青年、共進會は顔の會で、毎年數爭して杉檜など植ゑるのです。大低の深山の谷も、杉檜が大分のびました。八月頃には、下枝に行くのです。私等が死する時には、空つくやうになるでせう。

○開花　茨城縣　齋藤もと

花の開く瞬間を見た人は長者の暮しをするとお祖母樣からきゝましたので毎朝邸の蓮池の邊に立ちます、ポツと音がしますから目をやるともう開いて高い香を放つて居るのですもの中々見られません、が早起するのでいつも心地が清々して居ますの。

○よく似た字　大連市　林正

おや兄樣からだと思つて封を切ると、意外にも女子文壇社からでした宛名の林なんかは高商へ行つてらつしやる兄樣の字に其まゝです、此記者樣はお年も乾度兄樣位でせうと思ふと急になつかしくなりました。

○雨の我里　飛騨　むら子

にはかにふり來る烈しき夕立と共に霧は下りて四方の山も眼下の古川町も見えなくなつて恰どはてしなき大海原の如く、すぐ向ふの杉並木は恰も小島の如く薄墨でぼかした日本畫其まゝの盆景色。

○公平　鹿兒島　みゆき

字探し繪探し事の顧問は元より近頃はタイムスタンプといふ抽籤も有るけれどそれは世にも稀な運をもつた方々へ落札して如何しても公平を缺く樣に思はれる我女子文壇は何れも文の華想の奇采に卓絶したものをお作りの姉樣方が月桂冠をお頂きなさるのだ故是位上品に趣味ある公平な事は他にはないだらうと思ひ升。

○疏水　近江　婦貴子

大津から疏水船にのるとすぐ第一隧道です長さは二十二町二十間常に船頭の唄でうなつてゐますこゝを出ますと川は綠したゝる山の麓を縫ふて行くのです、川岸は誠に好い景色です、それから第二第三のとんねるを通つて京都へゆくのです。

○田舍の風俗　青森縣　山川露子

田舍の風俗は西洋のやうです、上の尖つた茅ぶきの家は似てませう、朝霧深いうちに起きて身仕度しパナリと云ふ帽子をかぶつた下から櫻色の頬はかゞやき、上手に馬にまたがり露ふみ分けて青葉の森へ行くなど何やらの繪にあるやうです。

○虹　新潟縣　原つねを

夕立も一時で霽れたので、一寸出て見ますと大きな日樣の御殿の影！榮代さん家の青葉の森から出て、川向の橫澤迄架いて、藏原さん所の土藏の白壁を七彩爛爛と染めてましたの。愛の家ぶ藏原さん所となら、繋がれて見たいと思ひましたわ。

○梅　雨　府下　あら　らぎ

私は梅雨時と言へばほんとにいや毎日毎日しとしと小雨が降つて家の中までしめつぽくそして畑では大切な小麥や大麥から芽がでてるなど百姓家では大變困ります。

○私の勉強時間　和歌山市　岡本小松

私は三度勉強間を移轉するのですよ最初は二階次は茶の間其次は涼しきはなれへ參りましたが「姉樣はおまへに室を上ると座部屋になる」と云つて追ひ出されましたから書物雜誌大風呂敷に入れてすたすたと二階へ運びました姉樣は「書生の移轉だ」と大笑ひ。

○梅　雨　伊豆　賤　子

濃緑淡緑の森々と繁茂つてる油繪に似た城山が刷毛ではいてゆく樣に段々と薄くらく霧立ちこめて、卯の花がほの白う搖ぐ景色を眺めて居ると、若葉の香を含んだ涼風が軟く頬を掠てる心地のよさ、厭なものと許り思つてた梅雨が僕に嬉しくなりました。

○河　鹿　京都　綿引　眞砂

此間嵯峨で獲たからと河鹿二疋貰ひました始め一寸も鳴かないので笛を買て來るやら騒ぎして漸と一週間目に鳴き出したのですが此頃では工場の氣笛豆腐屋のラッパ小供の口笛何でも鳴物を聞くと直ぐ笑ひ聲て鳴き出す樣になりました



妹　伊勢　河村富子

○我が里　三河　宮瀬くら子

夏になりますと皆さんが海水浴に見えます白砂青松連りて濱打ちぎはもいと清く夏も冬とぞ思はるゝ海の眺めは瀧耶と歌はれたる如く清々として心地が宜しいから知らず〳〵眠氣がさしますと床しい床しい響の音は松風を傳ふて幽かに聞えて來ますと磯打つ濱は鼓の音と思はれ實に堪へられない愉快な感じます。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は丙種の規定に據る。

天

一船は涼しき詩人歌人かな　相模國横須賀港深田九三ノ一　渡邊八重子

地

夕涼み芝生に琵琶を奏でけり　千葉縣山武郡成東町成東　三橋愛子

人

大雨の雲を流して夏の月　栃木縣大田原町　黒須菊子

秀逸

大瀧にあびせかくるや青嵐　千葉縣　松ケ枝雪子
黒々と蚊柱立ちぬ碑の表　日本橋　清風子
蛙ないて雨雲低し南瓜棚　越後　佐藤浪子
杜鵑聞くや此夜の木挽小屋　日本橋　田代房尾

馬白き牧場の月や子規　神戸　樋口元和
時鳥啼くや五月の山宿り　茨城縣　金塚仁子
河骨や夏を濁りし神の池　三河　鈴木春子
水晶の箸も涼しや鮎の膳　長野縣　伊藤登志子
老僧の力自慢や菊畑　阿波　芳野
蝙蝠や岩立つ浦のかゝり舟　佐渡　前田みどり
涼しさや笛の音遠く峰の月　無名子

水番の篝火涼し草の中　千葉縣　松ケ枝浜江
針やめて新茶の席に並びけり　越後　藤原信子
望の夜に歌よむ人の花むしろ　大阪市　木田千代子
灯ともして江に入る舟の時雨けり　京都　オ木みさを
五月雨の晴間に洗ふ衣かな　篠原皆子
取出す袋の琵琶に風薫る　はぎのあめ
猿橋の橋の高さや風薫る　羽前　紅葉子
ふりむけば宮居に近くほとゝぎす　京都　花守
薄絹の團扇なつかし夏の夕　澁谷　よし子
春の風草の匂ひとなりにけり　静岡縣　杉山じゆん
窓の月をひき忘れたり蚊帳の月　山口縣　遠山靜枝子
灸せよと母の文なり秋のかぜ　茨城縣　宮本市子
手枕や雨に遠音の不如歸　豐前　藤の家瑠璃子
きれぎれに雨の中から田植歌　熊本縣　高根ちか
琴の音のほのかに漏るゝ新樹哉　佐賀市　田中美枝子
月を見て秋に近よる心哉　香川縣　みどり
日盛の路に影あり石地藏　薩摩　竹田白梅
糸などとる少女の歌やきりぎりす　武藏　榎本秋子

夏の夜を田毎の月に涼みけり
馬もかほよこしてかへる田植かな
短夜の寢覺の耳や鵆の聲
雨晴れて白き虫とよ草紅葉
夕ぐれや蝉ひと聲も秋となる
岩苔に冷き露や夏木立
松多き湖北の里や星祭り
川邊に里の子遊ぶ柳かな
學童の麥笛吹きて日は暮れぬ
ゆあがりに笛の音聞きぬ夏の宵
夏の月笛吹君の優づたひ
我が顔をなぐさむる如月の照る
三千の祭匂ふ春の月
涼しさや風に吹かるゝ洗髮
時鳥鳴いて通れよ屋敷町
狩り殘る小むぎ畠や畜の子
里々の稻田見て行く舟路かな
野の空や見ゆるがごとき雁の聲
にはとりの聲もねむたしはるの朝
燈を發す白きテントや草の月
葉越し月車引きゆく童哉
栗田口窯の烟や風薫る
青嵐毛虫落ち散る寺の椽
春の夜の夢に桃太郎と生れけり
涼しさや青葉の上に峠茶屋
螢火の燃ゆる思ひや夏の夢
物縫ふて人をまつ日や春の逝く
氷屋の實子の笠に夕日哉
暗きより暗きに飛べる螢かな
涼しさや蝉の飛び込む桐の窓

横濱 梢楽きみ子
羽前 とく子
兒玉星菜
廣島縣 萩村
千葉縣 桃花女史
薩摩 山下男子
安藝 溶女史
下野 瀧澤秀子
茨城 天谷雅子
豐前 安岐子
德島縣 西野花菱
宮城縣 沼倉秋月
山形縣 長岡よし子
高知 淺田治子
四谷 今川富久子
はん橋 高桑紅葉子
和歌山 榎本りん
遠江 原木きせ子
羽前 吾妻仙女
長野縣 瀧澤みずえ
長門 田中はな子
丹後 高柴小靜
神戸市 山本幽霞里
福井縣 吉田梅子
紀伊 木下採子
栃木縣 堀江みよ子
奈良市 清水露軒女
山口縣 よし子
静岡縣 上原露子
羽前 高橋たか
豐後 阿南しのぶ

ほし竿に忘れ浴衣や夏の月
初ほたるうれしき闇となりにけり
夏の月浴衣を誇る納涼かな
涼しさや金波くだけて鮎の飛ぶ
名月の風にゆらるゝ糸瓜哉
破垣を覗けば菊のさかりかな
介の裏の使はぬ井戸も晒らしけり
松の根を枕に人の夕涼み
夕涼み吾背子ならん夏帽子
風薫る堂の壁繪の天女かな
氷屋の紅提燈や松涼し
山住や夕餉を炊ぐ苔清水
靈山の露に濡れたる若葉哉
螢とぶ河原の院の小雨かな
稻妻の光に白し君の髯
家近く鹿の聲する月夜かな
初時雨茶に寄り合ふや客二人
嶺一つ京をへだてゝほとゝぎす
新[illegible]つ信濃に月の客となり
欄干や遠夕立の返し風
松原や唯汐風とせみの聲
鍋洗ひ足洗ひ水の温みけり
有明の磯に牛追ふ少女かな
漕ぎ出て沖て見にけり夏の月
花つまん其白露のおけるまゝ
五月雨や靜にゆらぐ蝸牛
大佛の鼻に藪蚊の飛び出てぬ
風涼しく夕日輝く稻田かな
御簾あげて三五の月を拜しけり
入洲は月に限なし時鳥
千鳥立つ海の嵐や一とくらみ

平山園子
山口縣 篠原あき
伊賀 矢佐諸子
岐阜縣 中村澤子
廣島市 山本文子
信濃 長野菊子
武藏 石塚たけ
千葉縣 廣田やす子
武藏 石塚みさ
近江 大角うた子
羽前 星まり子
茨城縣 薫女史
上野 小林いし子
越後 河島和歌波女
愛知縣 永田邦鶴子
長門 藤井禎子
東京市 岡ゆかり子
駿河 天野きん
相模 鍋田美代子
大阪市 木村花子
飛驒 むら女
新潟縣 一葉子
旭川町 小林喜代乃子
越智郡 佐野谷枝
信濃 摩波子
名古屋 胡てふ
下總 越川湖山女
和泉 高橋雪子
常陸 酒葉しづく
東京 蕭雨子
安房 鈴木勝子

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハがき文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以内用紙も締切日も前同斷、懸賞は乙種規定に據る。

天　○京への途にて

芝區中門前一丁目十一番地　長谷川静枝

三井寺を出でしは四時頃にても候ひしか、折からに夏の夕の空うちしぐれ來て夕立もよひとは相成り候、あはれかゝる日こそまことに都の空のこひしくは候へ、うらぶれの身には一雨にかざす傘だにあらず候よ。心も心ならずいそぎゆきつるほどにやうやく疏水のほとりに辿り着き候、琵琶湖をのぞめば霧がくれにゆく舟の帆の淡きが二つ三つ、やがてはうすれゆくわが運命にも似て何ぼう悲しく候ひしぞ、夏の日の暮れをそき湖の上にはあはれいさり火の影すら見えず候。なまぬるき一陣の風頬うつよと見るまにつぶての如き大雨の降りいで候へばいそぎ疏水を下る舟に乗り移り候、苫をおろせる中にひとり端然と坐して流るゝ水の音に耳を傾け居れば云ひ知らぬ哀愁の胸を衝きて涙は頬を傳うてながるゝにわれから大人氣なしとは知りぬれどさて旅の子の事につけ憂き思ひ出の種となるこそ心弱き限りに候へ。

隧道を出づれば空は何時しか拭うが如く晴れ渡りて、岸邊の草に置く露のすが〳〵しきに水勢一しほ早まりて、舟はみる〳〵第二隧道の闇に進み入り候。

京へ着きなば三條の假の旅枕、憂き思ひ寢の夜毎にしぼる涙のみしげからむと今より案じられ候、まづは京への途すがら。愚痴めきたる詞のかず〳〵に御耳を汚しまつりしこそ本意なき事に候へ。かしこ。

（評）さすが日頃より此の道の御嗜ふかき君の洗ひつるやうにも美しきかな「琵琶湖をのぞめば」殊にあはれふかし。

地　○野の少女より

丹後國宮津町字魚屋一〇四　神田春子

午後の二時頃でございます、裏の桃畑で桃の果に一つ一つ袋を着せて居ますと、そつと忍んで來た優しい足音、ハッと思ふ間もなく、妾の後から小さい双手で眼を隠した人がございます。

『誰？あてゝ御覧よ―』と可愛い聲お隣の美代ちやん

いと知れて居ますが、鳥渡考へる眞似をしましてね「さあ淑子さん？、秀子さん？」と申しますと、可愛い人は眼から手をはなして、今度は前から抱きつきながら、「ホヽヽ、可笑しいのね。妾よ姉ちやん」と妾をなつかしそうに見上げるのでございます、其可愛い顔ー、妾は思はず抱きしめました。妾のこの頃の生活は、こうした樂しいもので御座います、たまには都のお便りもおもらし下さいまし。

さようなら。

（評）好箇の寫生文、何たる愛らしさぞ何たる無邪氣さぞ人の世の樂しさはげに茲にありさるにても虛榮に走る都の生活こそうたてき者にはあれ。



赤帽

愛知縣 近藤八重

[人] ○避暑地より

品川 靜江

文樣お暑う御座います事ね、叔母樣初め皆樣お變りも御座いませんか、此方は丈夫ですから御安心下さい。餘りお便りが無いのでもう鵠沼の澄をお忘れになつたのかしらと思ひました、何故お在てになりませんの、八月に入れば屹度といつかの御約束てしたのに、もう今日て五日毎日停車場迄お百度とは餘りおひどいてせう此の手紙が着き次第にいらつしやいましな。何卒叔母樣も小夜樣も御一所に、私一人て毎日健次や秀兄樣にいじめられて居ますから、今度こそ三人て敵うちをしませうね。昨夕も濱て涼んで居ましたら秀兄樣が側て、「黑いなあ實に黑いなあ」つて私が「何」と聞きましたら、あのね、印度人に非らず、としておかないと間違へると云ふのさ……」つて私の顏見てクス〳〵、其人の惡さ加減母樣に云ひつけて笑はれましたの、其の僻片瀬行のお使の時許り何時も「澄

ちやん〱と大もてゞすのよ、おまん頭と云へば二三日前お友達が在らしたので、お茶菓子に出した所殘ると思つたのを皆ペロリ戴いてしまつて、遊びつかれて歸つた健次に大變怒られ、蟬取を手傳ふとか何とか一生懸命御氣嫌とつて居ましたが遂々乳母やが片瀨迄再度のお使者に立つて仲直りしました。こんな事して毎日過してますのよ、泣いたり笑つたり、文樣も屹度お在て下さいましな、お好きな鯵はつなが切れる程かゝりますの小夜樣に櫻貝も大分とつて御座いますから、ねう明晩のお迎へにお百度詣りは御免して下さいましよ三人て參りますのですもの。

夕方藤澤におつきになつて、先づお眼に止まる人待ち顔の海水帽三つ、帯許り赤く目だつ田舎娘を其れとお推し下さいませ。さよなら。

（評）避暑中の清興寫し得て面白しかくては文樣も小夜樣も行き給はでは叶ふまじや。

秀逸

○都より鄙へ　　栃木縣　草方華子

三春の行樂夢の如く過ぎ去りて、青葉に訪づるゝ朝風夕風、さても心地よき夏と相なり候かな。

御わたりには定めて、夕月に鳴く蜀魂の聲しきりなるとと察し申候。

隣家の甍に峙つ雲の峯を眺め乍ら、日毎机に倚りゐて筆紙に親しむ妾、只無意識に苦しき胸の思ひを書き續くるばかりに候。

實に都の夏は面白きものにはこれなく候よ。

桔梗は咲き初め候や。紫陽花は開き候や、夕立一しきり降りやみて、葡萄の滴に映る夕づゝの影、いかに美しく候はんと羨しくのみ存じ居り候。

昨日夕べたゞ一人寓を出でゝ、久しぶりにて不忍池畔を漫ろ歩きいたし候、蓮の浮葉卷葉を渡る夜風に、楚々として堤を辿る白衣の人影、宛然夢の如くに候ひし、美しき泥中の花は未だに候。

鄙の自然美に憧憬るゝ妾は、とある木の根に腰を下ろして、せめてもと其處に長き默思にふけり申候。

あはれ鄙の夏景色の二つ三つたび候へ。かしこ。

（評）詩趣溢れたり句節にして意長く凡筆にあらず。

○避暑地より　　靜岡縣　天野きん

お暑くなつたではありませんかお變りはありませんか稷子さま私この一日から避暑のためこゝへ參つてゐるのですよ。別莊とは譯がちがつて穢いとつたらお話になりませんの、けれど、嬉しいことには前は十歩ばかりで清見潟です見渡す限り白砂青松寔に畵のやう

た所です。殊に朝早く寝衣のまゝ太陽のきら〳〵と昇る時分素足になつて眞砂の上を驅けて歩くのは何んともいへない心持ですよ。午は海水しましたり、漁師の地曳網を見ましたり致すのです。時々舟をすゝめられますが何んとなくこわくつて乗れません。それから午後はいつも松の枝から枝へハンモックを釣るのです。磯の松風に機嫌とられながら鷗のやうな沖の白帆をかぞへてゐますといつからうと〳〵と睡つて了ふんですよ夜の海はまた格別です。まるで油でも流し込んだやうにその中を漁舟が細い灯をつけながらエンヤ〳〵と欵乃唄つてゐます抔私も一生の中一度でもあんな身の上になつてみたいと思ひましたのオホヽヽ全くですよどんなにいゝ心持なんでせう。月でものぼりますと見渡すかぎりきら〳〵とひかつて恰度金襴でも敷きつめたやうです。

綾子さま夏は海に限りますよ自然海岸の清い空氣にあたりますと健康にもよろしいと思ひます私も大變氣分がこゝろよくなりました。只今は弟と婆やと都合三人きりですいかゞですか御閑でしたなら是非お出て下さいましその代り何もおかまひ申しません。お弟さんも海がお好きですからお伴れ下さい弟も寂しがつてゐます。どうぞ〳〵御出の程を指折つて待つてゐますよ。

（評）情景よく寫されたり優しき筆よ。

○薔薇にそへて

上毛　喜代子

ふりつゞく五月雨に心もしめりがちに侍るを、いかゞこの頃をおくらせ給ふにか。御樣子承らまほしう存じ候、さて兩三日前より園の薔薇咲きそめ申し候、昨日師の君より薔薇は、西洋の國々にてめではやし候のみならず、我が國にても、古くより賞し、曾丹集にも「一垣根のうばら花さきにけり」など見へ候よし承り候まゝ今朝しも少しの時間を得雨にぬれたるまゝを一枝手折りて御目にかけ參らせ候。その刺のこちたきは香の清きにゆるしやり給ひめで給はゞうれしかるべく、尙ほこれをしるべに、園に殘りたるをも、尋ねきたまはゞ、こよなき花の面目のみか、あるじの喜びは、如何ばかりにか候はん。あなかしこ。

（評）きび〳〵しくも樂しき御雅のおとよオすぐれ給へる御人がらさへ見ゆるやうなり。

○舞坂より

靜岡市　根岸良子

遠州洋の荒波寄する舞坂の海岸より一筆お便り申上げ候。夕日は今し、天地限りなき茫莫たる水や空なる、大海原の彼方に沈まんとする處にて、吹き來る濱風に磯馴松の、颯々として囁くも、何となく夏の夕べとは云へ、心淋しく候。

暫し、海面は、夕榮したオレンヂ色に染められた空に反射されて、金波靜かに躍り、夕凪する紺碧の海水は

音もやさしう足下の白砂を洗ひ居り候。遙か、館山寺の邊りなるべし、最早夕靄に包まれ中より、暮鐘、一杵、二杵、又一杵、韻々として靜かなる夕凪の海面、湖面を辷つて、我が立てる耳に響き候。蝙蝠二三羽、我が頭上をひら／＼と飛び居り候。ぎーと、櫓の音して、片帆下したる漁船一隻、夕凪する油の樣な海面を靜かに、夕餉たく煙ならんか、縷々とした彼方を指して進み行き候、人も舟も、ぼうとして、只薄黑きのみに候。

紺碧の、浪の間に／＼、小がに幾つともなく、ちよろちよろと走り居り候。二ッ三ッ桃色ハンケチに包みて、宿に待ち居る幼弟に持ち歸らんと、今松風の音を背後に致し候。

今し、七日ばかりの新月海上に浮び出て候處なり。かしこ。

――六月十三日夕

（評）この夕、この濱にこの美しき自然に恍惚たりけむ君が姿もやがて共に畫中のもの。

○上京せし妹に　　薩摩　みゆき

この程は細々との御文父上樣共に拜見致し候仰せの如く兎角欝陶敷空もやうに候へ共御障りもなう御通學近頃は大分土地にも馴れ心易きお友達もでき候由まづまづ嬉しく存じ上候お前樣ご出發後父上樣もはや牛馬にも踏まるまじき成人の毬手放したりとて何の心掛りもなき筈なれど年月手許に置馴れし故かいたう淋しう覺ゆとて聊お弱りの御樣子なりしも此頃は元のお元氣にお返りなされ其他は斯くと文し參らせむ程の事もなく同じき朝夕をくり返し居り候今更申迄もなき事乍ら毋樣御命日には一日お精進御守なさるべくお友達はよくよく撰びて御交りあるべく候餘りに馴すぎて禮を失はぬ樣又長の月日の中に面白からぬ事の起り候ともかまへて穩ならぬ顏色などなさるまじく候田舍のぞんざいなる口のきゝ樣荒々しき立居ふるまひはかたくお愼みなされてどこ迄も女は女らしく和らかにしてなつかしく犯し難き處ある樣御心掛けあり度き者に候衣服髮飾も派手にお美事なるは都の孃樣方にこそふさわしけれ山ふところに育ちしお前樣に巾廣のリボンも可笑かるべく候へば徒らに人樣のまね等なさるまじくほどほどの御たしなみに願はしう候夜深し朝寢生水は必ず嚴禁なされて寶丹は机の引出に缺かさぬ程買おかれ度候とやかく申内に學期試驗も近づき候べし隨分しつかり御勵みの上目ざましき御成績念じ上候時節柄折角ご自愛願上候、かしこ。

（評）微細なる事にまで心添へらるゝ深き情のほど紙面に溢れたり。

空蟬の蛻のみ。秋もやう〱ふかうなりぬるまゝに、ありし昔のことども思ひ出でられて、そゞろ無限の感に打たれ獨涙をかこつもいくそたびに候ぞ。せめて一度は、御伺ひも致さんと思ひ居り候ひしも、かく穢れし身の、何となくもどかしく思はれて、御疎遠に打ち過ぎ候を哀れお察し給ひてよ。書きたき事は胸に滿ち溢れ候も、いざ書かんとすれば心みだれて、筆の運びも意に任せねば、これにて書き止め申し候。失禮ながら何卒御兄上様に「永劫にお忘れは致しません。」とだけ御傳へ下されたく念じ上げ參せ候になん、かしこ。（くに子）

（評）かゝる時の心の内や思ふに千萬無量なるべし此筆未だその心を寫しつくすには足れりとせざれどさすがにあはれにきこゆ。



うしろ姿　常陸　静子

○「昨日の義姉へ」の返し

呑眞粧　福西田鶴子

刎雁の懐かしき御玉章いとうれしく、くりかへし〲拝し參らせ候。夢の世とはいへ、あまりつれなき運命に候もの哉。昨日は東今日は西、泣きの涙にお別れ申候ひしも、早や二年の昔となりぬるか、さるにても、みやさしき御許様の御心根よ。など、御両親はじめ御許様御兄妹をばお恨み申すべき、かく成り果てつるも皆妾の罪にて候、許させ給ひてよ優しの御許様。

妾の今の身の上、どなたに御聞き遊ばされ候にや、身内の者に强ひらるゝまゝ、詮方なくて、貞操の美德もどこへやら……何の面目ありて御許様御兄妹におもふかせ參らすべきかは。今は只慚愧の痛蔓もて、いたく〲、良心を責められ候事よ、されど魂は遠く御許様御兄妹の上に逍遥ひて、委ぬるは只

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は丙種送呈



【天】○　奈良縣吉野郡賀名生村中窟方　よしみ

何も思はず作つた詩がやがて我身の上に來る

悲しいことか嬉しいことか

【地】○　五日市町　並木蝶子

降られ降られて日の顏見ずに散つて不愍な栗の花

花とも見られずに

【人】○　日本橋區小網町仲三太田内　田代房尾

野薔薇可愛さ唇あてゝ散らした私の深い罪

只これだけの意味として見るべし

【秀逸】

○　下野　手塚妙香

私のお家は町てのはづれいつも聞けます田植歌

○　常陸　須崎せい子

見やれ筑波に笠きる時は常陸平に雨が降る

○　岐阜縣　加藤芳子

燕ゆくならお土產おもち故郷に留守居の父母へ

○　若狭　山田小濱

龍宮殿から緋駒に乘つて使來る樣に湖よする

○　德島縣　西野ひさし

私の姉さん村ての美人嫁にくれよと十五人

○　大阪市　山内溪子

月が照り込む百合咲く窓に髪の香りを風が吹く

○　山城　幸女

止めて見たいがまだ暮れるまで一針なりとも縫ひませう

○　長野市　前島胡蝶

私花なり眞白の百合に咲いて見たいよ谷陰に

○　信濃　駒澤みつ女

蝶々嬉しい蝶々になろよ夜は露草晝は花

○　駿河　澁澤あさじ

わたしやききたい年中絶えぬ水の流れの物語

○　苦樂子

小川向ふの少さな島を取りて見たいがにげて行く

○ 豐後 迷子

もえる阿蘇山絶えぬは煙西になびくと雨がふる

○ 高崎市 淸水泉花

可愛い百合子を御供につれて黄金の車で綠の傘て夏の男神が行幸する

○夏は涼しい太田の流れ一里上つて月が出た　廣島縣 國信操子

○露は天女が瓊の雫うけて見たいよ我が晝に　京城 ゆかり

○やまのみれからみおろしすれば あなた一面風がふく　陸前 尾花

○乘かけ馬にて土橋を渡る土橋越ゆれば隣村　磐城 齋藤こう

○月がうたふか靈峯の歌を涼しい風がもつてくる　鳥取縣 折桂蘭

○家の妹が無くした手まり花の陰から昨日出た　讃岐 みつ子

○私しや生れは地震の名所小さい地震は平氣です　岐阜縣 日野歌子

○直江津下りの小舟の竿に波間くだけて雪がちる　小諸 花かつら女

○汽車に汽船は皆出來たれどむれの航路はまだ出來ぬ　福島縣 白美女

○暑さまけする夏やせ人に見せてやりたい田草取り　千葉縣 三森ゆき

○水田三里を一株づゝに植ゑて二尺のすきもない　下總 すみ子

○肥後火の國信濃は温泉國境するのが火山みやく　信濃 瀧澤みずえ

○小石々々のあの夏川を見れば流もやせにそる　備後 岡秋野

○袂振り分け姉桃割れにさしたリボンも白と赤　福島縣 笠岡きの

○村で一番孝行な者は蠶飼ふ家のお花さん　京都 才木みさを

○佐田の岬は四國の伊豫よ霞て見へます目の前に　豐後 臘利子

○妾や十九で嫁入したが未だ母校が慕しい　若狹 早水その子

○姉さん時計を進めておくれ三時うたればひまが出ぬ　岐阜縣 山口鈴子

○姉がお琴で私やオルガンよ鳴るよ響くよ和洋樂　盛岡市 四月節子

○妾やお庭の躑躅がすきよ寫眞とる時そのそばに　宮城縣 沼倉秋月女

○可愛顏して手をうちながら鬼さんこつちと花のなか　茨城縣 中山道江

○夏はお庭に螢籠はいらぬ夜毎螢が來て照す　周防 宮美子

○夏の男神と若菜の姫が掛けた巧みの虹の橋　常陸 村野靜子

○しほ斷七日てふらした雨よぬれてうれしい田植うた　牛込 平塚白百合

○わたしや田舍で泣く子を育て都まさりの人にする　福井 中谷文子

○いまのひかりはふしぎのひかり天のほしやらほたるやら　磐城 尾股くら

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以內締切日は毎月十五日懸賞は円種。

天

○近眼　羽後　さゆり

兄は大變強い近眼です、去年の夏でしたか眞暗な晩、螢狩にまゐりました時に本町迄來ますと螢が低くゆつくりとんてきたので走て行つてや！としめましたらよその孃さんが小さい釜籠に入れてさげていらしつたのださうてす、孃樣はてわい！と聲を出してお泣きなさるし全く赤面の至りだつたと申して居ります。

地

○うるさいから　駿河庵原郡庵原村　天野きん子

小學教師「お父さんやお母さんがみなさんを學校によこしなさるのは何のためてすか」
生徒「家にゐるとうるさいからてあります」

人

○鐵面皮　岩手縣紫波郡古舘村　横澤きよ

末子「文子さんが私のことを鐵面だつて云ひますの」
安子「さうですか」
末子「私の色が黑いからてせうネ」
安子「あらあなたのお顏が鐵の樣な色つて云ふんてすか、私はまた、ヅウヅウしい人をいふのだらうと思ひました」

○自然の毛　沼津　八代美代子

よし「あなた眞とにい丶お毛れ」
とみ「アラあなたこそほんとによくつてよ」
よし「なんてせう、こんな赤い毛が」
とみ「ウソ仰ッしやい、けどれ毛は赤いほうが自然らしくつてい丶てすつてよ」

○夕涼み　但馬　西垣琴糸

文ちやん、一寸御覽よあの人達ちを、いくら夕暮だつてあんな見つともない、肩に手を掛け合つてゐるぢや有りませんかネ、マー、いやだわ、よく見れば新婚の兄さんと姉さん……。

○不自由ない　在米　合屋岐子

新參婦「何時頃てしようか
古參婦「あの白人に問てみましよう
古參婦「セー ミスタ ワツ マチ ウツチ
白人「テン ダラス
古參婦「今十時てすよ

○認印　本郷　きみ子

書留を受取りに行つて、認印を忘れたに心付き、落膽して居ると、田舍者親切氣に「私のがあきましたから、使はつしやい」

○芳雄の惡戯　群馬縣　江澤古登子

弟「姉ちやん御覽よ、此の女學生（ひと）を先生にしてやつたの」
と、芳雄はサモ可笑しさうに笑ひながら、一葉の寫眞を高く見せた、
姉「マア大變な、君子さんのお顏へひげを書いてよ」

○食事の心得　靜岡縣　青木靜山女

尋常三年の美ちやんに食事の心得、つてなにと、きゝましたら、物知顏に、食事の心得つて、おなかがすいたか、どうだか、よく考へる事なのよ。

○ランプの笠　秩父郡　近藤とく子

お隣りの花ちやんと妹と二人てランプの下で餘念なく遊んでゐましたが花ちやん一寸ランプを見て思ひ出した樣に。ランプは暑いから笠さしてるのれ何時ても。と云ひますと妹は。あら、雨もりが冷べたいからだわ。

○はいりやしない　日本橋　吉野都子

始めて郵便の差入を命ぜられた田舍出の女中、心易決斷力と記した、赤い箱の傍へ來て、「あら東京の郵便箱の口の小さい事、什麼して入れるのだらう……



小說談（課題）

天　あとが讀めない

若狹國小濱町香取區　山田小濱

私は初めて不如歸を讀みました。私は泪弱いのか浪子が肺病で出養生に行つてる間に、荷物が親元へ戻り、母親が迎ひに行つた處を讀むで居た時、聲は鼻にかゝり胸は一ぱいになつてよみ續ける事が出來んので、裏の畑へでゝ心を入れ替へて又讀み初めましたが、どうしてもよめません故、友に進げて後から話しを聞きました。浪子が武雄に遇はずに逝去したときゝました時も、返事が出來なんだのです。それから小說を一切讀むのを廢止しました。

小說家冥するに足る。

地　不言の感化

芝區琴平町二番地　廣瀨たみ子

私は小說が大好です、煤掃の時など古い雜誌や小說を見つけ升と、煤だらけの中に座て讀んで居ては母樣に叱られ升、私は二三年前迄は雜誌一ツ讀むのが嫌ひでした所が、私の親友にそれは〳〵小說のお好な方がありまして、私が遊びに行き升と「いらつしやい」と云つた限り見向きもせず、熱心に何か讀んでいらつしやるので、滿りませんから家に歸り升が、元より非常に仲がよいので又行き升と、前と同じで一寸も相手に成つて下さいません、私は致方なしに傍にある小說や雜誌を讀むともなく眺めて居ました、そんな事が度重つて今の私になつたのです。

而して又あなたは誰かを感化するでせう。

人　氣を附け

大連市磐城町八三號地小泉方　林正子

臺所の用事を皆すまして、さあ此から小說を讀まうと思ふと、お父樣のお書齋の煙草盆に火を入れて熱いお茶を一ツ差上げ、茶の間へ行つて母樣に暫くのおひまを頂いて、大急ぎで鷄に小米をやつて、二階の四疊半の居間へ行き、金龜城山から、ずうつと琵琶湖の見える窓をあけ放して机のまはりを奇麗に掃除し机の上の本は皆本箱へ仕舞つて、帶をきちんと結び直し、一度きつと便所へ行つてからでなくては讀み初めません、面白い所で母樣がお呼びなすつた

り、鷄が餌を求めてなきますと、泣きたくなります。用意周到。

秀逸

○趣味の變遷　　伯耆　なてして

私は一つ小說についての感想の歴史をかいて見ませう。十三歲の時はじめて乳姉妹をよみましたが、挿繪の美しかつたより外に何も感じませんでした。ですからまあ小說無趣味な時代とも云ふのでせう。それから十五歲の時不計不如歸をよんだのです。處が丁度潮感にこんな素質があつて大變私の感情を刺擊したのです。それからまあ小說なるものゝ趣味とかを悟つて十六七歲のころは何もかも小說的に思はれ、いはゆる小說心醉時代なのでした。十八歲の今日となつては作者の人生觀如何等生意氣にも批評し、又考へ究めるのです。だから只今を批評時代とも云ふのでせうか。

○挿繪　　大阪府　寺部君子

小說の挿繪は上手でしたら有る方が好いと思ひ、下手だと無い方が可いと思ひ升。其繪の巧拙に因て、小說が幾何好くても割合に面白く無かつたり、一寸仕處が繪の爲に魅せられる事も御座い升。本文に絕世の美人と有ても、挿繪が惡いと、那麼にも思ひません、又繪に因つて何處迄も想像す〻事が有升。夏目先生の坑夫を讀みました時、毎日々々同人が、松林斗りを歩いて居つた繪で嫌に成りましたが、其が又何方向いて居ても、同じ顔に書いて有りましたので、果は面白う御座いました。女子文壇は何日も一等のに繪が入るのですから、鬼に金棒とは全く這麼のでせう。

○小說中の女　　伊豫　曉子

私小說中の男子はすぐに忘れて終ひますが小說中の女子ときくとすぐに洗ひ髮をハイカラに束ねた背のすらりとした頰のばら色の佳人を夢の樣に腦中に思ひ浮べるのです。一體小說中の女は表情が巧みで何時も詩の樣な美しい事計り口にして居りそして一種人をチヤームする樣な口吻と樣子とを持つて居ます。私はかゝる人がもしあるならば友にしたい程好きなのです。いろいろとよみました小說の中で最も美しい好きだ詩的だと感じたのは夏目先生の草枕の志保屋の孃さんです。

○心配つゞけ　　上毛　元子

小說を讀むといふ事は樂な樣で心配なものです。はて今度はどうなるだらう、可愛そうにどうしたらよからう、啄、宛然自分の事の樣、讀み切らない中は氣が探めて〳〵、讀み切つてからも、やはり心配。殊に短篇物は多く大切の際どい處で切つてあるので、どうも物たりない。で、其の續篇ともいふべき樣な事を心の中に樣々に思ひめぐらし。いゝ樣に結末をつけなければ氣が濟みません。妾は十歲の時より讀み始めて愛に六年間、多くも讀みませんが、殆んど其の心配の仕つゞけです。

○表紙に接吻　　露萩子

學校の歸路、わざ〳〵迂廻して無理に願つて拜借した小說本、何より早く讀みたいは胸一杯である。それをじつと押へて、復習をし豫習も濟ませ衣服も袴もちやんと仕末をして終ひさて何の心懸りも無くなつてからなつかしい〳〵人にでも逢つた時の樣に胸轟かして、じつと表紙に接吻して、さて第一頁を繰る時の嬉しさ實に何共いへません、斯くて私は御飯も日の暮るゝのも夜の更くるも忘れて本を讀むのか、本に讀まるゝのか、分らなくなりますのよ。

○田山花袋！　　大阪　百田みづほ

田山花袋！　なんと云ふなつかしい名でせう。情に富んだ、深刻なそして眞面目なお筆は、たしかに現代小說家の模範と云ひ得る價があると思ふ『一兵卒』一篇。若い妻や母や弟妹やを殘して、遠く滿洲の野に淋しい夕日を浴びて倒るゝ一兵卒の、佗しい追懐、死に對する恐怖!!!どうして腐敗した肉慾小說家輩の及ぶ所でありませう。自然派と云へば一槪に退けて仕舞ふ現代の道學先生や批評家に此一篇を與へて、靜に考へて頂かうと思ふ。

○竈の前　　安藝　岡田霞翠

小說は母が好みませんので妾の受持の炊事の時そつとお竈の前で讀みますが、つい興味が深いて御飯が焦付いたり牛肉を煮焦したりしてお小言を頂戴した上に書物を沒收せられた事が二三

度あります、八犬傳も同じ運命に遇ひましたが之れのみは父の調停で却下となりました。一番インテレスチングは不如歸で次ぎは無花果で、相思怨では鮮次郎に同情します、そして文章が氣に入りました、乳姉妹ではなぜ早く房江が實子だと不解いのだらうと焦燥つたく、侯爵の臨終の際は殊に力を入れましたが駄目でした、飜譯物では巖窟王の 泥坪の要塞は思出しても悚然とします。

○先生がうらめしい

岐阜　篠田とみ子

いゝ小說があるが讀みなさらぬかとお友達が仰有るので、容を正し乍ら私小說や講談讀みませんからとおつうすまし切つて居ますと、そうでも良い文章計り綴つてありますのよお願だから一度きり讀んで頂戴なと強て仰有るので、では讀んで見ますわと 二頁五頁十頁遂に殘し切れずて讀み終つたのが例の不如歸でした、其時私は腹が立つて〱一人シク〱泣くのでした、ほんに今迄は新聞紙 讀むにしても小說と講談はのぞいてよみよつたが 噫!!!あの先生もこの先生もなぜ讀むなと仕入て下すつたのかしら、讀まなかつたのは私が 惡かつたけれどもおゝ浪さんも年若て可愛そうだなどゝ 其夜はとくと寐られなかつたのでした。

○房江と俊子

伊豫　英子

私の家庭は 義理づくめでございますので小說など餘り見る事は 出來ませんが菊池先生の乳姉妹の房江と田口先生の 女夫波の俊子とはいつ思ひおこしてもあゝこんな 姉妹が自分にあればと思ふ程甚は數思ひます 自ら情を殺し思を強ゥして寄せ來る逆境と 闘つたあの俊子は實に意志強き日本婦人の 好模範ではございませんかそしてあの白百合のように淸い 胸には汲めどもつきぬ愛の泉のすみ渡て! そうでございます素直で優しくてそして拔ける程怜悧な房江は、 私眞とに柔順な日本婦人の 好模範ではあるまいかと思ひます實の處は私は 此小說中の二人の婦人には多大の感化を受けたのでございますもの。



道すがら　水戸　北川うめ子

○虞美人草

福井縣　池上小芳

甲野さんは「戀をすると變ります」と糸子に云つた然も甲野の妹 藤尾は小野さんに戀して居ります、 小野さんは詩人! 愛を解し趣味を解する人と思つて居ました、 藤尾は我の女でした。 然し輕薄だつた小野さんは 短かい戀の生涯に醒めて恩師の一子小夜子を妻と定めました。 戀の道に迷つた藤尾は終に 虛榮の毒をのみ恨長き黑髮を枕に亂して死の手に捕はれたのでした。 優しい小夜子と婚する 小野さんは滿足でしやうか? 死した藤尾の心は! 噫! 戀になやんだ 人の最後ほどあはれなものは又とありますまい。

○花袋

長野　西條成蹊

私は一番花袋の小說が好きだ、 例へば田舍の自然を細かにそのまゝ描寫して其處に住む、 愛らしい少女の初戀の 恥しそうな處を可愛く無邪氣に書いたり、 又彼の男は、 彼女に戀しはしまひかなー、 それてあんな事をした位に讀者をして想像させて置て、 あとはあの美しい筆で自然を書く處などは實に好きだ、 天外の小說の樣に、 行末を夫婦にならうの なんのとイヤらしい戀をむき出しに書いて少しも 自然描寫に心懸けて居らぬ作物とは比例出來ない、 實に前者のは高尙て人をして淸い心を興させるのでせうとおもひます。

○七歳の時

大阪　福江

私が始めて小說 を讀みましたのは七歲で朝日新聞の子守歌の第一回でございます。村のさる大家に取込がある といふので其家の子守女の何とかいふ、 まだ歲のいかんのが、 坊ちやんを背負して冬の日のはや暮れて、 寒さ身にしむ鎭守の森で、 哀れに子守歌を謠ふてゐると落葉拾ひに來た母親に逢ふのです。それが私の小供心にどう感じたか、 何べんとなしに讀みましたので、 二三の句は今に覺えてゐます。 それからといふものは、 ずゐぶん小說で夜を更した事もありましたが、 同じものを二度

とは讀〔…〕した。ところが近頃は、また、繰返し〳〵讀むやうになりました。

○魔風戀風　　信濃　胡蝶子

兎や角世間の批評は御ざいますけれども、文章といひ會話といひ私は魔風戀風が好て御ざいます。そして小説の口繪には鏑木清方様のが一番好て御ざいます、ほんとに小説的な繪て御ざいますもの。

○十歳から　　紀伊　田中文子

私は紅葉のが好きてす、殊に不言不語がすき蘆花の思出の記も好き不如歸は可哀そうてすわそれに實際の人物が居るのてすからよけいにれ、何十度よんだか分りません、大阪毎日に出て居た、嫁が淵もよく出來てましたわ、何日か女學世界に出て居た泊子さんのとまり客も大好きてす、弦齋の小説はいやに高慢ぶつて嫌てす、一番最初によみかけたのは幽芳の己が罪てやつと十歳ばかしてした、其時分から分りましたよ。世間ては青年男女の小説を讀むのを非難しますが私自身は作中の人の如き位置になつたれば何う處置を付けようと考へるも處世の經驗になるだらうと思つて讀みます。

○星のかず〳〵　　加賀　琴子

夕食後は私の世界て一番樂しい時！兩手を耳に！胸と机とに四十五度の角度を持たせて臺の中眼鼠を着けて置いた小説を讀みかける、文章は何ても事實許りに走り讀み。まあ安心と一息ついて今度は文章をと二度讀みをする之れが私の癖てすの、次ぎには作中の人物さては作家の意見御ほ失禮かも知れぬが作家其人の人物御姿の想像畫等迄べて思つた事感じた事は遠慮無く綴つて星の數々てふ手製のノートに書きつける。本誌中風葉先生の御姿と添てものした想像畫と似よつて居る事を發見した時の嬉しかつた事!!!

○頭に殘つた作　　陸中　黒澤美津子

私は不如歸や金色夜叉は小説としてよりは、反つて美文として優つては居まいかと思ひます、て私は之を幾回となく讀みましたが文章は立派なものてすがどうも筆の功より外に思はれません、之れまて讀んだ中て頭に今ても殘つて居るのは、花袋先生の隣室と一兵卒位のもので(その外にまだ〳〵ありますがその中の一部)私は何時までも〳〵永久に頭に殘つて、わすれかねる位のが、すぐれた作てあると信じて居ます。

○蘆花先生　　駿河　天野きん

私は小説家の中ては德富蘆花先生が一番好きてす先生は自然派とかゝ流行(敢て流行といふ)して誰ても彼てもこれを眞似ろ時に當つて只獨り飽迄ご自分の理想を守つて居られます先生の文章には一種謂ふべからざる品格がありますだから讀んてゐて何とも形容しがたい快感を覺えます小説不如歸を讀んて泣かないものはありますまい自然と人生を描いてその文章の美に恍惚たらないものはありますまいあゝ蘆花先生は私の最も敬する先生てす先生は黑潮の續篇に着手されたと聞きました上梓された曉には我文壇に一段の光を添えるてせう。

○幾度ても　　奈良縣　西田鶴子

世に澤山な小説はありますが、何度讀んても厭かぬ、幾度讀んても、新しき涙を誘ふのは、蘆花先生の不如歸てす。世に浪子程薄幸な人はありませうか、浪子が一生に於て、やれ〳〵と安心もし、又樂しくもあつたのは武夫と結婚した當時だけてせう。それもほんの一時、遂に不治の病を得て、夫武夫の留守中に、武夫の意に背いて、浪子が逗子にいつてゐるまに姑から離緣された。歸つて見れば門に我荷物、其時浪子の心中はどうてしたてせう。姿は讀む度に斷腸の念に堪へません。「もう讀みますまい不如歸は。」と思つてゐても、又讀みたくなります。なぜ不如歸はこんなに、人を魅するちからがあるのてせう。

○二日の休養　　名古屋　藤井志津子

親友浪子様から、不如歸を拜借して讀んだのが初めてゞす、其れから色々讀みますが、情がうつゝて涙がてますから、醫者が目にわるい故止めた方がいゝと云ふ事てすから、止めてゐます、不如歸を讀んだ時には、何んだか自分の事まで思ふて、二日間床についた事があります。

○繪にする　　本郷　なてしこ

私は今まて隨分小説を讀みましたが讀だあとは必づ其の挿繪のほかの畫を中の人物(何れも女)について其の時々の形を雜記帳にかくのが樂しみてそれの帳面が家には隨分ありますあとて出して見ると何々と書いてなくともアゝこれはあの本のあそこだなと大かたわかつて樂しみてございます。

學校生活

【地】○樹蔭より

靜岡市安西一丁目五十二　榊原やす子

花の咲き初める頃、悲しい思をして別れた學校に昨日遊びに行きました校門をくゞつて行くと、授業中なのでしよう。しんとして時々本を讀む聲がきこへます。私等の居た室は何年生が居るだらうと、そつと櫻の樹の下で窓ごしに見るとやつぱり四年生でなつかしい先生が地球儀を廻しながら御話しして居らつしやる。生徒は皆な一心に先生の御話を聞いて居ます。あゝ私ももう一度あの樣に御話を聞きたいと思ひました。

【人】○同窓會

福井縣丹生郡吉野村余田區　片山千里

妾の村の小學校は僅か四間に五間で在學生も四十二人しかありませんがそこから出た人は正七位法學士海軍一等主計内田實君歩兵大尉正七位加藤享助君醫學士川中清君文學士高田治君新聞記者竹内甫君仙臺女學校教師小林きみ子樣女醫者近藤はるの樣を始め大學に二人高等學校に三人高等商業に一人中學に五人女學に三人中學や女學を卒業した人が二十人程ありまして（中に豫備少尉が三人）其等の人が毎年八月には、明治十六年以來の先生中島先生を會長に戴いて盛な同窓會を開きます、其時の先生の嬉れしさうなお顔！

○オルガン

伊豫　井上いち子

閑道を離れて山路を踏む事が五里、そこの村の學校には未だオルガンがなかつたので此少し前調へたのだそうです、夫で先生は面白く生徒に彈いて聞かした處が、周りへ集つて來て、只しよんぼりとして手と、足と、先生の顔とばかりを見つめて、オルガンの音にばかされたかの樣に、皆口をあけて居たそうです。

○三田の女學校

東京　羽衣

私は三田の女學校へかよつて居りますが大變しつそな學校で御座います、あれでこそ今の女學校の一番の模範校ですそれもそのはず校長樣が名高い棚橋先生で御ざいます、先生はしつそ儉約を志として全校の生徒に有り難い修身の御教へを受て居ります我々はどうして侈奢な事が出來ましようそれを身なりがきたないといつて笑ふのは大にまちがつて居ると思ひます。

○私の樂園

靜岡縣　清子

南に立つて居る一連の校舍三教室中眞中の四間に五間の大きさ入口に尋常科二學年教室と記した教室こそ私が昨年十一月から可愛い兒童と愉快に暮して居る教室で私にとつては無上の樂園です室の中は四列に机をならべて正面に黑板、黑板の右に花瓶があります、花瓶には、いつも思ひ〳〵に小供の持つて來る美しい、花がみちて居りますそして清い香りは室内にしみ渡つて此の室へはいりますとなんともいへぬ心地好さを感じます。黑板の左に掛けてある級訓は黑い板に白くキヤリナヨクセヨと書いてあります。毎朝此處の教壇に立つて見渡しますと六十有餘の愛兒のかゞやくひとみは同一に私を見つめて居ります、其の時の私の胸にはいひやうなきよろこびのみち〳〵て胸に止め兼ね思はずニツコリと笑むのであります、私は此の樂しみを永く永くつゞけたいと思ひます。

○公園

後志　鈴木梅子

私が通つて居た學校のすぐ隣りが廣い〳〵公園地でしたので毎年此處に運動會が開かれます土が固くてほこりが立ちませんので常に高等科の男女生が日をかへてテニスをやります又男生はベースもやります空氣が新しくてそれは〳〵よい心持です。

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○「黃ワセリン」の効用　黃ワセリンは發毛に効力がありますか、眉の薄いものなどに塗布して濃くなりませうか（上總、百合子）

『答』　更に、効能はありません、元來毛生薬等、外部より塗布するものは、効能の少なきものです。

○「にきび」（一）「にきび」が出來て困ります、（二）毛の生える方法はありませんか（無名子、十八歳娘）

『答』　兩質問共前號に掲げてあります。

○「わきが」　「わきが」を手輕に取り去る法方をお敎へ下さい（一病女）

『答』　前號に記せし如く、根治は出來ませんが、一ケ月二回宛、局部に塗布すれば、更に臭氣の出ざる薬はありますが、毒薬ですから此欄には掲げられません。

○「さめはだ」「さめはだ」の治る法はありませんか（愛讀女）

『答』　草津の温泉等に、毎年一回、一ケ月位御入浴なされば、幾分効が見えます。

○無毛　私こと無毛ゆゑ、結婚もならず困ります、よき方法はありますまいか（無毛女）

『答』　別によき方法もありませんが、結婚には決して差支ません、却て無毛の人は、繁殖力の逞しいものであります。

○乳房の痛み　月經前十日頃より乳房に痛みを感じ、白帶血が下りますが捨て置いて宜しいてしやうか不姙の原因になるまいかと案じて居ります（白梅女）

『答』　乳房の痛むのも、白帶下のあるのも輕度なれば差支ありませんが、御質問の趣きにては、子宮内膜炎と云ふ病氣がある様です、早く專門醫の診察を受けらるゝ必要があります。

○鼻液、痔核　本年二十二歳になるも常に鼻液が出て、先頃より悪臭あるものとなりました如何なる原因てしやうか、又昨年春より痔核に脳み醫師にもかゝりましたが快くなりません、之も何卒！（多病女）

『答』　慢性の鼻粘膜加答兒がある様です、之は專門家の治療を受けざれば、素人療治には行きません、又痔核手術後、未だ治しませんされば、尙一回手術を要します。

○食後の痰　私は御飯やお菓子など頂いた後、白い痰が出て仕方がありません、宅にばかり居りますから運動不足のためてしやうか（靜岡、花子）

『答』　胃加答兒がある様です、故に充分運動を試み、又食物は、充分良く咀嚼し、勉めて消化し易きものを食し、三食の外、決して間食せざる樣になさるべし、又朝は未明に起き、庭園の掃除が尤も消化を催進する効があります。

○脳神經　昨年脳神經を患ひましたが全く平癒しなかつたものか十二月頃より脳が痛み、耳が鳴り、腰部が冷へ、眠氣がし、記臆が減じ、胃の工合悪しく實に困ります、療法御敎授を乞ふ。

『答』　年齢が、判かりませんが、子宮に病氣がありて、夫が爲め、反射性に頭部に充血致す樣思はれますが、診察の上てなければ、判然したる御答へは出來ません、一應婦人科醫の診察を受けらるゝが、適當てす。

○痣の痕　妾は子供の時「あざ」をなほしましたら、其痕がはげに成て困ります何とかよい工夫はありませんか（下谷、まつ）

「答」　「はげ」の部非常に廣ければ、其處な

を切除し、兩側の耳き皮膚を縫合すれば、僅かのきずが殘る而已になります。

○月經と結婚　月經とは何んなものてしやうか、月經を見なくとも結婚して差支へありませんてしやうか（十九歳女）

『答』月經とは、一ヶ月に一回、四日乃至七日間、陰部より出血するものてす、十四歳位にて初經來るものなれば、十九歳にて來潮せざれば、一應婦人科醫の診察を受け、相當なる治療の後、結婚するのが至當てす。

○頭痛、眩暈　私はいつも頭が痛く眩暈がし、時々顏紅くなり、物に厭き易く、物覺え惡く決心力なく、手足は冷たく、其上身體が大變肥滿して見苦しく御座います、何うしたら宜しいてしやう（十七歳みどり子）

『答』多血症にして腦充血を起され居る樣てす、毎日便通を促し、食物を減じ、運動を充分なさる可し。

○近視用の眼鏡　妾も近視眼の一人てすが眼鏡を水晶て造れば度數が進まぬと云ひますが眞實てしやうか（近眼子）

『答』近眼は其性質に依り、設令水晶の眼球と雖も、絕對的度の進むを止むる事は出來ざれども、眼鏡は水晶に限ります、何ぜなれば、粗造なる眼鏡は、不正反射をなし、之が爲め視力を害する事、往々認むる處なれども、水晶は其質緻密にして、正反射をなすものなれば、視力を害する如き憂ひは決してありません、故に此點に於て、水晶を賞讃します。

○トラホーム　二三年前よりトラホームに罹り、治療を受けて一度よくなりましたが、今年一月頃よりものが二つに見えてなりません、鏡に向つて左眼を見ますと黑瞳の上に星が出來て黑瞳がだん／＼目眦の方にゆき斜眼のやうに見えて困ります療法がありましやうか（越中、眼病女）

『答』「トラホーム」にて最も起り易きは角膜翳と申して、黑眼に星が出來るのてす、之は出來た後、半年以内なれば、治する事が出來ますが、半年を越へて後は、如何なる療治も効がありません、早く眼科醫の治療を御受けなさる事を御勸めします。

○鼻が赤くなる　四年前より鼻が赤くなり斷へず油が流れて誠に困ります、何かよき藥をお敎へ下さい（韓國二十才女）

『答』酒査鼻と云ふ病氣にて、一種許りの藥にては治りません、度々其藥を加減して用ゆる必要がありますれば、皮膚科醫の診察を御受けなさる方が御爲てす。

○白髮　妾こと一昨年より白髮發生し追追殖るやうてすが、何う云ふ原因てしやうか、何か根本的の療法がありましやうか、平素頭痛持てすが、頭痛と白髮に關係がありますか（廣島縣、十九歳女）

『答』白髮は遺傳性のもの多く、或一部分は大病後、又は腦に病氣ありて發するものてす遺傳性に依りて來るものは到底治る見込はありませんが、貴孃は常に頭痛持ちと云ふ事てあれば、多分腦に病氣ありて發せし樣思はれます、故に相當なる醫師の診察を受け、先づ頭痛を癒す事が出來たなら、自然白髮も黑く變ずる樣考へられます。

○聲が惡い　生れつき惡聲てすが、藥を用ひても治りますまいか（仙臺、淸子）

『答』先天的に惡聲の人は藥液の力にては到底善き聲を發する事は出來ません。

質問諸孃へ

總て藥は其用法如何によつて奏効もあり亦害にもなりますから假令普通藥とても專門の智識なくして用ふることは危險です　それ故此の欄ては絕對的に藥液療法は申上げぬことにしてありますから諸孃ら其お積りで質問を願ひます。



讀友倶樂部

君子の交りは淡として水の如し

開き封

○紀念帖　誌友の皆様私れ女子文壇愛讀の紀念として寫眞帖竝に玉章帖を作らうと思って居ります之は年老いて少女時代女子文壇を愛讀して居りました紀念として時々出して心を慰めたら面白い事と思ふからです。私も廻らぬながら御返事は致します記者様何卒私の志望に賛成して諸姉様から寫眞や玉章を御送附くださる様勸めて頂戴（岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡桐本悦子）

○米國より　私は一年以前に渡米致した者です、て故里の事が一つも知れませんから皆様の内に藝備日日新聞か中國新聞かを御讀の御方は私の日米新聞と永久に交換して被下い、又當地美景繪端書が澤山ありますから交換して頂戴な、五枚送て被下た御方には十枚送ります（北米羅府ウオール街四百十七番合屋岐子）M. Goya. 417 Wall. St. L. A. Cal. U. S. A.

○山田さまに　私は姉妹一人もない淋しい獨子で御座います、御誌は二卷十一號からの愛讀者て、其の女郞花月て拜見して、どうしても忘れられませんのが山田國子様の朝虹、其御詩の美しさの外に、私には悲しく慕はしい紀念の地の、諏訪と云ふお住居がなつかしう、邦子様をお慕はしう思ふて居りましたが、愚かしさを耻ちてお交りは願ひませんてした。段々お作を拜見する中に、同じ教を信ぜらるゝ方とお察し致しました、それても憶して居りました私はなんと云ふのてせう。今は遠く北海に在ます御様子てすが、早や本誌寄稿家として名譽ある御方、失禮致してはと扣へて居ります。如何して失禮致さずにお友達の一人に加へて戴けませう記者様何卒お教へ下さいませ、今日も暮れて行く雲のあなたの北の御空に心を馳せ未だ見ぬお姿に憧るゝので御座います。（ひとり子）

○此世が恐ろしい　悲しい私は倶樂部て御交際を祈ると澤山ありましたて、早速手紙、繪葉書を出して置きました四五日すると返事を下さる事と思つて居ますと、郵便集配人さん御出てましたて皆んな附箋が付いて、「此村には居住せず」とありました、悲くて堪りません、此れは男子のいたづらかと思ひもしました、又文壇に剽窃御注意のあるのに驚きました、此んな事がありまして此の世が恐ろしくなつて死にたくなりました什麽か皆さん清い文て御交際を致しましよう（山口縣熊毛郡田布施村御藏戸松根龍之進内啅子）

○臺灣より　多くの雜誌不用ですお望みの方は未使用の繪葉書封入して お申しこし下さい三日以内に必ず送本致します 尚ほ先着の方々へは編物か見苦しき妾の寫眞かを添へます 夢お疑ひ下さいますな 不束な田舍者てすけれ共恥も知り信義の大切なるも知つて居ります（臺灣臺北艋舺江瀕街百三十八番戸稗貫みつ子）

○機織る稽古　皆様私は機の習ひ初めてすが縞切が無くて困つてゐます、縞切御持ちの方は多少は申しませんから御送り下さいませ、御禮には德島名勝繪はがきてさし上ます（德島縣藏吉驛前、笠成松枝子）

○醫學問答　妾は醫學後期生なのてすが目的のため皆々様のため物理化學生理解剖の前期學科や研究中の內科外科眼科其他不束ながら出來るだけ親切にお答申さうと存じますどしどし御照會下さいそのかはり菜やひじつき又は繪はがき寫眞など御贈りをれ（福島縣石城郡入山坑醫院內、久田勝枝）

○みだれ髪と夢の華　諸孃の內に「みだれ髪」「夢の華」御持の方は何れか一册を御讓り下さいませぬか御返禮は勿論之を御緣に何卒御交誼の程御依賴申上ます（千葉縣長生郡茂原町堀口なみの）

○水彩畫　諸兄姉様私れ水彩畫を學んで居りますから水彩畫の（繪葉書）（口繪）肉筆、印刷の御交換をお願ひ申します私は自筆繪葉書等て必ずくゝ御答禮申します（京都市下京區　䋄藥師通寺町西入北田榮𦂻）

○お伽噺　お伽噺が學校家庭の讀物として如何なる價値を有するかは事新しく申までもな

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

十月十五日發刊

女子文壇

臨時增刊（第四年第十五號）

大懸賞

文壇の光

閨秀傑作

◎文壇の光——內容◎

▲小說 ▲論文 ▲新體詩 ▲俳句

▲お伽噺 ▲日記文 ▲短文 ▲繪畫

▲美文 ▲書簡文 ▲和歌

●附錄には當代知名大家文談數十頁を載す

『文壇の光』は皆之れ青春の女子が心血を絞りて成れるもの、一文一章と雖も忽かなる作なし、曩に出版したる『文壇の花』は興味と實用を兼ねたる文章の好冊子として、全國の諸孃に大歡迎を受けたり、同じ方法に據りて、編輯されたる『文壇の光』の價値は言ふを俟たず、幸に愛讀を希ふ

●●口繪○原色美麗の寫眞及び入賞作家肖像寫眞挿入

●●紙數大判二百五十頁　○スケッチ澤山挿入

定價金貳拾錢　郵稅壹錢五厘（郵券代用壹割增）

發行所（振替貯金口座第壹七貳九番）東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社

特約賣捌所○東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、上田屋、良明堂　其他取次販賣店各國にあり

秀才文壇秋季増刊

（十月二十日發行）

紅楓

正價一冊（二百五十頁）金二十錢 郵税一錢五厘

懸賞文歡迎

賞與規定

甲種（正＝金）第一等 金五圓 第二等 金三圓 第三等 金二圓

乙種（正＝金）第一等ヨリ第五等 一圓五十錢〇一圓廿錢〇一圓〇七十錢〇五十錢

丙種（切＝符）第一等ヨリ第五等 一圓〇八十錢〇六十錢〇四十錢〇廿錢

丁種＝天地人へ五十錢以下の圖書切符を贈る

特制 甲、乙、丙、丁各種等トモ人員ニ制限ナク多數當撰セシムベシ

投稿〆切 九月十日限り

◉封筒及原稿には必ず『紅楓原稿』と朱書せらるべし

◉其他總ての投書認めの方は毎號の規定に隨はるべし

投稿募集項目

甲種

○短篇小説（百五十行以内總假名付）……徳田秋聲選

乙種

○論文（五十行以内）……中島孤島選

◉美文（五十行以内）……小川未明選

○新體詩（四十行以内總假名付）……河井醉茗選

◉評釋文（四十行以内）……中内文學士選

○寫生文（五十行以内）……高濱虚子選

◉人物評論（四十行以内）……矢部白雨選

丙種

○日記文（二十行以内）……鈴木野火選

◉消息短文（十五行以内）……矢部白雨選

○小品文（十二行以内）……西村醉夢選

◉新口語詩（行數隨意）……小川未明選

丁種

○和歌（一人五首限）……尾上柴舟選

◉俳句（一人五首限）……高濱虚子選

○漢詩（七絶）……小笠原盧舟選

◉スケッチ（題隨意半頁大）……服部惡夫選

發行所 東京市神田區旅籠町一丁目廿三番地 文光堂（振替番號一九五五）

いことですが實はその材料が不足なので困つて居ります申上げかねますが少年世界や少女界でも又單行本でもお伽噺さへ書いて居るのなら何でも宜いから御惠送を願ひます お禮は乾度いたします（羽前國玉川郵便局區雨小國小學校 朝尾加江子）

○猿を集めたい

繪葉書でも細工物でもなんでもよろしく猿に因んだ物を 御惠み下さい いづれも御返禮は御好みの物で必ずいたします 皆さまのお自作物なれば一層喜ばしく存じます（芝區愛宕町二ノ十四大村ふで方喜代子）

○音樂研究會

誌友の皆樣音樂研究會を組織しようじやありませんか 會員は四五人を限りとして方法としては 例へば甲は面白い唱歌なり音樂上の說なりを書て乙に送り 乙は是に甲と同じ樣に自分のを綴り 込みて丙に送り丙は丁に丁は甲に甲は再び乙にと云ふ樣にしたら どうかと思ひます同志の方は御通知下さいまし。（長野縣上水內郡大豆島村市川豐治郎方青木しげ）

○ハモニカ進呈

誌友の皆樣ほんとにお暑うございますれお變りもございませんか 私れ友達からハーモニカのいゝのを もらひましたが私不用ですからどなたかよければ 差し上げませうか繪葉書で下名まで御通知下さい （佐賀縣佐賀市水ケ江町森方よし子）

文學顧問

問　藤村氏の「若菜集」其他同種のものを集めた書物は何と云ふ名でしたか、ツイ忘れ ましたので御尋ね致します（片山里の白百合）

答　「藤村詩集」と云ひます發行所は春陽堂で 定價は八十錢なり

問　記者樣婦人記者とならうとするには 中等敎育を終つたぎりではいけませんか 何學校を卒業すれば可いでせう（駿河、松音）

答　然樣ですな、婦人記者たるものは 第一、人格、第二、學力、第三、體力でせう、學校 などは深く穿鑿しません中等敎育を完全に受けて居れば普通の記者位にはなれるでせう

問　記者樣に伺ひ申します本誌第四年 第四號の新派和歌欄 選者吟「なげく時ゆらにうごく烏羽玉の髪のやうなり紫の藤」の烏羽玉の 意味を御敎示下さい（岩手の宮古にて、 文子）

答　烏羽玉はもと黑の枕言葉ですが此處では 黑髪といふ意味です

問　「文壇の花」の美文地賞青木樣の「繭玉」と云ふのはどういふのを云ひますのか 何卒御敎へを願ひます（りう子）

答　「繭玉」は柳の枝に餅の粉で 作つた紅、白の小さな丸いたまをつけ、別にやはり餅の粉で作つた鯛や、海老や、巾着や、貝や、いろ／＼の緣喜もの、又は紙の短册をつるして 子供の遊びに供へるのです、東京では正月だけに行はれるやうです、關西では「餅花」と稱してやはり正月の飾りに用ゐます

問　記者樣にお尋ね申ます。私は東部の 新聞を愛讀いたしたいのですが、 數ある中で 何新聞が最もよいでしやう、其發行所と 一ケ月の定價とをお知らせ下さいませ（紀伊早苗子）

答　何が最も良いと云ふことは 一寸お答しにくい、皆それ／＼特色がありますから。 そこで三四種を參考までに擧げて置きませう『萬朝報』（一枚一錢郵稅二厘の割、京橋區弓町朝報社）は四頁新聞ですが記事は簡にして要を得て居る『東京朝日新聞』（一ケ月郵稅とも金四十七錢京橋區瀧山町東京朝日新聞會社）は大阪朝日に似て居ます 通信機關が整ふて居ますから記事も豐富で且詳しく正しい『讀賣新聞』（一ケ月三十五錢郵稅十五錢 京橋區銀座一丁目日就社）は文學の方面に 特色があります『報知新聞』（一ケ月郵稅共九十錢、 麴町區有樂町二ノ一報知社）は色刷を初めた新聞ですが記事も賑はしい『國民新聞』（一ケ月三十五錢郵稅十五錢京橋區 日吉町國民新聞社）も近頃評判がよろしい

問　橘千蔭先生の習字手本の名 並に發行所代價を知らして下さい（沼津美代子）

答　橘千蔭の習字帖は「新百人一首」（定價三十錢郵稅四錢博文館發兌）「古今和歌集序」（定價二十錢郵稅四錢日本橋區通一丁目 青木嵩山堂發刊）「霜月帖」（定價三十五錢郵稅四錢下谷區中根岸小林嵩山房發刊）

請願と記者

暑さ嚴しき今日此頃記者樣には御變り御座いませんか私事一昨年頃までは 出來もしないのに度々投書しまして 其れを無上の樂みとして居りましたが 昨年師校に入學する樣になりましてからは今まで止めて居りました、が樂しみを 失つた樣な氣がしますので、 又々餘暇に 少し宛書きまして溜めましたものをお目にかけますから 何卒御覽下さいませ（宮城縣松苗）（記者曰、 拜見します）○記者樣、 是非とも／＼誌友大會を十月か

十一月頃御催し下され度若し御開き下さらばさぞかし盛會ならんと存じ候 おろかしき身なれども及ぶかぎりは御手だすけ致すべく候くれ〴〵も伏して御願ひ申上候（神奈川にて、石井芳子）（記者曰、大會など丶仰山なことはせずとも、五六人も集つて懇話會のやうなものを開いたならお爲めにもなり、樂しくもあらうと思ひます、場合に依りましては記者も御相談を受けませう、東京及び東京附近の方で二三名も發起者におなりなさつたら好いでせう）○記者樣私は御社の日に月に御隆盛に赴かれるには誠に驚き入ります田舍に居つて時々御通信の出來るさへ、何だかうれしくてたまりません心から御祝ひ申すと共に以後益々御榮えにならんことを一途に御いのり申上ます（皎月女）（記者曰、多謝々々）○記者樣私は昨年當地の小學校補習科を卒業しましてから、他の上の學校へ行きたいとねがひましたのですけれども當地には女學校がありませんから敎育がふるいません故ゆるされませんてすから今は思ひとゞまつて裁縫へ行きかたはら女子文壇のめぐみを受けて學なんで居ります 家事におはれても手すきなうかゞい力の限り投書致しますから何卒よろしく（近江國小倉淼榮）（記者曰、裁縫の傍らにも女子文壇ははなさない、と云ふお達は澤山あります）○記者樣私六月の日記文で三等になつたので嬉しくて毎日御發表が來るのをまつて居りましたのに まだまゐりませんの私賞品を取る目的で投書しては居ませんけれども何だか氣がゝりてす（衣子）（記者曰、御住居が分りませんから未だ送らないてあります、何うぞ直ぐ本社懸賞掛宛に第九號日記文 三等當選者何の何子と明記して請求して下さい）○遊賀、増治ゆり子さんに、繪葉書は寫眞版にいたしませんからお斷りいたします（記者）○牛込、佐藤いつ子さんに、何處からお求めになつても投稿は御自由てす、何うか盛んに投寄して下さい（記者）○特に暑中見舞の挨拶を下された方、いろ〳〵の事を忠告又は報告下さつた方、御導れは返事せずともそれてよろしい方などの本文は略して御名前だけを上に掲げます、宮崎縣猪野奈良野、京都岩淵國子、大阪高間もと子、板橋辰女、和泉佘田よし子、佐賀縣交野こはぎ、岐阜都留子、靜岡縣貝水孤說、大分縣立川梯子、京都府隅垣信子、茨城仁子、秋町小國啟、越後無名女、武州近藤とく子、東京すみれ、北利子、大阪市花子、京城高宮ちゑ、長野縣柳澤みずの、大阪紅女、東京百合子、相模川畔小林英子、筑前雀部とみ子、古川ゑい子、大津八千代、豐西末子、上毛野菊、上田靜波子外二人、青山みゆき、長谷川花子、讃岐やす子、在佐山磨志緒、臺灣村岡綠、佐世保市中村しずゑ、青森宮子、以上（記者）

讀孃の交際

○讀友の皆々樣不束な妾も以後ぼつ〳〵投書致しますから宜敷く御敎導を願ひます 猶ほ御玉章繪葉書の御交際を願ひます 當地の風景繪葉書御入用の御方には差上ます（山口縣佐波郡三田尻本町西法寺前藤井よし子）○風景繪葉書に所感を認めて御交換下さい未使用のものは紀念になりませんから可成繪はがきにて御文通をお願み申上げます（廣島市段原村東浦七八六番地の一植水新之助方にて植木しづよ）○先月御交際を願ましてから皆さんよりの御手紙に接しましてまことにうれしく拜見しました どうぞ此後とも御懇りなく御交り下さいまし 又私の宅は下記の所に越しましたから（橫濱市日ノ出町三ノ八〇石原方相樂きみ子）○諸孃樣方 私は山間の古井に住む蛙と同じ世間見ずの淺學の者てすが何卒御交際を願ます（靜岡縣小笠郡六郷村牛淵近江賓廠方野菊子）○諸姉樣妾は先年からの愛讀者てすが先月より投書して居ります 此後御交際被下れ（福井縣今立郡國高村瓜生吉田梅子）○妾は本年十五才てありますが極く片田舍て淋しく暮して居ります 本年より女子文壇愛讀者になりましたから何うぞ繪ハがきの交換を願ます 返事はきつと致し升．（愛知縣丹羽郡扶桑村字柏森專修院內安田芙蓉）○親愛なる諸姉上樣よ何卒エハガキの交換を願ひ升（石川縣鳳至郡七浦村字皆月茶木ゆう子）○皆さん私も先月より愛讀者となりましたから、此れより親しく御交りを願ます繪葉書、玉章及寫眞の交換も御願ひ申ます（常陸筑波郡大穗村大曾根根本賢子）○皆さん私は田舍者て何も知りませんが何うか宜く御願み致します（山口縣德山町辻福田よし子）○愛讀の諸孃樣よ、私の如きものにも玉章や寫眞の交換して下さい（金澤市野田寺町四丁目茄子野利吉方高村安江）○御懐はしき諸孃の君よ妾このたび片山里の一隅より御交際を（尾張國瀬戸町市原八重子）○貴姉樣方妾程たより無いものが有ませうか幼い時父には死に別れ姉樣と親子三人暮してしたが如何なる天罰がみいつたか今年の二月又々姉樣に死に別れ年老てたより少ない母樣と只二人淋しく女子文壇を見て樂しんてゐるゞよ

よびんと思し召して下さるお方は何うぞ玉章や繪葉書の交際末長くして下さい お願致します(豐後東國東郡西安岐村小川小川照子)○本誌愛讀の諸姉よあはれ一片の血あり情あるみ胸もたば片山里に住む哀れの我に 暖き御玉章賜はりてよ御返事は必ず差上ます(茨城縣下大野 飛田椿・野)○眞ある友情有る心の清らかな お優様達と御交際が仕度う御座い升。(愛知縣碧海郡 矢作町橋目永田舞鶴子) ○私は田舍にすむ不束者てすお何卒御手紙を下さいませ又繪葉書や 雜誌の御交換を願ひます(茨城縣筑波郡小野川村 大字小野崎中山けい子)○誌友の諸姉樣 妾は廣島師範の試驗を受けたいと思ひまして同校から 規則書を取り寄せましたが 何分畜知てどんな事をさらひて於いて好いのやら少しも分りません 御存じのお方は一寸敎へて下さいませんか(備後國 比婆郡西城町字入江土井澄江)○皆さま 私は田舍にすんで居る者てすから 皆樣とお話や御姿を拜する事がなりませぬ故何卒皆さまの お寫眞や、ひじつき、しをりなど御惠下さい御禮には 女學世界、文藝倶樂部、源氏物語、其他のものを お送り致します(遠州小笠郡朝比奈村下 峰谷山下篠葉)○誌上て皆さまに、御交際をねがひましたら意外に澤さんなお方から 繪葉書が送りてまゐりました、然し妾は繪葉書に就ては 非常な悲しい歷史をもつてゐますので、 この頃は 其を見るのも何だか悲しい思ひ出の種て あります、何卒此次からはなつかしいお手紙を下さいませ、 喜んて御返事をだします、 松井みつ子樣、林ひて樣の御二人はお所が知れませぬので 止むを得ず御返事を出しませんてした、 お所を 知らせて下さいませ(大阪北區曾根崎上四丁目二七七 福井信太郎樣方松田群江) ○讀者のはしと思召して可愛がつて頂戴、名所の繪葉書送つて下さい(若狹和田凝和菊子) ○諸姉上樣ふつゝかな者てすがどうぞ玉章や繪葉書の交際なさつて下さいませ(靜岡市追手町官舍龍岡たけ) ○哀しき萬天下の諸姉樣妾は水戶に住む 誌友の一人にて候よ何卒御見知り被下よ 編物やひじおて 繪はがきの御交換を願ひます水戶招魂祭 紀念繪はがきにて辭にちかつてお禮致します(水戶市宮田公園內相原方北村さくら) ○愛讀の諸姉樣よろしく御交際を願ひます(福岡縣宗像郡東鄕高山生野)○草深き片田舍にすむ淺學なる者てすが 同じく文壇の愛讀者てすから 繪葉書玉章などの交換を永遠におねがひ致したう御座ひます (愛知縣額田郡福岡町大字市場宮本貞子) ○繪はがきお玉章などおめぐみ下さいまして誠に難有御座いました、 何他の姉樣も何卒御交換下さいまし 乾度御返事致します(岐阜縣養老郡牧田村字二又氏家たつ子)○姉と敬み妹よと愛みし皆樣と 暫くお別れせねばならん樣に成りました 誠に名殘惜しい次第て ありますが 惡からず お察し下さい(丹後舞鶴局下小谷清子)○皆さんの御かげて本箱にすきが出來ましてこんな嬉しいとは 御座いません、 が御望のお方が澤山てしたから 郵券だけ送れず又お望の本てないのや 全く送らず繪葉書て間にあはせたりしましたが惡からず 御願ひ申します、 お禮まて(千葉縣三森ゆき)○佐渡の片田舍に日々草刈をしてる憐れな 者てす、 何卒玉章や繪はがきの交換を願ひます (佐渡畑野村 栗野江初卷初號よりの愛讀者谷川桂月子) ○誌上の姉樣がた妾も愛讀者の一人と なりました、此後は親しき交りと共に 名所繪はがきの交換を願ひます(茨城縣筑波郡大曾根上仲町成しま方 成島しん子)○妾は片山里に淋しく暮して 居ります、そして生れて 此の方學校に通つた事はない不束なる者なれど 何卒御交際を願ひます繪葉書寫眞レッメアーの交換も是非 (茨城縣猿島郡 古河町横山町館野たけ方荒木利喜子) ○初めて愛讀者になりました故此後御見捨なく 御交際して頂戴、妾事和歌が大好きてすから 繪葉書に當いて交換をして頂戴必ず返信致します (備後深安郡神邊三日市佐藤けん子) ○學びの友とも今は音たへ遠く郡にますらう妾何卒して 誠ある御方と御交り致したく! (東京市日本橋區本石町二丁目杉本方松崎芳子) ○孤獨のさびしさに常に女子文壇を無二の友として愛讀して 居ります諸子諸嬢よ繪葉書の交換を願ます(大阪松島 一丁目濱側丸山濱方岡村登久子)○家に許りこもり何も知らない不束者て御座います 憐と思召し玉章の交換をねがひます (山形縣北村山郡楯岡町青沼好子) ○御手紙を下さい御返事はきつと致しますよ(函館區惠比須町五一齋藤重野) ○繪葉書の交換をお願ひ致します 乍勝手あまり粗末ならざるものを! (京都市松原通東洞院角林すゑ) ○私繪葉書を好んて數百枚持つて 居ますのて皆さんと交換致し度いのてす先着の御方拾名には不如歸の歌家庭の實其外一々 御返禮致します(廣島縣神石郡油木町三五一平川重子) ○兄弟姉妹もなき一人者よどうぞ妹と思召して 愛して頂戴などうぞレターをどし〳〵頂戴 神かけて御返事は致します一日千秋の思ひて 御手紙をま

つて居りますグドバイ（神奈川縣中郡大磯町南本町宮代みよ子）○繪はがき玉章の御交換を（東京府北多摩郡木村山村野口大賀光子）○誌友の皆様よ妾は至つて不束者てすが何卒親密なる御交際を願ひます（福岡縣福岡市九州高等女學校內竹綱ゆきえ）○語る友なく山水を友と致して居りましたが今度本誌のお蔭にておやさしき御姉様を一人得此間御目もじ致しいろ〳〵と語り合ひ實に嬉しく存じました皆様猶此後とも！（讃國龍山祖町野津くみ子）○不つゝか者てございますが末永く御交際を願ひます（豐多摩郡中澁谷岡田方柳靄子）○繪葉書や玉章の交換を御願申し升御送り下されし御方には野田名勝繪葉書を差上升（千葉縣東葛飾郡福田村三ヶ尾、內藤秀子）○片田舍に住む不束なものてすが御見捨てなく以後よろしく御交際を願ひます御文や繪はがきや寫眞の交換を！（伊豫國鈴鹿郡龜山東町高橋千代子方井野しづ子）○誌友の皆様私は或事情の爲め突然皆様との御交際を中止せねばならぬ事となりましたから謹て御願して從いた諸品の交換は姑らく御斷致します、尚今日迄御交際下さつた御方に厚く御禮申し上げます（七月十日備後國田けん子）○親愛なる姉様方よ妾は片田舍の小學校に教鞭を執る不束者てすがどうぞ御見捨なく繪葉書や玉章の交換を願ひます（滋賀縣高島郡今津町大字今津橋本しづ枝）○實になつかしき御情深い諸姉様方よ妾は此頃より愛讀者の一人となりましたから親しくエハがキや玉章の交際を願ひます（信濃國小縣郡縣村本海野柳澤みづの）○申すも恥しながら赤貧洗ふお如しとは妾目下の境遇を形容した者て御座いましよう妾は貞累になつて泣き乍ら働て居ります御同情に富ませ給ふ諸姉上様よ御讀古の御不用なのが御座いましたらどうぞ御恵み下さいませぬか御恩の程は決して忘れませぬ（根室キナトイシ高橋ふみ子）

圖書換讀

○妾の手許に美丈夫、心の波、乳姉妹、罪のゆくへ、初姿、母の罪、其の他小說雜誌澤山不用になつて居りますから夏子、寬風戀風、青春、伯爵夫人、おもちの方はどうぞ御交換遊ばして下さいまし、又詩集がお宜しければいくらても（常陸國筑波郡北條內町鈴木方野菊）○妾の手許に不用の小說及び女子必讀書左記の通りあります御入用の方は何にの小說てもよろしくありますから送りて下さいさらば妾は早速御好み次第送つて上げます己が罪、青年畫家、夏子、貞人の自白、緣不緣、小說世間、富と愛、おのが縛、人の母、人の兄、血汗、結婚と家庭、妻女の本分、女訓の栞（秋田縣由利郡平澤町山六方齋藤みよえ）○妾の手許に不用の雜誌が澤山ありますから上等繪葉書か御寫眞て御申込み下さい亦小說書類御持の方は御送り下さい御に替つて御禮いたします（伯耆國西伯郡大國村字原村長谷川爲造方永江貞子）○皆樣の中て、日本少年、第三卷第四號とムラサキ七月號と御交換下さい（宮城縣伊具郡館矢間村小田小島むめよ）○諸孃樣の中には、不如歸、乳姉妹、呪はれ、朝顏日記、令孃と男兵、千草の錦、婦人世界、化粧かゞみ、其他種々の面白き小說本や雜誌御持ちの御方は、私の天地有情、茶の湯と生花、松虫塚、九十九里新誌、寛の池、青蘆集、男女一代運勢、女子修身訓等と交換してください先著の御方には私の寫眞一枚づゝ送ります（千葉縣山武郡白里村四天木中里內山やす子）○不用の女子の雜誌凡そ四拾冊位あり御望みの方相當の本にて申し込れよ、直ちに御送附す（盛岡市本町三十一番地田澤幸子）○皆様私の話を一寸きいて下さいなあのね皆樣の處に「乳兄弟」「夏小袖」「己が罪」「不如歸」「女浪人」「想夫憐」「二〆書」「大奥女中」「青海」「食道樂」がありましたら私の「平家物語」「明治才媛文集」「村井先生の近江聖人」「女學世界いろいろ」「少女界」「女鑑」「文藝倶樂部いろ〳〵」「女學校用讀本」とありますからどれかと取かへて下さいな御禮には御入用の本の外に「不思議のはがき」レース梅形のしをり同花瓶敷實用算術書學校用唱歌集美人葉書一組三枚」の內御氣に入りのをつけて差上升から御望の方は來月の誌上て御送り下さる御本と御住所とを御知らせ下さい（東京黑木たま子）○不如歸古雜誌の不用のがありますから皆様のお手許にゲーテの詩、藤村詩集の何れが御不用のがありましたらお交換して下さい（千葉縣夷隅郡國吉町刈谷今井なし）○皆様の中て田口掬汀の新生涯、天外のコブシ枝露、藤村の舊主人、風葉の戀ざめなど御もち遊ばす方はなに卒御ゆづり下さいませんか、御禮にはつなてなは、少華族、繪師の戀、思ひざめ、青春、夏子、百合子、夫さだめ、靈か肉か、緣不緣、新不如歸、戀と戀、はつ姿、其他雜誌等て御氣に召したのを差上げます（尾張國龜崎町櫻井峯子）○皆様私の處に「新不如歸」「文藝倶樂部澤山」「新小說澤山」有ますから「天打つ浪」「筆子」「夏子」「呪はれたる女」「源平盛衰記」「方丈記」「一葉

全書」等何にてもよろしく御かへ下されませんか御望なれば何冊にても差上げます其外に美はしい繪葉書を添へます（和歌山市南材木町貳丁目、三、鈴木はろ子）○春の曲、陸奥の花、千島の曲、廣瀬中佐、三角函、西郷隆盛、大海原、殘夢、御持の方は歌と譜と御書き是非御惠下さい（寫譜にても宜し）御禮は是非差上ます（陸奥國入戸廿三日町岡田入彌方近藤なほ子）○昨年二月の『女學世界』御持ちの方は新小說、文章世界又は外に（特に御指命の）書籍と交換して下さいませんか、御望の御方は下名へ（京都府相樂郡祝園村字菅井、松田かすみ）○手許に一葉全集、不如歸、新選日本女禮式、日本丸、平家物語、育兒と衞生其他西國立志編等書籍雜誌數種ありますから、皆樣の中で金色夜叉、思出の記、戀と戀、新婚旅行、女心などお持合せの方は御姓名住所明瞭に記し書籍を添へ御申込み下さいますれば着次第迹にお望みの書籍をお送り申します（山城國向日町局區內字塚原藤岡やゑ子）○本年貳月一日發行の新小說御贈り下された御方に本年六月婦人畫報の臨時女禮式畫報か大町桂月中內蝶二共著の少女と山水の何れかに、舶來繪はがきを添えてあげますから御望の方は御申込下さいまし（橫濱石川仲三、五三岩田しげ子）○諸孃の御手許に本年三月發行の早稻田文學をおもちでしたら私の太陽（六月號）と御とりかへ下さい、又小說故鄉（田山花袋著）が不要になつて居りますから小栗風葉先生の小說と御交換を（千葉縣夷隅郡國吉町刈谷今井なをし）○新潟縣咲子樣尾張井口樣東京高本蘭子樣福島笠島樣近江小川樣、岡山縣孝忠樣山形縣齋藤芳江樣、秋田縣泉子樣、秋田千田樣先日の御申越の書籍は皆樣の先きに御申込になつたお方へ御送付致しましたので妾方にはもう一部もございませんのですから惡しからず御思ひ下さい今妾の手許に有りますのは和歌入門、明治文範、手紙の作り方等雜誌は女學世界、婦人世界、女鑑、文章世界、等あります御交換して下さい（福井縣今立郡國高村瓜生三六、二、吉田梅子）○皆樣、妾の許に、金色夜叉、乳姉妹、さゝ舟、新不如歸、後の新不如歸、不如歸、などありますから、青春、思出の記其の外新體詩の書なんかと交換して下さいませんか、（福島縣河沼郡飯谷村字藤笠間きの）○御なつかしい御姉樣！先程は澤山御うつくしい繪葉書御送り下さいましてありがとう、尙妾の手許にＡＢＣ雜誌と初等英語と英學生とて三十冊餘りありますから御望の御方には速ぐ御送り申ます妾三十人程申込んで下さいました其中て七八人男子の方も見えました然し妾は男女の區別なくすべて御禮として御送りしました それから皆樣の中で女子の修養（下田歌子著）有情無情作文獨習書御入用の方がありましたら何かの本と交換して頂戴な（滋賀縣蒲生郡日野町增治百合子）○愛讀の諸孃さま妾は筑前琵琶歌が非常に好きなんです皆樣の內で譜のついた本を御持參の御方がありましたら御送り下さいませんか一曲にてもよいのですから何卒々々御願申ます（大阪市東區淸水谷東町一二一五岡本安吉方渡邊かず子）○皆樣私は片田舍の小學生徒です義太夫の獨學びをしたいと思ひますから、皆樣がありますなら御めぐみ下さい、東京の御方は買て早く送つて下さい、早くれ、私の方には御ししようさんがないですもの、皆さんの御はなしのうらやましくてよ（茨城縣新治郡美並村坂本さく）○私の手許に思出の記、小れこ、金色夜叉夏子、麗子、不言不語、玄雪姬前編後編、沖の小島血の淚、女子文の林等不用書がありますから皆樣の內で徒然草にせ紫下卷跟のゆくへ萩の下露青春等お持ちの方は何卒御交換下さいませ其他女子文壇婦人世界少女界ムラサキなどありますから秀才文壇ハガキ文學とてお取りかへ下さい先着の方には御望の品に妾のみにくき寫眞を添へて必ず御送り致します但し五名にだけ男子の方でもいとひません（宮城縣伊具郡丸森町字片岸小野千代子）○手許に吉丁字女敎師花守海の詩名文名詩黃菊白菊ふところ日記普通理科學敎科書上下新植物敎科書裁縫敎授法、成功婦人世界女學世界女子文壇女學講義が不用になつて居りますから皆樣の中で藤澤代數敎科書同算術敎科書上下藤村詩集植物分類學御不用の方は御交換下さいませ但し男子の方は御ことはり致しま

○希望廣告

『望む方』一件（十六字）二行貳拾錢三行三拾錢
『求むる方』一件（十六字）二行四十錢三行五拾錢
凡て本社に姓名あり照會あれ

◎西洋人の所に奉公したし履歷書が必要なればすぐ送る（日本橋一少女）

◎高等女學校五年半で退學家事の助致して居ます弟の學資の助になる事は何でも致ますから自宅內職を望む（臺北匿名女）

す。(伊豆三島町長谷、加藤殘雪女)○妾の許に婦人の情力、不如歸、澄子、悲戀悲歎、女學世界、婦人世界、新文林、女子文壇、など有ますから、諸姉樣の不用書と御交換下さいな、それから 御寫眞添へて下さつた方へは妾のも添へて お送りします、(靜岡縣 榛原郡萩間村 字荒川水野甚作方秀子)○私の手許に手風琴及ハーモニカが ございますが 皆樣の中に「コブシ」「吾輩は 猫である」「青春」「金色夜叉か紅葉全集第六卷」お持ちの方交換して下さいませぬか尙二人女王、新聞賣子、琴曲妙文集、初航海、卯花月夜、愛と心、詩人と戀等ありますから「はつ姿」「戀と戀」「にせ紫」「不如歸」かお送り下さつた方には皆差し上げます(大阪市南區下寺町一丁目大速寺內貞江)○七月の定期增刊美人草お持ちのお方樣は ゆづつて下さいな破れてもいとひませんから御厚情のあるお姉上樣よ お願ひ 申上ます 御禮は 郵便切手て(山城つゞき郡八幡町七九七、八田文子)○慕はしき誌友の皆樣の內にて、 金色夜叉前編か乳姉妹後編、どちらにても宜敷く、然し餘りそんぢたのは御斷り申升が、私の、幻影、乙女の操と交換して下さい(常陸多賀郡南中鄕村小野、村田靜子)○親愛なる諸姉樣方よ私の手許に 小說小弓御所、十六夜日記のくはしくかうぎのついたのと其外日本の少女少女界がありますから 皆樣の內て小說「まだ見ぬ親」か 乳姉妹の下卷とかへて下さいませんかかへて下さる方は御一報をハガきにて…(京橋區松屋町二ノ五野田初美)○私二卷一號から今までの女子文壇 殘らず持つてます御希望の方に御ゆづりいたします 又他の本を御交換下すつてもようございます(野の花)○姉上樣方よ私は小說澤山不用に付交換を乞ふ 雜誌でもよき故交換のかたは先着四名まで 雜誌一册に小說一册差上ます(山形縣西置賜郡 小國本村小坂町中川きみい)○諸遠方の內て文藝倶樂部若しくは家庭小說其他如何なる小說本にても御不用の御方は左記小說と御換へ下さい、 到着の三日以內には必ず送本いたします、ひとり寐、女海賊、おもかげ、戀學生、白浪女、新ほとゝぎす、玉の輿、金色夜叉、女道樂、小猫、筆子、コブシ、心の涙、夜の秘密、天うつ浪(三册)、仇と仇、やどり木、少女の煩悶、愛の神、造花の栞、其他いろ〱あります申込順に御送り申ます。(靜岡縣安倍郡大里村下馬淵森本與三郎方杉山潤)○私の許に「寶花娘」「妻の懺悔」「繪師の戀」「緣不緣」「花紅葉」「深山櫻」「黃菊白菊」等の不用書が、まだ新らしくして居ります、皆樣の內て「麗子夫人」「百合子」「露子夫人」「雪月花」「玉蟲」「美惑新論」「塔影」「澄子」「朝晴」「夢の花」等なるべく新らしき御不用書あらば御交換を願ひます(鹿兒島市上園町四六松長記久)○皆樣の內に金子薰園氏の和歌入門御不用の方がありますなら私の文章新辭典か新體詩入門と御交換下さい(大阪府三島郡茨木町榎浪方春之家)○妾は俳諧鳴東新誌が第二百七十六號から五六册不用のがありますが皆樣の中て古雜誌の御讀みふるしても ありましたら御交換を願ひます(近江國伊香郡 片岡村大字東野第二百五十七番地笠原みの子)○皆樣に新聲(橫瀨夜雨樣の弱者のある)、詩人(同夜雨樣のそらだきのある) おもちてしたら私のハガキ文學、風俗畫報、文章世界などゝおかへを 願ひます(羽後酒田寺町菊池りう子)○姉上樣方の內紅葉全集の中金色夜叉、小猫、次郞島、奇人の旅行、底無湖の秘密等御持なら妾の銀山王、航海譚、奇人の魔法、支那奇談、立身膝栗毛、世界冒險少年譚、波魂濤魄 不如歸、滑稽德川明治史、大軍艦、武者氣質、新曲浦島、新アラビヤナイト等と 御交換願ひます (吳市二川町西本通二丁目一〇二碓井湍浪)

寫眞編物交換

○繪葉書や、 お寫眞の御交換を… お寫眞を送つて下さる方には、 別に羽二重のハンケチ或は私の名入れの指輪を添へて差上ます (群馬縣群馬郡桃井村大字長岡岩田幸次郞宅にて 岩田やす子)○滿天下の御孃樣よ何卒御手紙頂戴なひじつきしなりあみものなどを御惠み下された御方先着二十名の 御姉さんには、 妾の見にくい寫眞に小說繪はがき皆々樣の御望みのを添へて 御送りします (宇都宮在姿川村字下缺下 佐藤きく子)○各國の諸姉上樣御寫眞や錦地の名所寫眞若しくは繪葉書を送りて下さい御禮として 妾の寫眞に會津名所繪葉書一組づゝを 送呈致します(會津柳津町藤松川靜月子)○御寫眞御惠みの方には當地の繪葉書と妾の寫眞を添へて 御返戻いたします未使用の繪葉書 交換も願ひます(千葉縣印旛郡內鄕村高座木石川はな子) ○寫眞御惠みの方には不束な私の寫眞に 繪葉書を返禮致します御願よ近所の方と 交際致し居りましたが是非遠方の方と交際を願ます 一時的は 大きらいよ(千葉縣印旛郡內鄕村高座木山崎とよ子)○誌上の姉上樣寫眞交換及繪はがき下され 離有御禮申上ます未だ妾の寫眞八組及繪ハガキ澤山 ありますから何卒交換して下さい姉樣のがつき次第す

や送ぐ返しますわ（大阪西區松島町一丁目濱側丸山まつ方岡本靜枝子）

諸嬢の交際

○妾は女學校三年の者てすが寫眞及繪葉書の交換を願ます附次第すぐ返信いたしますわ永久に願ます。（大阪松島一丁目濱側丸山まつ方岡本とく子）○誌友の姉上様私も文壇の友となりました何卒永久に繪葉書や玉章や寫眞の交換をお願ひいたします（千葉縣匝瑳郡福岡町平野梅子）○諸友の皆様と御交際を致したう御座います（埼玉縣北足立郡志木町高須登美子）○永久に御見捨無く御交誼下さる様偏に願ます一時的の御方は固く御ことはり申ます御寫眞又エハがき御送りの方には新文林文章世界にて必ず御禮致します（上總國東金町篠原畝司方御營龍子）○繪葉書の交換や文通してくださる御方には室蘭港の繪葉書や土人アイヌの有様を寫した繪はがきをあげますわ（北海道室蘭港千歳町五、渡邊龍吉方渡邊藤枝）○玉章下さいな御返事はきつと致しますよ（北海道函館區惠比須町五一、齋藤重野）○本誌御愛讀諸嬢に告ぐ私の幾妹は四月二十八日腦病のため草葉の露となりました夫に永々諸令嬢の御愛情を蒙りたる事は厚く御禮申上ます尚愚妹の殘せし、リボン、古本、シナリ、各細工物有りますから親愛なる友よ一書下されば何にても御送附申上ます寫眞も御望の方には送ります諸嬢も何にか御送附下されば妹の愛せし各繪葉書三枚以上御送り申上ます（北海道旭川町宮下通二十丁目電燈會社内一戸志輝）○諸嬢に御交際を願ふ妾は當年十八歳てすのよ二年前には東京芝區高輪になりましたのてすが大阪ては友人もな皆く每日淋しく日をおくつております なにとぞ皆々様永久の御交際を願ひます（大阪市天王寺六萬體町八五○森田小夜子）○いと懐き愛讀の諸嬢様方よ私は片田舍にさびしく暮し居り升から何卒行末久しく御交際を願升よ（千葉縣匝瑳郡福岡町江波戸直子）

個人消息

○**野村光子**　牛込區早稻田鶴巻町二百二十八番地に移轉す

○**江澤古登子**　上毛佐波郡赤堀江澤古登子は自今**紫城**と云ふ號を用ゆ

記者曰　此の個人消息欄は誌友の諸嬢が移轉、改號、改名、旅行、疾病、結婚、出産、永眠、其他簡單に報告すべき事を載せます、此等報告を要する諸嬢は遠慮なく申込まれたし

剽窃詩文の注意

▲**第十二號**の分。　○大阪、梅女。實用文天賞「櫻にそへて亡友の母に」は『女學世界』三巻四號より　○長野縣、勝子。日記文秀逸「梅雨日記」は『女學世界』一巻九號より

▲**第十號**の分。　○三重縣、越村ふみゑ。實用文三等「母より寫眞を送られし返し」は本誌二巻四號より

右何れも剽窃せるものと認む。

◎今回以上の注意を與へられたる諸嬢は○靜江○よし子（澁谷、無名子○近江、霞農○山梨縣、新波女○こう女。

寫眞を求む

誌友諸孃の寫眞

本誌讀者諸嬢の御寫眞は每號掲出して居りますが猶ほ盛んにお送りを願ひます

家族の寫眞

誌友諸嬢の家族皆様とお撮りになつた寫眞、或はお子様方の寫眞、何かの紀念にお寫しになつた寫眞などを歡迎いたします

風景の寫眞

諸國の風景、或は風俗、山岳、河流、市街、野外など餘り有り觸れないのをお送り下さい

小集の寫眞

皆へ二三人ても又は多人數ても誌友小集などを催ふされた時の寫眞は必ず掲載いたしますから御寄送下さい

返送と報酬

寫眞は御希望に依り用濟次第に御返しいたします、又寫眞に依りまして本社て是は好いと認めた場合には相當の報酬を差上ますから右記載の寫眞を試みにお送り下さい、玆に改めてお勸めいたします

文壇餘興　髪（かみ）（新課題）

髪に就いて何事かをお話しなさい、髪のことは女てなければ語れません。

▲筒井筒井筒にかけしまろがたけ――髪に就いての幼ない時の思ひ出などは興味が深い▲今は廂髪か、お下げか、銀杏返しか、桃割か、島田か、丸髷か何んな髪に結ふて居ますか▲髪を結ふ時の癖▲髪を結ふ時の心持▲人手を借るか、自分で結ふか▲女髪結のこと▲毛のこと▲髪と流行▲髪をうたつた詩歌のこと▲髪を洗ふ時▲髪と時候▲髪と枕▲女子より見たる男子の頭髪▲老女の髪▲毛髪の多少▲髪の油のこと▲梳くこと▲髪に關係した簪、櫛、切などのこと其外髪に就いての事なら何ても差支えないのです、面白いことを書いて下さい▲十六字詰十行まて、振假名は入りません▲原稿には必ず「文壇餘興髪」と書き添えること▲懸賞は丙種▲しめきりは本月二十日

雜報

▲原稿山積

「文壇の光」の原稿は山のやうに來て居ます、いよく今から選評に着手します、發行は來月十五日、好い冊子をこしらへやうと思ひますからお待ち下さい。

▲安井哲子女史の歸朝

曾ては暹羅の皇室に聘せられ、其後英國に留學中であつた安井哲子女史は八月十五日無事歸朝された、今後は學習院女學部に入りて教鞭を執られるとの事です。

▲文壇近事

〇雜誌『明星』は百號で廢刊するさうです、社中の平野萬里氏等は新たに別の雜誌を起すと〇都會詩社といふのが結ばれた、社中は蘆葉、醉茗、花外、白星、林外、臥城の六人になつてゐます〇木下尙江、人見東明氏等の主幹で『新天地』と云ふ雜誌が其中に出ます、大きな雜誌ださうです〇『秀才文壇』では八月末日締切で大いに靑年の新作を募り『紅楓』と云ふ增刊を出します〇九月一日發刊の『文庫』新秋號には靑年文士の夕暮を書いた作が澤山あるさうです

懸賞贈額

▲甲種（短篇小說 美文）
天賞…金參圓
地賞…金壹圓五拾錢
人賞…金七拾錢

▲乙種（お伽噺 日記文 新論文 賀用文 新體詩）
天賞…金貳圓
地賞…金八拾錢
人賞…金四拾錢

▲丙種（和歌 俳句 短文 圖畵 餘興 滑稽 歌謠 學校生活）
天賞…金壹圓
地賞…金五拾錢
人賞…金貳拾錢

〇各種とも發表翌月廿日に總べて正金を以て贈呈す

女子文壇

毎月一回一日發行其外定期增刊（三、五、七、十一）四回發行（月十五日）臨時增刊（四月十月）貳回發行（例號二倍）

定價

一冊（定期百廿頁）	前金拾錢	郵税共　計金拾壹錢
九冊（增刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同　計金壹圓〇五錢
十八冊（增刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同　計金貳圓
六冊（增刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同　計金六拾三錢
十二冊（增刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同　計金壹圓貳拾錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢增すと
郵便切手代用壹割增〇收入印紙謝絶

〔備考〕
〇定期及增刊は各拾錢郵税壹錢
〇臨時增刊は金貳拾錢郵税貳錢

▲女子文壇社の郵便振替貯金口座は――第壹七貳九番

明治四十一年八月廿九日印刷
明治四十一年九月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　〇東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

●下り腹止めヘルプは醫界理想の良劑あり

ヘルプは（内科無前の名醫醫學博士伯村貞一先生が腸胃病に關し研鑽多年漸くにして完成せられたる醫界理想の固腸錠劑なり

ヘルプは（文明的の錠劑なれば舊來の糊葛等にて固めたる丸藥の如く胃腸を害せずして直に水分に溶解す隨て効驗神速なり



効能（●腸加答兒●時候あたり●水あたり●赤痢●虎列剌●食腸等總て腸胃を整へ下痢を止む

定價　十錢　廿錢　卅錢　五十錢　一圓

家庭に（ヘルプの如き完全なる下痢止め藥の準備あれば夜中突然發生せし時も直ちに適用して輕症の内に全治し得るを……此準備なき爲め手遲れとなるは屢々聞く處にして實に慨嘆の極なり

●下り腹止めヘルプは家庭の常備藥あり

本舗　東京日本橋區通四丁目　大阪大寶寺町堺筋　津村順天堂

【東京秀英舍印刷】

女子文壇　定價　無比　金拾錢　郵税壹錢